

市道古浦西長江線道路整備事業に伴う発掘調査報告書 1

白 畑 遺 跡  
廻 り 遺 跡

平成28(2016)年1月

島根県松江市教育委員会  
公益財団法人松江市スポーツ振興財団







市道古浦西長江線道路整備事業に伴う発掘調査報告書 1

白 畑 遺 跡  
廻 り 遺 跡

平成28(2016)年1月

島根県松江市教育委員会  
公益財団法人松江市スポーツ振興財団



## 例　　言

1. 本書は、平成 25、26 年度に委託を受けた、市道古浦西長江線道路整備事業に伴う白烟遺跡、廻り遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本書で報告する発掘調査は、松江市土木課から松江市教育委員会が依頼を受け、公益財団法人松江市スポーツ振興財団が実施した。
3. 本調査地の名称・所在地は以下のとおりである。

(名 称) 白烟遺跡  
(所在地) 島根県松江市鹿島町古浦白烟 319、風呂谷 321、321-1、321-2、321-3、  
322-1  
(名 称) 廻り遺跡  
(所在地) 島根県松江市西長江町 468、477-2

### 4. 現地調査の期間

白烟遺跡 平成 25 年 7 月 16 日～平成 25 年 9 月 25 日  
廻り遺跡 平成 26 年 11 月 26 日～平成 27 年 1 月 23 日

### 5. 開発面積及び調査面積

開発面積 73,000m<sup>2</sup>  
白烟遺跡 調査面積 72.0m<sup>2</sup>  
廻り遺跡 調査面積 246.0m<sup>2</sup> (1 区 : 127.6m<sup>2</sup>、2 区 : 118.4m<sup>2</sup>)

### 6. 調査組織

依頼者 松江市土木課  
主体者 松江市教育委員会

#### 平成 25 年度【白烟遺跡発掘調査】

事務局	松江市教育委員会	教 育 長	清 水 伸夫
"	文化財課	課 長	錦織 慶樹
"	" 調査係	係 長	赤澤 秀則
"	"	専門企画員	穴道 元
"	"	副主任	徳永 隆
調査指導	島根県教育庁	文化財課	調整監査
実施者	公益財団法人松江市スポーツ振興財団	理 事 長	清 水 伸夫
		埋蔵文化財課	課 長
			三島 秀幸
		" 調査係	係 長
			古藤 博昭
		" 調査員	廣瀬 貴子 (担当者)
		" 調査補助員	門脇 祐介

平成 26 年度【継り遺跡発掘調査】

事務局	松江市教育委員会	教 育 長	清水 伸夫
	松江市歴史まちづくり部	部 長	安田 憲司
	〃 文化財統括官 (埋蔵文化財調査室長兼務)	錦織 康樹	
	〃 まちづくり文化財課	課 長	永島 真吾
	〃〃 埋蔵文化財調査室 調査係 係 長	赤澤 秀則	
	〃〃〃〃 専門企画員	宍道 元	
	〃〃〃〃 主 任	川西 学	
調査指導	島根県教育庁	文 化 財 課	主 幹 深田 浩
	島根県古代出雲歴史博物館	交 流 普 及 課	課 長 柳浦 俊一
実施者	公益財団法人松江市スポーツ振興財団	理 事 長	清水 伸夫
		埋蔵文化財課	課 長 三島 秀幸
		〃 調査係 係 長	古藤 博昭
		〃〃 調 査 員	廣濱 貴子 (担当者)
		〃〃 調査補助員	原 英誉

平成 27 年度【報告書作成業務】

主体者	松江市教育委員会	教 育 長	清水 伸夫
事務局	松江市歴史まちづくり部	部 長	安田 憲司
	〃 まちづくり文化財課	課 長	永島 真吾
	〃〃 専門幹 (埋蔵文化財調査室長兼務)	飯塚 康行	
	〃〃 埋蔵文化財調査室 調査係 係 長	赤澤 秀則	
	〃〃〃〃 主 任	徳永 隆	
	〃〃〃〃嘱 託	門脇 誠也	
実施者	公益財団法人松江市スポーツ振興財団	理 事 長	清水 伸夫
		埋蔵文化財課	課 長 曾田 健
		〃 調査係 係 長	川西 学
		〃〃 調 査 員	廣濱 貴子 (担当者)
		〃〃 調査補助員	門脇 祐介

7. 調査に携わった発掘作業員

井川洋、岩成敏章、岩成博美、内田義、大西将祺、岡崎雄二郎、加藤恵治、向村生人  
深津靖博、福嶋利夫、福田進、福田紘治、船越律、峰谷一雄、柳浦利成、和田章

8. 本書に記載した遺物の復元・実測・浄書、遺構の浄書は以下の者が行った。

小原明美、金坂昇、角優佳、須藤佳奈子

9. 報告書作成にあたっては、以下の方々から多大なご指導、ご教示、ご協力を頂いた。記して感謝の意を表したい。(順不同、敬称略)

- 島根県教育庁文化財課 埋蔵文化財調査センター 企画幹 柳浦俊一  
島根県教育庁文化財課 古代文化センター 専門研究員 目次謙一
10. 出土遺物のうち銭貨、金属製品については、島根県立古代出雲歴史博物館に御協力頂き、X線撮影を行った。
11. 自然科学分析（第4章・第6節）については、文化財調査コンサルタント株式会社に委託した。
12. 本書の執筆は第1章を徳永隆（松江市埋蔵文化財調査室）が、第2～4章を廣瀬が、第4章第6節を渡邊正巳（文化財コンサルタント）が執筆した。また、編集は松江市埋蔵文化財調査室、渡邊正巳（文化財コンサルタント）の協力を得て廣瀬が行った。
13. 本書における土器区分、分類、編年は以下を参照した。

#### [縄文土器]

- 柳浦俊一 2003 「山陰中部域における縄文時代後期土器の地域性—とくに「中津式」の小地域性について—」『立命館大学考古学論集Ⅲ』立命館大学考古学論集刊行会
- 柳浦俊一 2010 「各地域の土器編年 4. 山陰」「西日本の縄文土器 後期」真陽社
- 柳浦俊一 2000 「山陰地方縄文時代後期初頭～中葉の土器編年—中津・福田K2式土器群、緑帶文土器群の地域編年—」『島根考古学会誌』第17集 島根考古学会
- 柳浦俊一 1994 「島根県の縄文時代後期中葉～晩期土器の概要—飯石郡頃原町森遺跡出土土器を中心に—」『島根考古学会誌』第11集 島根考古学会

#### [弥生土器]

- 赤澤秀則 1992 「講武地区県営圃場整備事業発掘調査報告書5 南講武草田遺跡」鹿島町教育委員会

- 松本岩雄 1992 「出雲・隱岐地域」『弥生土器の様式と編年 山陽・山陰編』木耳社

#### [土師器]

- 松山智弘 1991 「出雲における古墳時代前半期の土器の様相—大東式の再検討—」『島根考古学会誌』第8集 島根考古学会

#### [須恵器]

- 大谷晃二 1994 「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌』第11集 島根考古学会

#### [陶磁器]

- 大橋康二 2000 「九州陶磁の編年—九州近世陶磁学会10周年記念—」九州近世陶磁学会

#### [五輪塔]

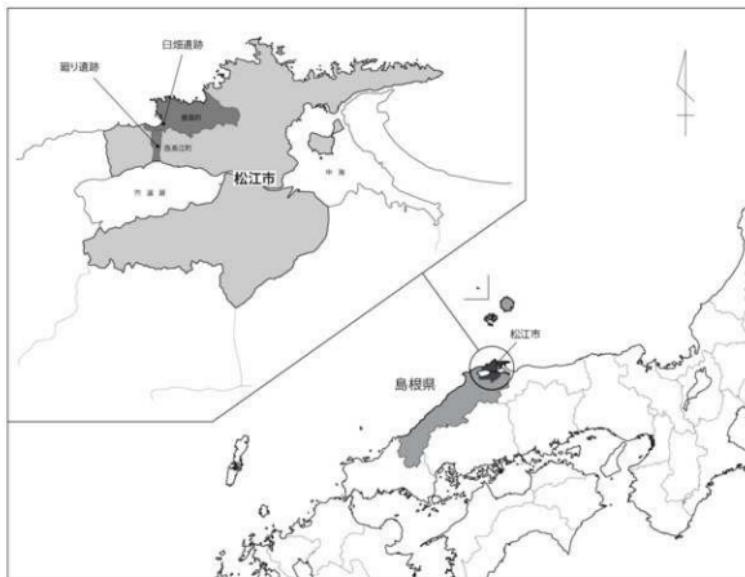
- 間野大丞 1998 「中世石造物の調査方法について—五輪塔、宝篋印塔を中心にして—」『来待ストーン研究1』来待ストーンミュージアム

#### [宝篋印塔・墓標]

- 池上悟 2001 「第3章 妙正寺跡墓地調査の概要 第4節 妙正寺跡の石造物の概要 3. 墓塔の様相 4. 墓標の様相」『石見銀山遺跡石造物調査報告書1 石見銀山〔妙正寺跡〕』島根県教

育委員会・大田市教育委員会

14. 本書に掲載する土層は『新版 標準土色帖』農林水産省農林水産技術会議事務局監修：財団法人日本色彩研究所 色票監修に従って表記した。
15. 本書における方位は公共座標北を示し、座標値は世界測地系に準拠した公共座標第III系の値である。また、レベルは海拔標高を示す。
16. 本書における遺構記号は以下のとおりである。  
SK：土坑 ST：墓壙 SB：掘立柱建物跡 SI：竪穴建物跡 SD：溝 SP：柱穴
17. 本書の遺構番号は調査時に設定したものを報告書作成にあたり、種別の番号に振り直した。  
また、遺構番号は各遺跡毎に連番で記載し、遺構番号、旧遺構番号、遺構の規模、出土遺物については遺跡毎に表を掲載する。
18. 本書に記載した縄文土器の拓本は基本外面のみとし、内面は調整痕が明瞭でナデ以外のものを掲載した。
19. 出土遺物、実測図及び写真等の資料は松江市教育委員会で保管している。
20. 島根県・松江市の位置を下図に示した。



島根県・松江市位置図

# 目 次

## 例言

第1章 調査に至る経緯 ..... 1

第2章 位置と歴史的環境 ..... 3

    第1項 地理的環境 ..... 3

    第2項 歴史的環境 ..... 3

第3章 白畠遺跡 ..... 7

    第1節 調査の方法 ..... 7

    第2節 調査の概要と基本層序 ..... 8

    第3節 遺構と遺物 ..... 11

        第1項 墓域 ..... 11

        第2項 その他の遺構・遺物 ..... 27

    第4節 総括 ..... 30

第4章 回り遺跡 ..... 41

    第1節 調査の方法 ..... 41

    第2節 調査の概要と基本層序 ..... 42

    第3節 1区の調査 ..... 45

        第1項 遺構と遺物 ..... 45

        第4節 2区の調査 ..... 51

        第1項 遺構と遺物 ..... 51

        第5節 遺構外出土遺物 ..... 55

        第6節 自然科学分析 ..... 57

            第1項 回り遺跡発掘調査に係る AMS 年代測定及び樹種同定 ..... 57

        第7節 総括 ..... 60

## 写真図版

## 報告書抄録

## 挿図目次

第 1 図	開発範囲・調査範囲図	2	第 40 図	ST20 実測図	23
第 2 図	島根平島地域の地形観察図	3	第 41 図	ST20 出土遺物実測図	23
第 3 図	周辺の道路分布図	6	第 42 図	ST21 実測図	23
第 4 図	白堀跡調査実測図	7	第 43 図	ST21 出土遺物実測図	24
第 5 図	試掘トレンチ出土遺物実測図	8	第 44 図	ST22 実測図	25
第 6 図	白堀跡道構全体図	9	第 45 図	ST22 出土遺物実測図	25
第 7 図	調査区東西上層断面図	10	第 46 図	ST23 実測図	26
第 8 図	ST01 実測図	11	第 47 図	ST23 出土遺物実測図	26
第 9 図	ST01 出土遺物実測図	12	第 48 図	墓塔・墓室・自然石積出状況図	27
第 10 図	ST02・ST03 実測図	12	第 49 図	墓塔・墓室実測図	28
第 11 図	ST02・ST03 出土遺物実測図	13	第 50 図	通路実測図	29
第 12 図	ST04 実測図	13	第 51 図	通路出土遺物実測図	29
第 13 図	ST05 実測図	13	第 52 図	道構外丘陵上遺物実測図	30
第 14 図	ST05 出土遺物実測図	14	第 53 図	道構外丘陵上遺物実測図	41
第 15 図	ST06 出土遺物実測図	14	第 54 図	城トレンチ上遺物実測図	41
第 16 図	ST06 出土遺物実測図	15	第 55 図	縦り道構 1・K・2 区道構全体図	43
第 17 図	ST07 実測図	15	第 56 図	1 区道構全体断面図	44
第 18 図	ST08 実測図	15	第 57 図	1 区道構全体図	46
第 19 図	ST08 実測図	15	第 58 図	SB01 実測図	47
第 20 図	ST08 出土遺物実測図	15	第 59 図	SB01 出土遺物実測図	47
第 21 図	ST10 実測図	16	第 60 図	SB02 実測図	48
第 22 図	ST10 出土遺物実測図	16	第 61 図	SK01 実測図	48
第 23 図	ST11 実測図	17	第 62 図	SK01 出土遺物実測図	49
第 24 図	ST11 出土遺物実測図	17	第 63 図	SK02 実測図	49
第 25 図	ST12 実測図	17	第 64 図	SK02 出土遺物実測図	49
第 26 図	ST12 出土遺物実測図	17	第 65 図	SK03 実測図	49
第 27 図	ST13 実測図	18	第 66 図	SK03 出土遺物実測図	49
第 28 図	ST13 出土遺物実測図	18	第 67 図	SD01・02・03・04 実測図	50
第 29 図	ST14 実測図	19	第 68 図	SD01・02・03・04 出土遺物実測図	50
第 30 図	ST14 出土遺物実測図	19	第 69 図	2 区道構全体図	52
第 31 図	ST15 実測図	20	第 70 図	SB01 実測図	53
第 32 図	ST15 出土遺物実測図	20	第 71 図	SB01 出土遺物実測図	54
第 33 図	ST16 実測図	20	第 72 図	上坑群実測図	54
第 34 図	ST16 出土遺物実測図	21	第 73 図	上坑群出土遺物実測図	55
第 35 図	ST17 実測図	22	第 74 図	1・K・2 区道構外出土遺物実測図	56
第 36 図	ST17 出土遺物実測図	22	第 75 国	調査区平面図及び試料採取地点	57
第 37 図	ST18 実測図	22	第 76 国	附年較年図	58
第 38 図	ST19 実測図	22	第 77 国	縦り道構道構変遷図	61
第 39 図	ST19 出土遺物実測図	22			

## 挿表目次

表 1	墓壙内出土品（錢貨・煙管・毛抜・刀物・鍼）	59	表 5	分析試料一覧表	57
表 2	島根県内の近世墓	33	表 6	AMS 年代測定結果	58
表 3	白堀道構一概観	34	表 7	島根県の空堀建物一覧表	60
表 4	白堀道構遺物観察表	35	表 8	縦り道構道構一覧表	64
			表 9	縦り道構遺物観察表	66

## 写真図版目次

本文中写真	樹種別定園図	59	版面 12	ST09 出土遺物、ST10 出土西側状況、ST11 出土遺物	
版面 1	白堀道構調査前全貌（北東から）		版面 13	ST12 出土遺物、ST13 出土遺物	
版面 2	調査区中央から南側完掘状況（北東から）		版面 14	ST14 出土遺物、ST15 出土遺物	
版面 3	島根県内の近世墓	33	版面 15	ST16 出土遺物、ST17 出土遺物	
版面 4	白堀道構全体図		版面 16	ST18 出土遺物、ST20 出土遺物	
版面 5	ST01 遺物出土状況、ST01 完掘状況（北東から）		版面 17	ST21 出土遺物	
版面 6	ST02 遺物出土状況、ST03 遺物出土状況		版面 18	ST22 出土遺物、ST23 出土遺物	
版面 7	ST02・ST03 完掘状況（北西から）		版面 19	ST09 出土遺物、ST10 出土西側状況（北東から）	
版面 8	ST04 完掘状況（東から）		版面 20	ST12 出土遺物、ST13 出土遺物	
版面 9	ST05 遺物出土状況、ST05 完掘状況（北西から）		版面 21	ST14 出土遺物、ST15 出土遺物	
版面 10	ST06 遺物出土状況、ST06 完掘状況（南東から）		版面 22	ST16 出土遺物、ST17 出土遺物	
版面 11	ST07・ST08 完掘状況（北西から）		版面 23	ST18 出土遺物、ST19 完掘状況（北西から）	
	ST09 完掘状況（南東から）		版面 24	ST21 出土遺物	
	ST10 遺物出土状況、ST10 完掘状況（北から）		版面 25	SK09（南東から）、SK10（南西から）	
	ST11 遺物出土状況、ST11 完掘状況（北から）			SK09（南東から）、SK10（南西から）	
	ST12 遺物出土状況、ST12 完掘状況（南西から）			SK11（東から）、SK12（北西から）	
	ST13 完掘状況（南東から）、ST15 完掘状況（北西から）			SP49（北西から）、SP52（北東から）	
	ST14 遺物出土状況、ST14 完掘状況（北東から）			SP50（南西から）、SP51（南東から）	
	ST15 遺物出土状況、ST15 完掘状況（南東から）			SP04 杖痕遺物出土状況（南西から）	
	ST16 遺物出土状況、ST16 完掘状況（南東から）			SB02（北から）、SP07（南西から）	
	ST17 遺物出土状況、ST17-ST18 完掘状況（北東から）			SP08（南西から）、SK01（東から）	
	ST19 遺物出土状況、ST19 完掘状況（北西から）			1 区北側完掘状況（北東から）	
	ST20 遺物出土状況、ST20 完掘状況（南東から）			1 区西南側完掘状況（南西から）	
	ST21 遺物出土状況、ST21 完掘状況（北東から）			2 区完掘状況（南西から）	
	ST22 遺物出土状況			SI01 完掘状況（東から）	
	ST22・ST23 完掘状況（北東から）			SP49（北西から）、SP52（北東から）	
	墓塔・墓室・自然石積出状況（北東から）			SP50（南西から）、SP51（南東から）	
	通路櫛出土状況（北東から）			SP04 杖痕遺物出土状況（南西から）	
	試掘トレンチ出土遺物、ST01 出土遺物			SB02（北から）、SP07（南西から）	
	ST02・ST03 出土遺物、ST05 出土遺物			SP08（南西から）、SK01（東から）	
	ST06 出土遺物			1 区北側完掘状況（北東から）	
				1 区西南側完掘状況（南西から）	
				2 区完掘状況（南西から）	
				SI01 完掘状況（東から）	
				SP49（北西から）、SP52（北東から）	
				SP50（南西から）、SP51（南東から）	
				SP04 杖痕遺物出土状況（南西から）	
				SB02（北から）、SP07（南西から）	
				SP08（南西から）、SK01（東から）	
				1 区北側完掘状況（北東から）	
				1 区西南側完掘状況（南西から）	
				2 区完掘状況（南西から）	
				SI01 完掘状況（東から）	
				SP49（北西から）、SP52（北東から）	
				SP50（南西から）、SP51（南東から）	
				SP04 杖痕遺物出土状況（南西から）	
				SB02（北から）、SP07（南西から）	
				SP08（南西から）、SK01（東から）	
				1 区北側完掘状況（北東から）	
				1 区西南側完掘状況（南西から）	
				2 区完掘状況（南西から）	
				SI01 完掘状況（東から）	
				SP49（北西から）、SP52（北東から）	
				SP50（南西から）、SP51（南東から）	
				SP04 杖痕遺物出土状況（南西から）	
				SB02（北から）、SP07（南西から）	
				SP08（南西から）、SK01（東から）	
				1 区北側完掘状況（北東から）	
				1 区西南側完掘状況（南西から）	
				2 区完掘状況（南西から）	
				SI01 完掘状況（東から）	
				SP49（北西から）、SP52（北東から）	
				SP50（南西から）、SP51（南東から）	
				SP04 杖痕遺物出土状況（南西から）	
				SB02（北から）、SP07（南西から）	
				SP08（南西から）、SK01（東から）	
				1 区北側完掘状況（北東から）	
				1 区西南側完掘状況（南西から）	
				2 区完掘状況（南西から）	
				SI01 完掘状況（東から）	
				SP49（北西から）、SP52（北東から）	
				SP50（南西から）、SP51（南東から）	
				SP04 杖痕遺物出土状況（南西から）	
				SB02（北から）、SP07（南西から）	
				SP08（南西から）、SK01（東から）	
				1 区北側完掘状況（北東から）	
				1 区西南側完掘状況（南西から）	
				2 区完掘状況（南西から）	
				SI01 完掘状況（東から）	
				SP49（北西から）、SP52（北東から）	
				SP50（南西から）、SP51（南東から）	
				SP04 杖痕遺物出土状況（南西から）	
				SB02（北から）、SP07（南西から）	
				SP08（南西から）、SK01（東から）	
				1 区北側完掘状況（北東から）	
				1 区西南側完掘状況（南西から）	
				2 区完掘状況（南西から）	
				SI01 完掘状況（東から）	
				SP49（北西から）、SP52（北東から）	
				SP50（南西から）、SP51（南東から）	
				SP04 杖痕遺物出土状況（南西から）	
				SB02（北から）、SP07（南西から）	
				SP08（南西から）、SK01（東から）	
				1 区北側完掘状況（北東から）	
				1 区西南側完掘状況（南西から）	
				2 区完掘状況（南西から）	
				SI01 完掘状況（東から）	
				SP49（北西から）、SP52（北東から）	
				SP50（南西から）、SP51（南東から）	
				SP04 杖痕遺物出土状況（南西から）	
				SB02（北から）、SP07（南西から）	
				SP08（南西から）、SK01（東から）	
				1 区北側完掘状況（北東から）	
				1 区西南側完掘状況（南西から）	
				2 区完掘状況（南西から）	
				SI01 完掘状況（東から）	
				SP49（北西から）、SP52（北東から）	
				SP50（南西から）、SP51（南東から）	
				SP04 杖痕遺物出土状況（南西から）	
				SB02（北から）、SP07（南西から）	
				SP08（南西から）、SK01（東から）	
				1 区北側完掘状況（北東から）	
				1 区西南側完掘状況（南西から）	
				2 区完掘状況（南西から）	
				SI01 完掘状況（東から）	
				SP49（北西から）、SP52（北東から）	
				SP50（南西から）、SP51（南東から）	
				SP04 杖痕遺物出土状況（南西から）	
				SB02（北から）、SP07（南西から）	
				SP08（南西から）、SK01（東から）	
				1 区北側完掘状況（北東から）	
				1 区西南側完掘状況（南西から）	
				2 区完掘状況（南西から）	
				SI01 完掘状況（東から）	
				SP49（北西から）、SP52（北東から）	
				SP50（南西から）、SP51（南東から）	
				SP04 杖痕遺物出土状況（南西から）	
				SB02（北から）、SP07（南西から）	
				SP08（南西から）、SK01（東から）	
				1 区北側完掘状況（北東から）	
				1 区西南側完掘状況（南西から）	
				2 区完掘状況（南西から）	
				SI01 完掘状況（東から）	
				SP49（北西から）、SP52（北東から）	
				SP50（南西から）、SP51（南東から）	
				SP04 杖痕遺物出土状況（南西から）	
				SB02（北から）、SP07（南西から）	
				SP08（南西から）、SK01（東から）	
				1 区北側完掘状況（北東から）	
				1 区西南側完掘状況（南西から）	
				2 区完掘状況（南西から）	
				SI01 完掘状況（東から）	
				SP49（北西から）、SP52（北東から）	
				SP50（南西から）、SP51（南東から）	
				SP04 杖痕遺物出土状況（南西から）	
				SB02（北から）、SP07（南西から）	
				SP08（南西から）、SK01（東から）	
				1 区北側完掘状況（北東から）	
				1 区西南側完掘状況（南西から）	
				2 区完掘状況（南西から）	
				SI01 完掘状況（東から）	
				SP49（北西から）、SP52（北東から）	
				SP50（南西から）、SP51（南東から）	
				SP04 杖痕遺物出土状況（南西から）	
				SB02（北から）、SP07（南西から）	
				SP08（南西から）、SK01（東から）	
				1 区北側完掘状況（北東から）	
				1 区西南側完掘状況（南西から）	
				2 区完掘状況（南西から）	
				SI01 完掘状況（東から）	
				SP49（北西から）、SP52（北東から）	
				SP50（南西から）、SP51（南東から）	
				SP04 杖痕遺物出土状況（南西から）	
				SB02（北から）、SP07（南西から）	
				SP08（南西から）、SK01（東から）	
				1 区北側完掘状況（北東から）	
				1 区西南側完掘状況（南西から）	
				2 区完掘状況（南西から）	
				SI01 完掘状況（東から）	
				SP49（北西から）、SP52（北東から）	
				SP50（南西から）、SP51（南東から）	
				SP04 杖痕遺物出土状況（南西から）	
				SB02（北から）、SP07（南西から）	
				SP08（南西から）、SK01（東から）	
				1 区北側完掘状況（北東から）	
				1 区西南側完掘状況（南西から）	
				2 区完掘状況（南西から）	
				SI01 完掘状況（東から）	
				SP49（北西から）、SP52（北東から）	
				SP50（南西から）、SP51（南東から）	
				SP04 杖痕遺物出土状況（南西から）	
				SB02（北から）、SP07（南西から）	
				SP08（南西から）、SK01（東から）	
				1 区北側完掘状況（北東から）	
				1 区西南側完掘状況（南西から）	
		</td			

## 第1章 調査に至る経緯

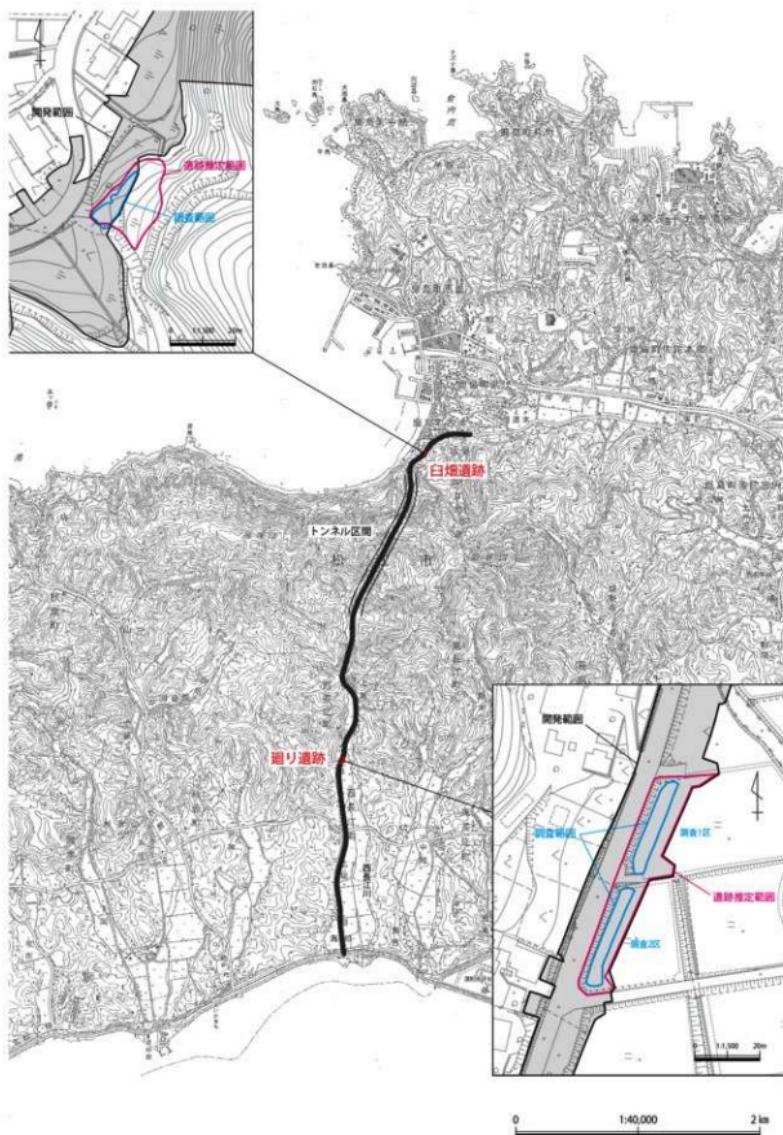
市道古浦西長江線は、松江市鹿島町に所在する原子力発電所での災害時、周辺住民が円滑に避難できるよう分散誘導するルートとして、また、産業・観光にも資する重要路線として、松江市により計画された道路整備事業である。路線では、日本海側（鹿島町）にあった林道と、宍道湖側（西長江町）にあった農道を整備してトンネルで繋ぎ、島根半島を南北に貫く、総延長4.7kmに及ぶものである。

この事業計画範囲において、平成22年7月に埋蔵文化財の有無照会が松江市教育委員会へなされた。これを受け、松江市文化財課（平成26年度からまちづくり文化財課）において、当該事業範囲の分布調査を行ったところ、2箇所の周知の遺跡（「岩屋古墳」、「M10遺跡」）が含まれることと、16箇所の要試掘調査範囲が確認された。このことから、改めて事業計画について開発部局と協議を行った結果、横穴式石室が部分的に残る「岩屋古墳」については、遺跡の重要性を鑑み事業範囲から外れるように設計が変更された。しかし、内容が不明確であった「M10遺跡」と要試掘箇所と判断された場所については、用地上の要件が整い次第、順次試掘調査を実施し、遺跡の有無及び内容とその範囲について確認することとなった。

まず、事業上先行して施工実施が予定された鹿島町側で、要試掘箇所と判断された6箇所について平成24年6月に試掘調査を実施した。この結果、うち1箇所において弥生時代の遺物や近世墓が確認されたことから、当該範囲について平成25年4月に遺跡の発見通知がなされ、「白畠遺跡」として周知されることとなった。このため、開発部局と当該遺跡の保護について協議を行ったところ、計画変更により遺跡南半が事業区域外となったものの、遺跡北半は削平を受けることが避けられないとの判断に至ったため、同年5月に発掘通知が提出され、県教育委員会との協議の結果、発掘調査の勧告を受けることとなった。これにより、「白畠遺跡」については、平成25年7月から同年9月にかけて本調査を実施するに至ったものである。

次に、西長江町側で要試掘箇所として判断された10箇所について、平成25年10・11月に試掘調査を実施した。この結果、うち1箇所で縄文時代から弥生時代の集落跡と推定される遺跡が確認されたことから、平成25年11月に遺跡の発見通知がなされ、「廻り遺跡」として周知されることとなった。また、散布地として当初点的に周知されていた「M10遺跡」についても、その周囲において試掘調査を実施し（平成26年12月にも追加調査を実施）、遺跡の範囲が南北に広がることが確認された。このことから、範囲の拡大と合わせて、遺跡の名称を「広垣遺跡」に変更する手続きを、平成27年4月に行った。以上、西長江町側の事業範囲において、2つの遺跡の存在が明らかになったことから、開発部局とこれらの遺跡について協議を行った。この結果、計画変更は困難であるとの判断に至ったことから、まず「廻り遺跡」について平成26年10月に発掘通知が提出され、このことについて県教育委員会と協議を行ったところ、発掘調査の勧告を受けることとなった。これにより、「廻り遺跡」については、平成26年11月から平成27年1月にかけて本調査を実施するに至ったものである。

なお、「広垣遺跡」については、現在調査中であり、別途改めて報告書を刊行する予定のため、ここでの説明は割愛する。



第1図 開発範囲・調査範囲図 (S=1:40,000)

第2章 位置と歴史的環境

## 第1項 地理的環境（第2圖）

白烟遺跡、廻り遺跡は、松江市の北側、東西方向に延びる島根半島に位置する。島根半島は地形的配列からみると、東北東—西南西に延びる三列の山地から構成され、西南西側に弥山山地、中央部に本宮山山地、東北東に三坂山山地が連なる。本宮山山地には本宮山をはじめ朝日山や経塚山など標高200～400mの山々がみられる。

白畠遺跡は、松江市鹿島町古浦に所在する。古浦には日本海に面して東西 900 m、南北 600 m の古浦砂丘が存在し、その一帯に集落がみられる。調査地は古浦砂丘の南縁、朝日山から北西に派生する丘陵平坦部に位置し、標高 22 ~ 23 m を測る。北西側には県道が通り、その先に白畠の集落がみられ、日本海を眺望することができる。

廻り遺跡は、本宮山山地南側、同市西長江町に所在する。朝日山から南西側に派生する低丘陵と経塚山から南東側に派生する低丘陵の間にみられる細長い谷沿いに位置し、穴道湖北岸まで 1.6Km を測る。谷部から穴道湖北岸にかけて水田が広がり、縁辺部に集落が存在している。調査地の現況は水田であり、その西側を南北に市道が通る。また、東側には西長江川が流れ、穴道湖に注いでいる。



## 第2項 歷史的環境（第3圖）

ここでは白畠遺跡、廻り遺跡を含む島根半島中央部の遺跡について時代ごとに概略を述べる。

**旧石器時代** 旧石器時代の遺物が確認された遺跡は少なく、穴道湖北側に所在する古曾志平廻田遺跡（39）から後期のナイフ形石器が出土している。

繩文時代 佐陀川沿いには1933年に国指定遺跡となった佐太講武貝塚（17）がある。繩文時代前期において周辺は内海と考えられ、貝塚からはヤマトシジミを中心とする汽水産の貝類の他、コイ、フナ科の魚骨、堅果物が出土していることから、恵まれた環境の中で生活が営まれていたことが窺われる。古曾志善坊遺跡（40）では竪穴建物跡を確認し、小形石匙等が出土している。また、二部遺跡（42）の自然流路より後期から晩期の遺物が出土しており、周辺に遺構の存在が想定されている。他

に堀部第1遺跡（49）や北講武氏元遺跡（50）から後期や晚期の土器が出土し、後谷遺跡（37）や穴道湖湖底遺跡（47）では縄文土器が採集されている。

**弥生時代** 古浦砂丘には古浦砂丘遺跡（5）が存在する。前期から中期前葉にかけて埋葬が行われ、砂丘の下から60体以上の人骨が発見された。多くの人骨のなかには頭蓋骨の額部分に青銅の縁錆が付着したものがみられ、また、卜骨や貝輪、土器など多くの遺物が出土している。古浦砂丘遺跡には並行する時期の遺跡として堀部第1遺跡がある。墓の上に標石を置く57基の墳墓が確認され、遠賀川系土器のみを供獻している。銅鐸や銅劍が出土した志谷奥遺跡（25）、弥生時代中期から後期の木製品が多量に出土した稗田遺跡（4）、弥生時代の住居跡が検出された大勝間山城跡（18）、弥生前期から古墳時代前期の集落跡が確認された佐太前遺跡（22）などが確認されている。他にスモト遺跡（43）や二部遺跡から弥生土器が出土している。

**古墳時代** 古墳時代には講武盆地をめぐる丘陵上に数多くの古墳が築造されている。なかでも奥才古墳群（51）は前期から後期における68基の群集墳で、「奥才型木棺」と仮称している長い砾敷きの木棺を主室と副室に区切った特徴的な主体部をもち、青銅鏡や大刀など多くの副葬品が出土していることから、有力者の埋葬施設と考えられている。奥才古墳群の北東側丘陵には柄鏡型の前方後円墳を含み、10余基からなる鶴灘山古墳群（19）があり、未調査であるが前期に位置づけられている。他に講武盆地西側に名分丸山古墳群（15）が存在する。釜代古墳群（45）は穴道湖北岸に位置し、1号墳の主体部から内行花文鏡や勾玉、ガラス小玉が出土している。

中期になると大形古墳が盛んに造られるようになり、国指定史跡の丹花庵古墳（41）や古曾志大谷古墳群（38）が知られている。丹花庵古墳は一辺47m、高さ3.5m、葺石や埴輪を有する方墳で、主体部に長持型石棺を埋置している。古曾志大谷古墳群の1号墳は穴道湖を眺望できる低丘陵に位置し、葺石や埴輪を廻らせる全長45.7mの前方後方墳である。

後期になると中期にみられたような大型古墳は造られなくなり、横穴墓が多く造られるようになる。日本海に面する丘陵上に寺尾横穴群（9）や鹿島町と生馬町の境にある高田尾横穴墓（52）があり、高田尾横穴墓からは、人骨と金銅製の圭頭大刀が出土している。また、穴道湖に近い低丘陵には釜代横穴（44）や北小原横穴群（46）が存在する。北小原横穴は整正家形の玄室内に2基の家形石棺を並べ、玄門を「**ノ**」の浮彫りのある板石で閉塞している。他に、東長江町の筆ノ尾横穴群（28）から人骨や須恵器、土師器が出土している。

**古代（奈良時代・平安時代）** 鹿島町北講武、盆地南側の水田には講武川流域条里制遺跡（24）が確認されている。10世紀頃に条里制が敷かれたと考えられており、明治22年調整の字限地図及び現地の景況から察知される当地区条里制遺構の範囲図には、条里制地域に普通みられる三ノ坪や八ヶ坪などの坪名が残っている。西長江町にもかつて西長江地区条里制遺跡（33）が存在していたとされるが、現在は消滅している。

窯跡としては、常楽寺瓦窯跡（35）が奈良時代の瓦窯跡として知られているが、焼き損じの瓦が出土しているだけで、窯本体は確認されていない。他に、10世紀代前後の須恵器窯跡として古曾志平畠田遺跡（39）が確認されている。

奈良時代に編纂された『出雲国風土記』において両遺跡は秋鹿郡のなかの恵曇郷と多太郷に属していた。恵曇郷と多太郷の境には佐太神の社があったという神名火山（朝日山）があり、その佐太神の社は『出雲国風土記』に「佐太御子社」とみえる現在の佐太神社であり、佐太神社神宮寺跡（53）である。出雲国の二宮であり、古代末から中世にかけて勢力を誇っていた。

**中世** 戦国時代に入ると出雲国一円に尼子と毛利の戦乱が広がり、この戦乱に際して各地に山城が築かれている。佐太神社の神主であった朝山氏は、芦山城跡（21）や池平城跡（12）に居城し、戦乱に加わっている。他に、大勝間山城跡（18）や、海老山城跡（23）、二つ山城跡（27）、西長江要害山城跡（31）、満願寺城跡（48）などがある。池平城跡は日本海を望む丘陵尾根上に位置し、主郭や堀切が検出され、また、北郭に位置する氏穴遺跡（13）では柵列や土塁、土坑を確認している。満願寺城跡は宍道湖と佐太水海の間に突き出した丘陵の先端に位置し、毛利元就の陣所にもなった重要な拠点である。白畠遺跡の北東側、佐陀川北岸に位置する本郷池頭遺跡（14）では中世末～近世の墓を5基検出し、近辺に五輪塔、宝篋印塔が散在していた。墓壙内から磁器、土師器皿、銅錢、鉄製品が出土している。

**近世** 江戸時代、天明年間には松江藩主清原太兵衛によって佐陀川が開削され、宍道湖と日本海を繋ぐ運河が完成した。これにより水害は緩和され、水田開発が進んでいる。また、海上交易が盛んになると考えられたことから、天明7年（1787）年に江角御番所（7）を置き、港口出入りの船舶を監視し、帆役銭の徴収を行なっている。江角御番所の近くに上納米を受け取る武代川方役所（6）も設けていますが、これらの役所は明治維新に於いて廃止となっている。

#### 【参考文献】

- 奥原福一 1926 『町村誌』『八束郡誌』
- 鹿島町教育委員会 1983 『氏穴遺跡発掘調査概報』
- 鹿島町教育委員会 1985 『奥才古墳群』
- 鹿島町教育委員会 1989 『北講武氏元遺跡』『講武地区原宮園場整備事業発掘調査報告書4』
- 鹿島町教育委員会 1994 『佐太講武貝塚発掘調査報告書2』
- 鹿島町教育委員会 2005 『堀部第1遺跡』
- 古浦遺跡発掘調査研究会・鹿島町教育委員会 2005 『古浦遺跡』
- 鳥根県 1925 『丹花庵古墳』『鳥根県史跡名勝天然記念物調査報告』第二回
- 鳥根県教育委員会 1989 『古曾志遺跡群発掘調査報告書』
- 鳥根県教育委員会 1974 『北小原横穴群』『鳥根県埋蔵文化財調査報告書』第5集
- 古江まちづくり推進委員会 1990 『ふるさと古江』
- 松江市 2007 『新編 鹿島町誌』
- 松江市教育委員会 2008 『高田尾横穴墓』
- 松江市教育委員会・財団法人 松江市教育文化振興事業団 2009 第119集 『大勝間山城跡発掘調査報告書』
- 松江市教育委員会・財団法人 松江市教育文化振興事業団 2009 第130集 『池平城跡』



第3図 周辺の遺跡分布図 (S=1:35,000)

## 第3章 白畠遺跡

### 第1節 調査の方法

#### 1. 調査範囲（第4図）

松江市文化財課により、市道古浦西長江線道路整備事業に伴い、要試掘箇所と判断された当該範囲について、2箇所のトレンチ（T-1、T-2）が設定され、調査が行われた。その結果、遺構、遺物が確認され、白畠遺跡として周知されたものである。しかし、その後の設計変更によって遺跡推定範囲の東側は開発範囲外となり、調査範囲は南西側平坦面とそれに続く緩斜面とをなす三角形状の調査区となった。調査面積は72.0 m<sup>2</sup>である。



第4図 白畠遺跡調査範囲図 (S=1:500)

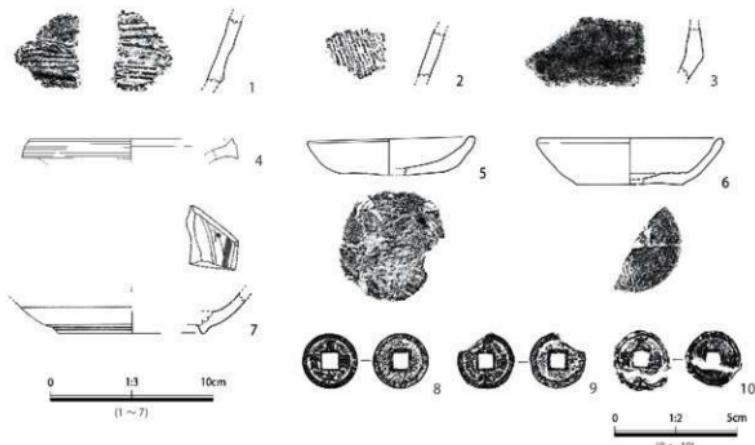
#### 2. 試掘調査（第4・5図）

##### 2 本の試掘トレンチ（T-1、T-2）についてその概要を述べる。

T-1は墓塔や墓標<sup>(1)</sup>、自然石が散在していたことから、その隣接地に設定したトレンチである。尾根上平坦部にあたり、地表面下0.4mの地山面から墓壙2基と炭溜りを検出している。1基の墓壙上には人頭大の礫が一石置かれ、墓壙の一部を覆うように炭がみられた。遺構に伴う遺物は出土していないが、覆土から磁器が出土している。

T-2はT-1南東側、尾根上高位に設定したトレンチである。地表面下1.1mまでは近世以降の土層と考えられ、五輪塔の石材などが含まれていた。その下層には0.5m程の厚さで黒褐色土があり、縄文土器、弥生土器、土師器皿などが出土している。また、黒褐色土を切るように搅乱された土層が入り込み、搅乱層から錢貨、金属製品、煙管が出土している。黒褐色土より下層から地山面までは無遺物層であり、地山は地表面下2.5mで確認している。

第5図は試掘調査出土遺物である。5-1～3は縄文土器である。1は内外面を条痕で器面調整し、外面には隆帯がみられる。前期の西川津式である。2は外面に撚糸文がみられ、中期後葉、里木II式の破片である。3は後期の破片と思われる。5-4は壺・甕類の口縁で、外面に凹線文を施す。弥生時代後期、V-1様式と思われる。5-5、6は土師器皿である。口径約10～11cmで底部にわずかに回転糸切痕がみられる。5-7は肥前磁器、染付の皿で九陶IV期（1690～1780年）のものと思われる。5-8～10は寛永通寶の新寛永<sup>(2)</sup>である。



第5図 試掘トレンチ出土遺物実測図 (S=1:2,1:3)

### 3. 本調査の方法

最初に、調査前の地形測量を実施した。次に、調査区南西から西側に散在している多数の墓塔や墓標、自然石について平面実測を行い、取り上げを行った。次に、調査区全体の腐葉土や表土を剥ぎ取り、土層観察の畦を調査区中央よりやや南側に斜面に沿うかたちで設定した。調査の結果、遺構は地山面から検出され、遺構面上に遺物包含層が堆積していた。調査区南西端から堆積土の掘削後、精査、遺構検出を実施した。

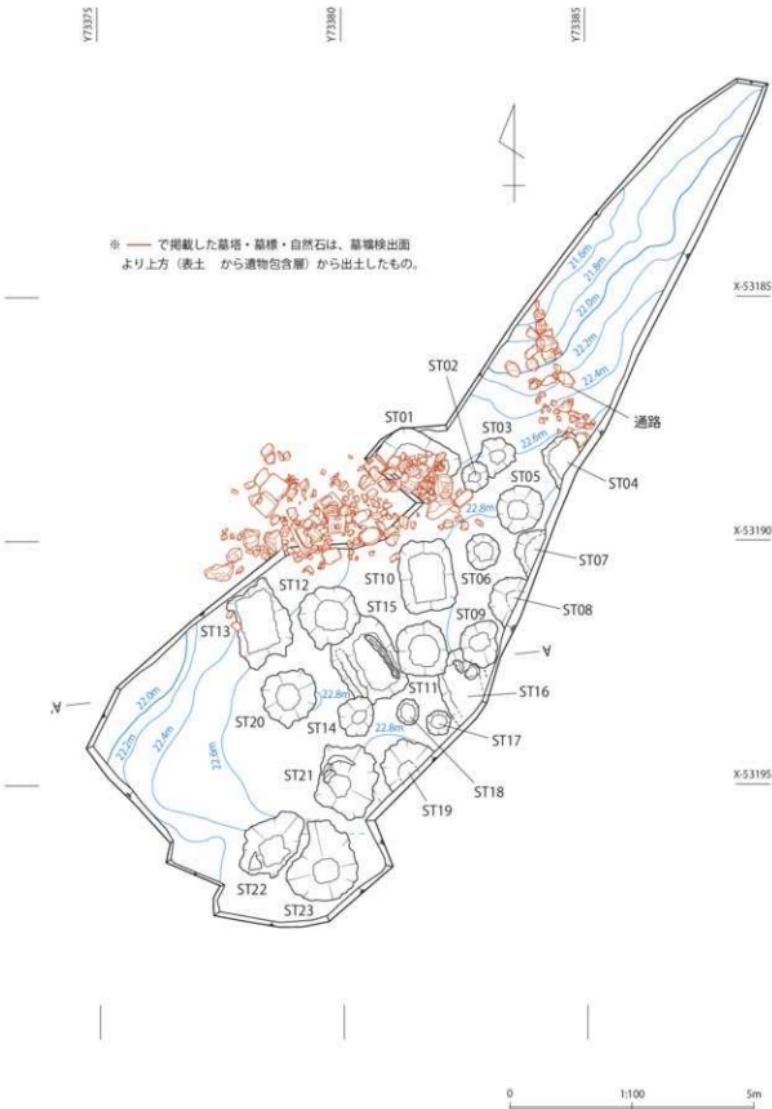
測量はトータルステーションを用い、その図化測量図と遺構を照合しながら平面図をおこし、レベルを記入した。方位については、世界測地系に準拠した座標北を基準としている。また、遺物の取り上げについてもトータルステーションとレベルを併用している。土層断面はレベルを用いて手作業で測量を行い、土色の注記は新版標準土色帖を使用した。また、写真はフィルムカメラによる35mmのモノクロ、35mmのリバーサル、デジタル一眼レフカメラを主に使用し、120mmスライドフィルムカメラを援用して撮影した。

## 第2節 調査の概要と基本層序

### 1. 調査の概要 (第6図)

調査地は標高22.0～23.4mの北西向き緩斜面に立地する。南西から北東20.3m、南西側最大幅6.7m、北東幅は0.8mを測る、細長い三角形状の調査区である。調査区中央は平坦であり、南西隅に向かって緩やかに傾斜している。また、中央から北東側では、南東側から北西側に傾斜する緩斜面となっている。

調査区西側斜面には墓塔や墓標、自然石が散在しており、墓を廃止した際に置かれたものと推測さ



第6図 白糸遺跡遺構全体図 (S=1:100)

れる。また、調査区中央からやや北東寄りには、自然石や五輪塔が石列状に検出され、山道を登り下りするための通路と考えられた。

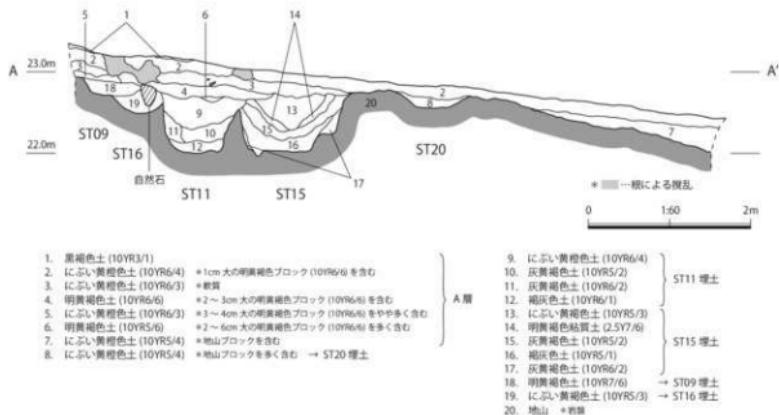
平坦面から23基の墓壙を検出している。墓壙のなかには調査範囲外へ続くものがあり、未完掘のものも含まれるが、出土遺物から近世の墓壙群であることが判明している。土師器皿、陶磁器、金属製品、石製品、銭貨、漆椀、人骨が出土し、人骨は現地調査終了後、古浦に所在するお寺に納骨し供養して頂いた。銭貨の中には複数枚が鏽により固着しているものがあり、分離することが困難であったものについては銭貨の最上面と最下面の拓本と断面を掲載している。

## 2. 基本層序（第7図）

第7図は腐葉土や表土除去後の土層断面図である。1～7層は土壤検出面を覆う覆土（以下、A層とする）である。A層は10cm～40cmの厚さで堆積しているが、場所によっては確認されず、表土直下が地山面となるところもみられる。A層の3、4層は墓壙の凹みに埋まった土層である。A層は地山ブロックを多く含むにぶい黄褐色土や明黄褐色土で、須恵器、陶磁器、鉄製品、五輪塔を含んでいた。

墓壙は角礫状に剥離する岩盤（20層）から検出され、土層断面に上層からの掘り込み面は観察されない。通常、墓壙は地表面から掘削される。土層断面に地表面からの掘り込みがみられないことは、地表から検出面までが浅いことやA層が場所によってみられないような状況から、現況のA層が墓壙掘削時の覆土ではなく、墓壙掘削時の覆土は流失したものと考えられる。

8～19層は墓壙埋土である。埋土の多くは柏陥没時の流入土であり、17層はST17の棺の裏込土と思われる。流入土は大小様々な岩盤ブロックを含む土層で、土師器皿や銭貨、金属製品などが出土している。



第7図 調査区東西土層断面図 (S=1:60)

## 第3節 遺構と遺物

### 第1項 墓壙

今回の調査で確認した23基の墓壙について、順次その概要を記述する。

#### ST01（第8・9図）

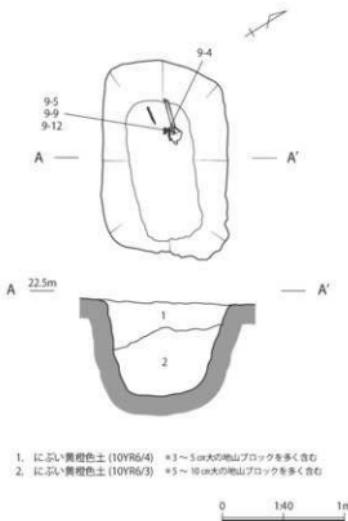
ST01は調査区中央、北西端に位置する。墓壙上面には南西側斜面と同じように墓塔や自然石などが散在し、大半が原位置を留めていない状況が認められた（第6図参照）。なかにはST01に伴うものが含まれている可能性も考えられるが、判断はできなかった。

平面は隅丸長方形を呈し、主軸方向はN-56°-W、長軸1.58m、短軸1.02m、深さ0.77mを測る。墓壙底面は南東側から北西側に向かって緩やかに傾斜していた。

埋土は地山ブロックを多く含む軟らかいにぶい黄橙色土である。棺の痕跡は確認していない。

遺物は北西端に集中し、底面直上から人骨の他、土師器皿、毛抜、錢貨が出土している。人骨の遺存状態は悪く、頭部と長骨の一部が認められたにすぎない。

9-1～3は土師器皿である。口径10cm前後、底径約4～7cmを測り、底部外間にわずかに回転糸切痕がみられる。9-4は全長9cm、最大幅1.0cm、厚さ0.3cmの毛抜である。9-5～11は銭貨、寛永通寶である。いわゆる六道錢として納められたもので9枚出土している。9-5～7は古寛永、9-8は文錢、9-9～11は新寛永、9-12は2枚が固着し分離が困難であり、内1枚は新寛永である。



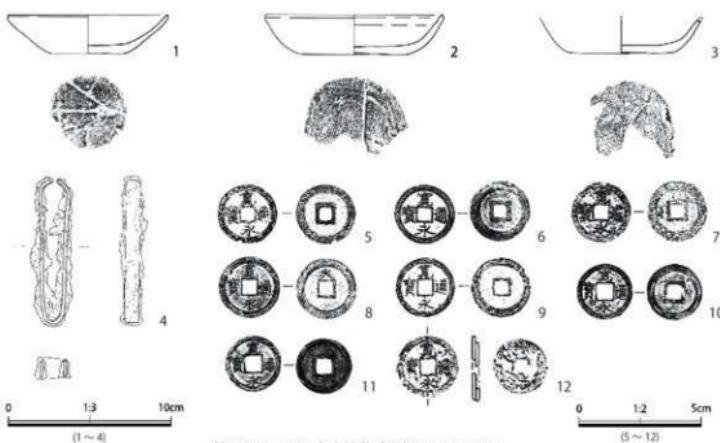
第8図 ST01 実測図 (S=1:40)

#### ST02（第10・11図）

ST01の西側に位置する円形の墓壙である。ST03と一部重複し、検出状況、土層断面からST02が新、ST03が古である。規模は直径0.59m、深さ0.28mを測る。

埋土は地山ブロックを多く含むにぶい黄褐色土で、底面から土師器皿、磁器、漆椀が出土している。土師器皿は小片であり、また、漆椀は劣化が著しく取り上げられなかった。

11-1は肥前の紅皿である。型押し成形によるもので、外面に鷲文がみられ、高台は無釉である。口径4.2cm、器高1.7cmを測る。11-2は肥前磁器、染付の紅皿である。口径5.8cm、器高2.4cmを測り、外面に草文が描かれている。これらの磁器は九陶IV期、18世紀後半以降の所産と思われる。



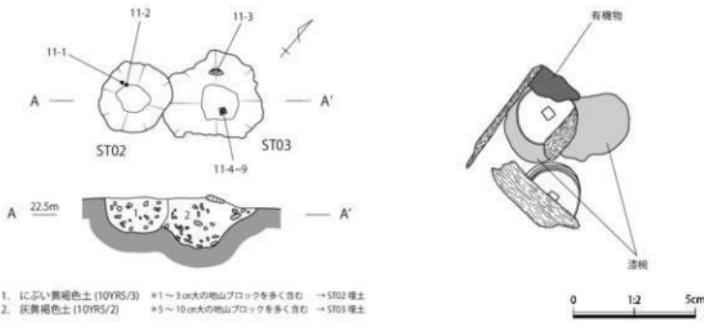
第9図 ST01出土遺物実測図 (S=1:2, 1:3)

## ST03 (第10・11図)

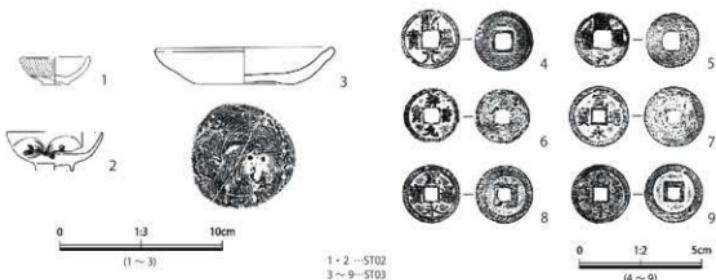
ST02と重複する平面不整円形の墓壙で、ST02より古である。規模は長径0.75m、短径0.68m、深さ0.41mを測る。

墓壙北西端の埋土から土師器皿が、底面から銭貨が出土している。銭貨6枚の周りには長さ3~4cm、幅1cm、厚さ2mmの木片が四方で囲むように認められ、近くには朱色の漆椀の一部が確認された。これらの遺物は出土状況からセットで副葬された可能性が考えられる。漆椀は劣化しており、取り上げられなかった。

11-3は口径10.8cm、器高2.3cmを測る土師器皿である。11-4~9は銭貨である。4、5は開元通寶、6は祥符元寶、7~9は寛永通寶の古寛永である。



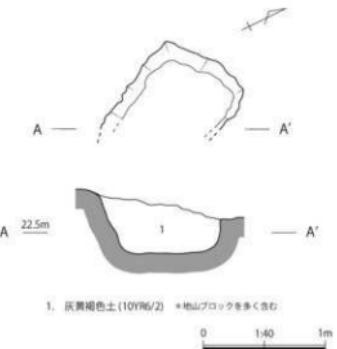
第10図 ST02・ST03実測図 (S=1:40)



第11図 ST02・ST03出土遺物実測図 (S=1:2,1:3)

## ST04（第12図）

ST04はST03の東側、調査区南東壁際に位置する。墓壙は調査区外へ続いており、現況で長軸0.96m、短軸0.86m、深さ0.5mを測る。平面形は現況から長方形と考えられ、主軸はN-26°-Wである。墓壙内から遺物は出土していない。



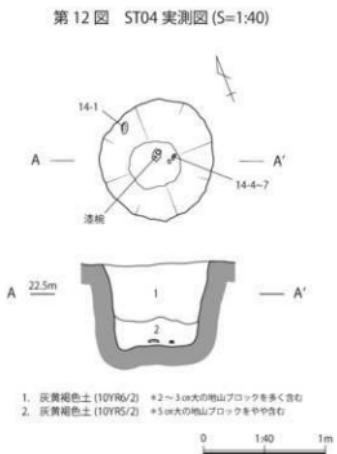
## ST05（第13・14図）

ST05はST02、03の南東側に位置する円形の墓壙である。直径0.95m、深さ0.68mを測る。

埋土は地山ブロックを含む軟らかい灰黄褐色土である。

遺物は1層から土師器皿と陶磁器が、底面近くから銭貨と漆椀が出土地している。銭貨6枚と漆椀はやや離れた場所にあり、銭貨の下側や横には長さ4~5cm、幅2cm、厚さ2mmの木片が認められた。銭貨6枚のうち2枚は固着し、銹化が著しかった為、写真図版（図版11）のみを掲載している。椀は劣化しており、取り上げられなかった。

14-1は口径8.9cm、高さ1.8cmの土師器皿である。14-2は肥前陶器の皿である。内面に銅線釉、外面に透明釉を掛け分けている。九陶皿



第13図 ST05実測図 (S=1:40)

期(1650～1690年)以降の所産と思われる。14-3

は肥前磁器の皿で九陶V期(1780～1860年)と思われる。14-4～7は寛永通寶で、すべて新寛永である。

#### ST06(第15・16図)

ST06はST05の南西側に位置し、直径0.73m、深さ0.33mの円形の墓壙である。

墓壙南側端、底面近くから漆椀と磁器、錢貨が出土している。磁器は漆椀のなかに置かれたような状態で、錢貨は漆椀から10cm程度離れたところから確認された。他に土師器皿が2層から出土している。

16-1は土師器皿底部、16-2は肥前染付の紅皿である。コンニャク印判による装飾を施し、九陶IV期のものと思われる。16-3、4は寛永通寶の新寛永である。

#### ST07(第17図)

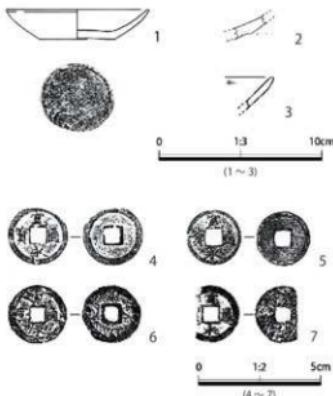
調査区南東壁際、ST05の南東に位置し、調査区外へ続いている。規模は現況で南北1.06m、深さ0.64mを測り、平面は円形と推定される。

土層断面2～4層は棺の陥没による流入土、5層は棺の裏込め土と思われる。5層は地山ブロックを多く含み、墓壙を掘削した際のブロックをそのまま裏込めとして使用したものと考えられる。また、土層断面から棺の大きさは直径0.6m程度のものと推測される。遺物は出土していない。

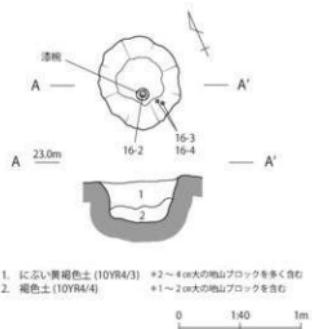
#### ST08(第18図)

調査区南東壁際、ST07の南西側に位置し、調査区外へ続いている。規模は現況で直径1.17m、深さ1.0mを測る。平面は円形と思われる。

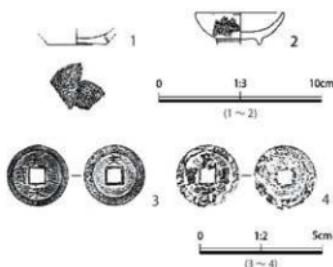
土層断面2、3層は地山ブロックを含む軟らかい土層であり、1層は2層上面の凹みに埋まった土層である。



第14図 ST05出土遺物実測図(S=1:2,1:3)

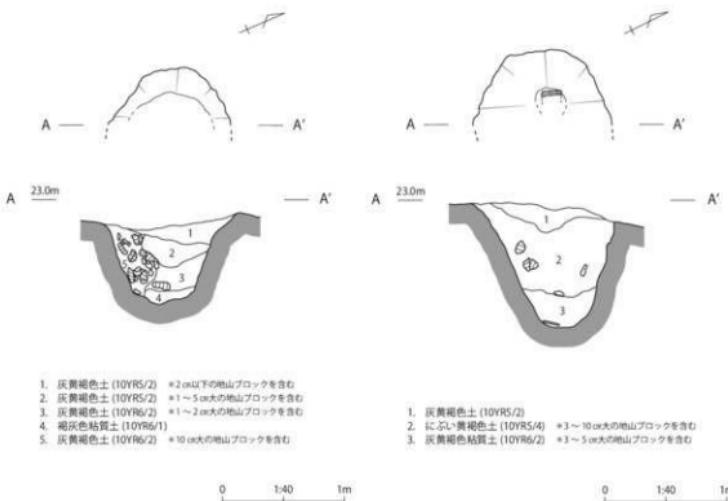


第15図 ST06実測図(S=1:40)



第16図 ST06出土遺物実測図(S=1:2,1:3)

墓壙西端の底面近くから幅15cmの薄い板材が出土し、棺の一部とも考えられる。



第17図 ST07 実測図 (S=1:40)

第18図 ST08 実測図 (S=1:40)

### ST09（第19・20図）

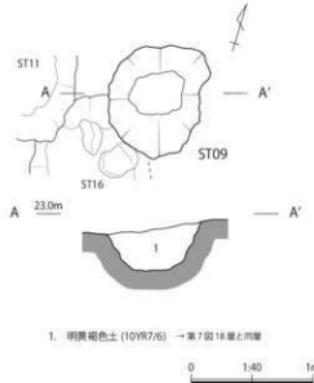
ST08の南西側に位置する。平面は不整円形、規模は長辺0.94m、短辺0.72m、深さ0.34mを測る。墓壙底面より10cm程度上方から銭貨1枚が出土している。20-1は寛永通寶の文銭である。

### ST10（第21・22図）

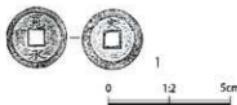
調査区中央に位置する。平面は長方形を呈し、長軸1.5m、短軸1.1m、深さ0.9mを測る。主軸方向はN-15°-Wである。試掘調査時に墓壙上面南東側で炭溜りを確認し、埋葬後に火を使用したものと考えられる。

墓壙の南側は試掘調査時の埋め戻し土である。土層断面1~8層は地山ブロックを含む軟らかい土層で陥没時の流入土、9層は棺の裏込め土と考えられる。土層断面から棺の長辺は0.8m以上と推測される。

遺物は土層断面8層、底面よりやや上方から土師器



第19図 ST09 実測図 (S=1:40)



第20図 ST09 出土遺物実測図 (S=1:2)

皿、煙管、不明鉄製品、漆椀が出土している。漆椀は劣化が著しく、取り上げも困難な状況であり、図化できなかった。また、9層から土師器皿の破片が出土している。

22-1～4は土師器皿で、1～3は8層から、4は9層から出土している。22-5は煙管の雁首である。22-6は長さ7.5cm、最大幅0.8cm、厚さ2mmの先の尖る不明鉄製品で刃物類と思われる。

#### ST11（第23・24図）

ST10の南側に位置する。規模は直径1.08m、深さ0.72mを測り、平面は隅丸方形である。ST15、16の一部を切り込んで掘られ、その2基の墓壙より新しい。

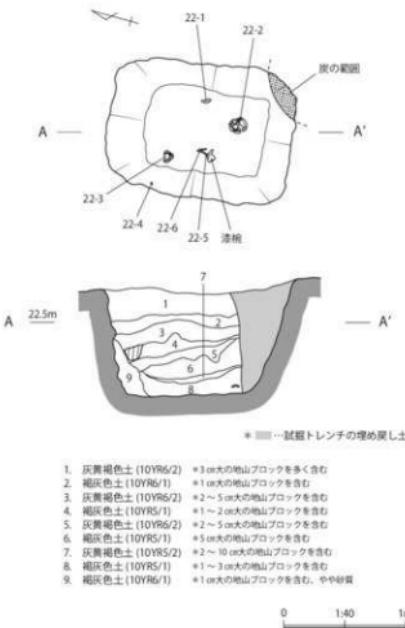
墓壙中央は試掘トレンチ角部にあたる。埋土は灰黄褐色土や褐灰色土で地山ブロックを含んでいた。底面近くから土師器皿が出土している。

24-1は土師器皿で、底部外面にわずかに回転糸切痕がみられる。

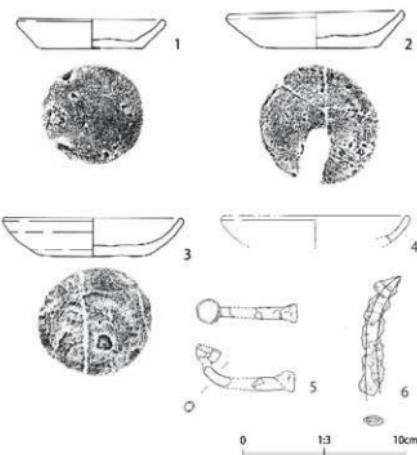
#### ST12（第25・26図）

ST10の南西側に位置する。平面は円形を呈し、直径1.24m、深さ0.9mを測る。後述するST15の一部を切り込んで掘られ、ST12が新、ST15が古である。墓壙上面を覆うように直径1～3cm程度の円礫が確認された。この円礫は墓標を設置する際に置かれたものと思われ、棺陥没時に墓壙中央部に落ち込んだと考えられる。

土層断面1層は円礫を含む土層、2～



第21図 ST10 実測図 (S=1:40)

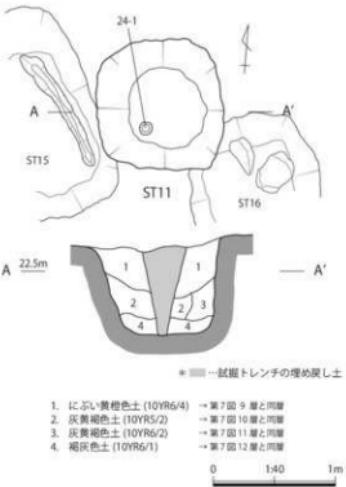


第22図 ST10出土遺物実測図 (S=1:3)

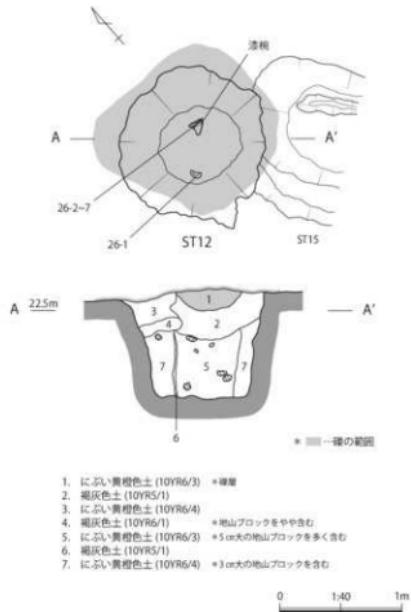
4層は墓壙上面に盛られた土層で棺陥没時に流入したものと思われる。5層は棺内への流入土、6層は棺の痕跡、7層は棺の裏込め土である。土層断面から、直径0.5m程度の棺が埋置されたものと考えられる。

墓壙底面北側から人骨と銭貨、漆椀がまとまって出土している。人骨は破片で遺存状態は悪い。漆椀の下から銭貨6枚が出土し、その周りには長さ5cm程度の薄い木片が認められ、銭貨と一緒に納められたものと思われる。漆椀は劣化が著しく、炭化できなかった。他に土層断面5層の上面から土器皿が出土している。

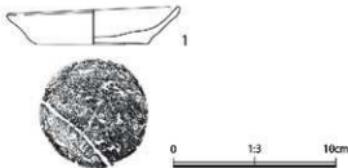
**26-1**は土器皿で、底部外面に回転糸切痕がみられる。**26-2～7**は寛永通寶である。2～4は古寛永、5～7は新寛永である。



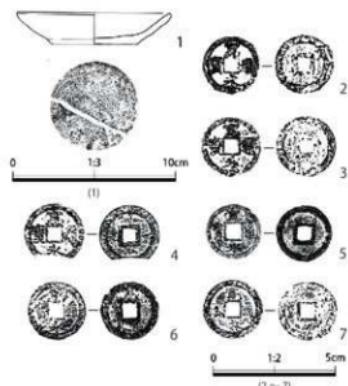
第23図 ST11 実測図 (S=1:40)



第25図 ST12 実測図 (S=1:40)



第24図 ST11 出土遺物実測図 (S=1:3)



第26図 ST12 出土遺物実測図 (S=1:2, 1:3)

## ST13 (第27・28図)

ST13はST12の西側に位置し、平面形は不整長方形を呈する。規模は長軸1.4m、短軸1.1m、深さは南東側で0.42m、北西側で0.35mを測る。底面は南東側から北西側に向かってやや傾斜している。主軸方位はN-13°-Wである。

土層断面1~3層は陥没による流入土、4層は棺の裏込め土と考えられ、土層断面から棺の大きさは長辺0.7m程度と想定される。この墓壙の埋葬施設は墓壙の形状や土層断面から箱式木棺の座棺と考えられ、土葬骨が出土している。座棺の場合、高さが60cm程度は必要と考えられ、現況の深さでは足りない。地形からみても西側斜面に移行するような場所にあり、墓壙上半は削平されたものと思われる。

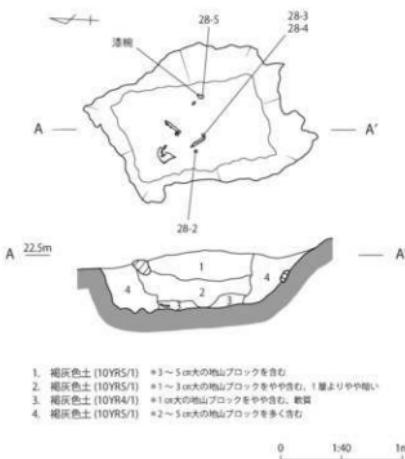
遺物は墓壙中央より北側に多く、人骨、漆椀、銭貨13枚が底面よりやや上方から出土している。銭貨は人骨の近くや漆椀の破片の下から出土し、鏑により固着したものは断面図と最上面、最下面の拓本を掲載した。漆椀は劣化し、取り上げられなかった。また、銭貨のうち2枚については鋳造が著しく、写真団版(図版13)のみを掲載している。他に2層から土錐が出土している。

28-1は長さ2.8cmの土錐で、一方は破損している。28-2~5は銭貨である。2は5枚が付着し、最上面は皇宋通寶、他4枚は不明である。3は4枚が付着し、最上面は元豐通寶、他3枚は不明である。4は一部破損しているが聖宋元寶と思われる。5は寛永通寶の新寛永である。

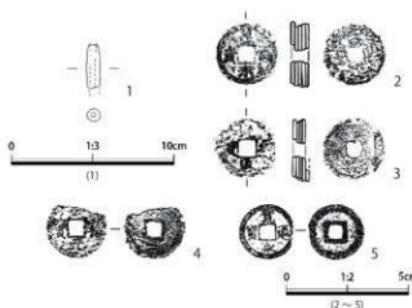
## ST14 (第29・30図)

ST12の南西に位置する。平面形は不整円形、規模は長径0.83m、短径0.77m、深さ0.28mを測る。ST15の南西隅を掘り込んでおり、ST14が新である。

墓壙西側、底面直上から銭貨が19枚重なって出土し、今回の調査のなかで銭貨出土数の一番多い



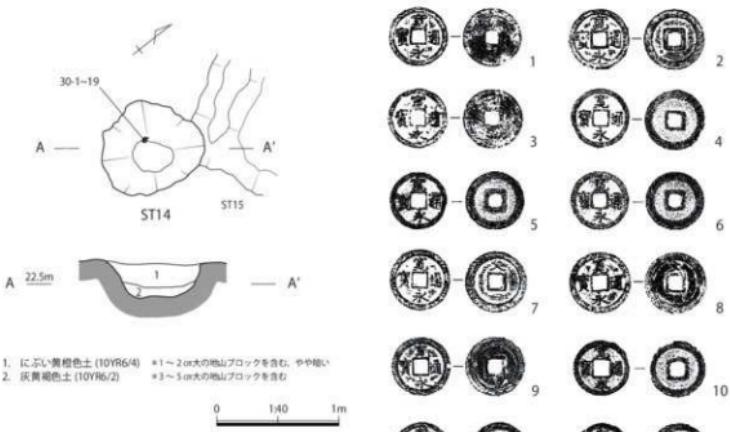
第27図 ST13実測図 (S=1:40)



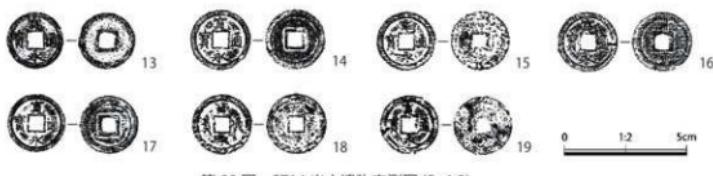
第28図 ST13出土遺物実測図 (S=1:2, 1:3)

墓壙である。銭貨の周りには黒い有機物が付着し、その下から1cm四方の薄い木片が確認された。他に土師器皿の破片が出土している。

30-1～19は寛永通寶である。1～6は古寛永、7～9は文銭、10～19は新寛永である。



第29図 ST14 実測図 (S=1:40)



第30図 ST14 出土遺物実測図 (S=1:2)

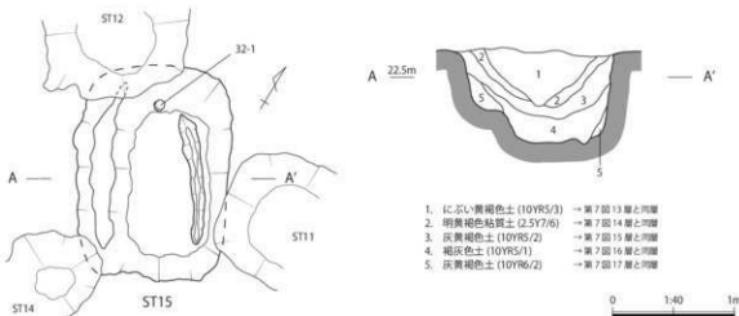
### ST15（第31・32図）

ST15はST14の北側に位置する。ST11、12、14に一部を掘り込まれ、この3基の墓壙より古い。平面形は長方形を呈し、長軸1.53m、短軸1.24m、深さ0.7mを測る。主軸方向はN-28°-Wである。北東側底面には長さ1.07m、幅10～18cm、深さ4cmの溝が掘られていた。また、南西側には幅20cm、長さ1.2mのテラスが認められる。

土層断面から4層は陥没による流入土、5層は溝より壁側やテラス部分にみられることから棺の裏込め土と考えられる。1～3層は墓壙内に流入した土層である。土層断面から棺幅は0.5～0.7m程度の箱式木棺と推測される。

遺物は4層中から土師器皿と釘が出土している。

32-1は口径約12cmの土師器皿で、底部外面に回転糸切痕がみられる。32-2は角釘で、わずかに先端を欠き、残存長3.9cmを測る。



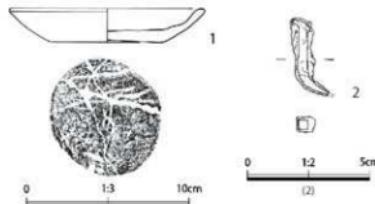
第31図 ST15実測図 (S=1:40)

## ST16 (第33・34図)

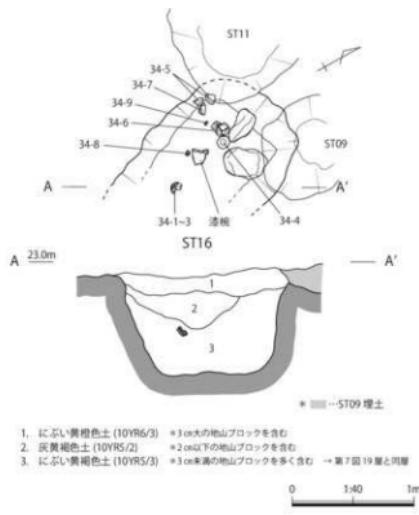
ST16は調査区南東壁際、ST11の南東に位置する。北側はST09、11に掘り込まれ、この2基の墓壙より古い。墓壙南東側は調査区外へ続いており、規模は現況で長軸1.4m、短軸1.1m、深さ0.8mを測り、平面は長方形と思われる。主軸方位はN-20°-Wである。

埋土はいずれも軟らかい土層であり、棺の痕跡は確認できなかった。墓壙北側、上端から0.3~0.4m下の壁際には人頭大の扁平な石があり、墓壙中央に向かって落ち込んでいた。この石は棺の裏込め、または板石として使用されたものか判然としない。

土層断面3層から土師器皿(34-1~3)が3枚重なって出土している。また、底面から土師器皿、錢貨、漆椀が出土し、錢貨2枚のうち1枚は漆椀の近くに、もう1枚はやや離れた場所にみられた。錢貨の下には小さな板材があり、錢貨と板材は一緒に納められたものと思われ、出土状況から漆椀もセット関係にあると考えられる。



第32図 ST15出土遺物実測図 (S=1:2, 1:3)



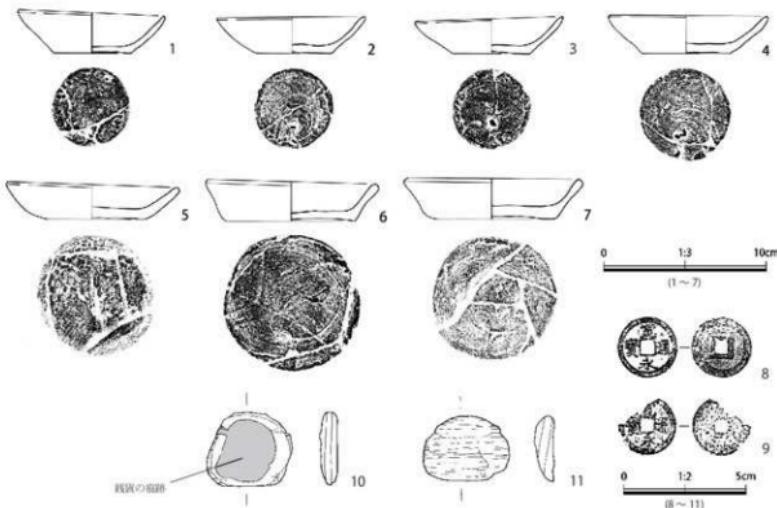
第33図 ST16実測図 (S=1:40)

1. に赤い黄褐色土 (10YR5/3) \*3cm以上の地山ブロックを含む
2. 赤黄褐色土 (10YR5/2) \*2cm以下の地山ブロックを含む
3. に赤い黄褐色土 (10YR5/3) \*3cm未満の地山ブロックを多く含む → 第7回19層と同層

\* = ST09埋土

0 1:40 1m

34-1～7は土師器皿で、底部外面に回転糸切痕がみられる。34-8、9は銭貨、寛永通寶の古寛永である。34-10、11は銭貨の下から出土した板材である。10は8の下から出土し、銭貨の痕跡が残る。10、11は長さ3.5cm、厚さ0.8cmである。



第34図 ST16出土遺物実測図 ( $\$=1:2,1:3$ )

#### ST17(第35・36図)

ST17はST16の南西側に隣接する墓壙である。平面は円形を呈し、直径0.53m、深さ0.18mを測る。西側に同じ規模のST18が存在する。

墓壙北西側、底面近くから銭貨2枚が出土している。36-1、2は寛永通寶の新寛永である。

#### ST18(第37図)

ST17の0.2m西側に位置する。平面は円形を呈し、直径0.5m、深さ0.17mを測る。

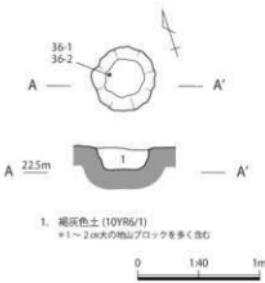
遺物は出土していない。

#### ST19(第38・39図)

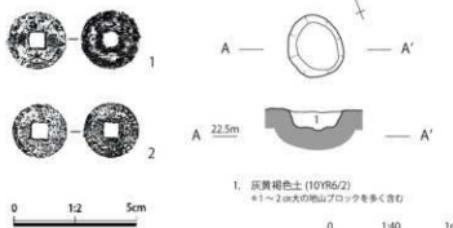
調査区南東壁際、ST17、18の南側に位置し、調査区外へ続いている。現況から平面は円形と推測され、直径1.18m、深さ0.92mを測る。

埋土は地山ブロックを多く含む軟らかい土層である。墓壙北側4層から土師器皿3枚が重なった状態で出土し、他に別個体の破片も出土している。

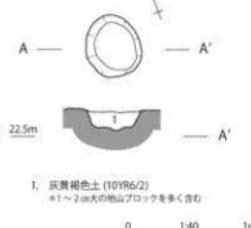
39-1～4は土師器皿である。1～3は口径9～11cmを測り、底部外面に回転糸切痕がみられる。



第35図 ST17 実測図 (S=1:40)



第36図 ST17出土遺物 実測図 (S=1:2)



第37図 ST18 実測図 (S=1:40)

## ST20（第40・41図）

ST13の南東側に位置する。平面は不整円形を呈し、長径 1.18m、短径 1.08m、深さ 0.7m を測る。

埋土は地山ブロックを多く含む軟らかい土層である。

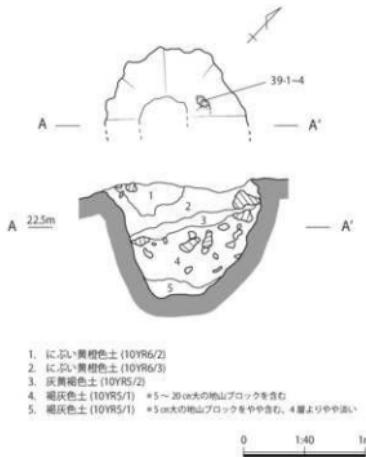
墓壙南西側の4層から土師器皿が、底面よりやや浮いたところから銭貨が出土している。また、埋土から陶器も出土している。

41-1は土師器皿、41-2は肥前陶器の碗で九陶IV期、18世紀以降のものと思われる。41-3、4は銭貨、寛永通寶である。3は古寛永、4は新寛永の文銭である。

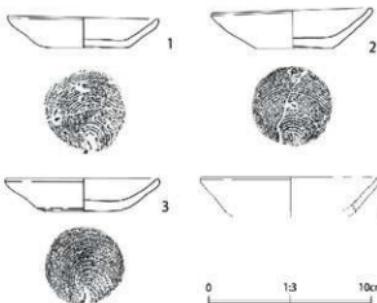
## ST21（第42・43図）

ST21は調査区南側、ST14の南側に位置する。上端西側は直線的であり、東側はやや外へ膨らんだ不整長方形である。底面は平面隅丸方形を呈し、墓壙の西側に寄っている。規模は長軸 1.58m、短軸 1.02m、深さ 0.77m を測り、底面径は 0.4m と狭い。主軸方位は N-10°-E である。北壁には幅 10cm 程のテラスが認められ、墓壙掘削時の足がかりとして使用されたものと思われる。

埋土は地山ブロックを多く含む軟らかい土層



第38図 ST19 実測図 (S=1:40)



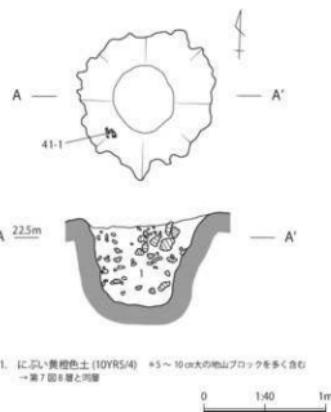
第39図 ST19出土遺物 実測図 (S=1:3)

である。

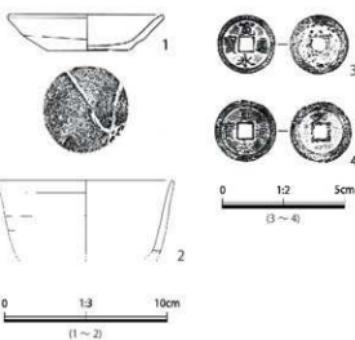
墓壙西壁側から直径30~40cmの自然石が2個、底面より60cm浮いたところから出土した。この石は棺を固定するために置かれたものと思われる。

遺物は人骨の他、土師器皿、陶器、金属製品、数珠玉が出土している。人骨は底面、特に中央より北側に多く、頭部の一部と長骨が若干認められる程度で遺存状態は悪い。墓壙底面の人骨近くから土師器皿、煙管、銭貨が、埋土上方から不明鉄製品と陶器が出土している。釘と数珠玉は埋土をふるいにかけた際に取り上げたものである。

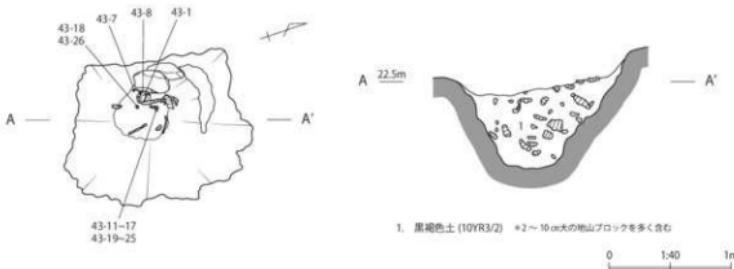
43-1、2は土師器皿で、底部外面にわずかに糸切痕が認められる。43-3は肥前陶器の皿で、内面にわずかに文様がみえる。時期は不明である。43-4、5は鉄釘で角釘である。一部破損し、4は胴部幅4mm、厚さ2mm、5は胴部幅、厚さ2mmを測る。43-6はT字状の不明鉄製品で先端を欠いている。残存長4.8cm、頭部幅3.9cm、胴部幅1.3cm、胴部厚さ0.8cmを測り、やや屈曲している。43-7は煙管の雁首である。羅宇の一部が残り、蝶着痕が確認される。18世紀中頃以降の所産と考えられる。43-8は吸口で、内部に少し羅字がみられる。43-9、10は直径6mmの数珠玉



第40図 ST20 実測図 (S=1:40)

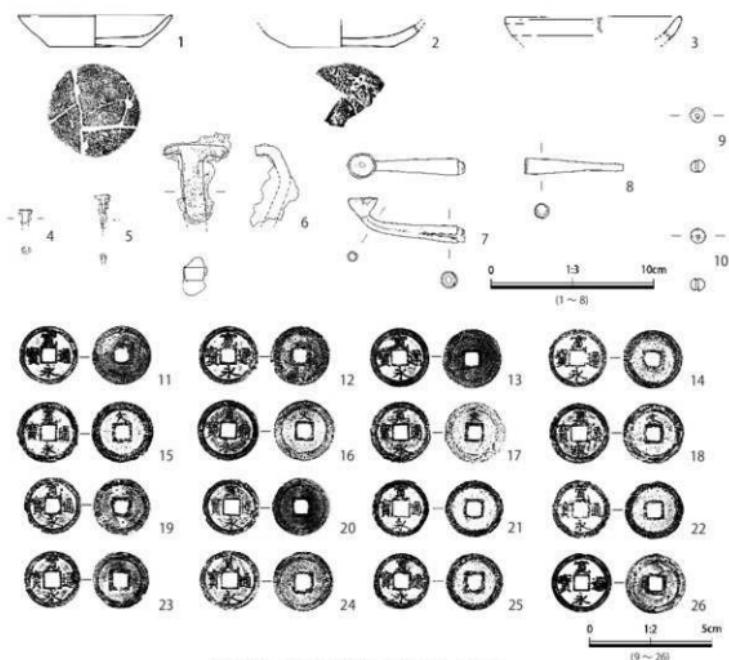


第41図 ST20 出土遺物実測図 (S=1:2,1:3)



第42図 ST21 実測図 (S=1:40)

である。9は濃青色、10は白色を呈する。43-11～26は寛永通寶である。11～14は古寛永、15～18は文錢、19～26は新寛永である。



第43図 ST21出土遺物実測図 (S=1:2,1:3)

## ST22（第44・45図）

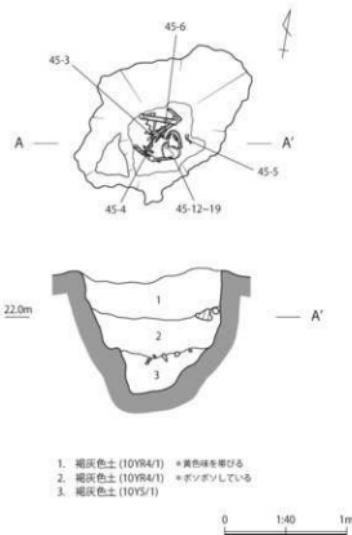
調査区南端に位置する。墓地の平坦面から斜面に移行するような場所にあることから、墓壙の上端は北側と南側で約0.7m高低差が認められる。平面は不整橢円形を呈し、長径1.58m、短径1.05m、深さ0.95～1.0mを測る。底面は一辺0.53mの不整形方であり、西側に向かってやや傾斜している。墓壙南西側に幅26cm、三角形状のテラスが造られ、墓壙掘削時の足がかりとして使用されたものと推測される。

土層断面1、2層は地山ブロックをやや含む軟らかい土層である。3層は締りのある土層であり、土層上面から人骨、金属製品が出土している。墓壙底面が狭いことや遺物の出土状況から3層は棺を埋置する際の底面の整地土であり、棺は3層上面に置かれていた可能性が高い。

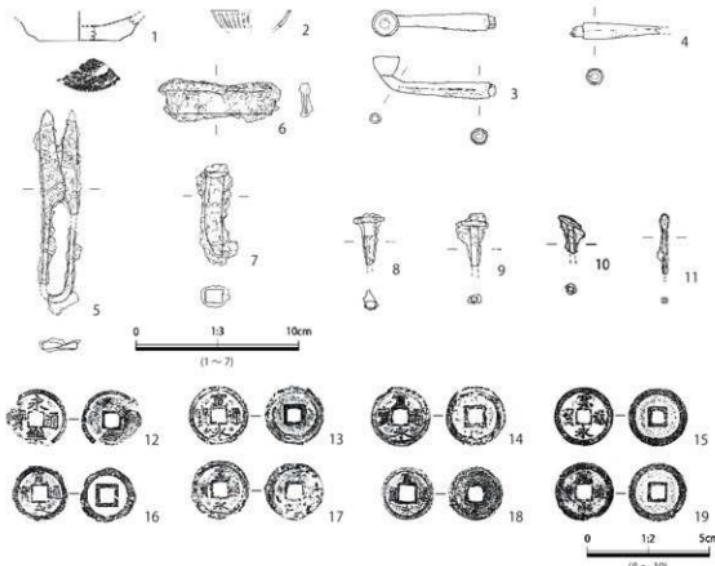
遺物は前述したように3層上面から人骨、金属製品の銭貨や煙管、鍼が出土している。人骨の遺存状態は悪く、取り上げるのも困難な状態であった。頭骨は底面東側にあり、その周りに長骨がみられた。煙管は頭骨の側から、銭貨は頭骨の下から出土している。他に1層から土師器皿と磁器が、2層

から金属製品が出土している。

45-1は土師器皿の底部である。45-2は肥前磁器の紅皿である。口径 5.0cm、外面に鎧文がみられ、九陶IV期のものと思われる。45-3は煙管の雁首である。羅宇の一部が残り、蠟着痕が確認される。18世紀中頃以降の所産と考えられる。45-4は吸口で、端部を欠いている。羅宇の一部が残る。45-5は鉄製の握鉄である。部分的に欠損しているが、完形であれば長さ 11cm 程度のものである。45-6は全長 7.7cm、幅 2.7cm、厚さ 0.15cm を測る鉄製品で、上端には木質が付着し、右端に穴が開いている。カスガイ型鍍金と思われる。45-7～10は角釘である。7は先端を欠き、残存長 5.1cm、幅 1.4cm、厚さ 0.8cm を測る。8～10は胸部幅 0.2～0.5cm を測り、7よりは細く、用途や使用される場所によって使い分けてい



第44図 ST22 実測図 (S=1:40)



第45図 ST22 出土遺物実測図 (S=1:2, 1:3)

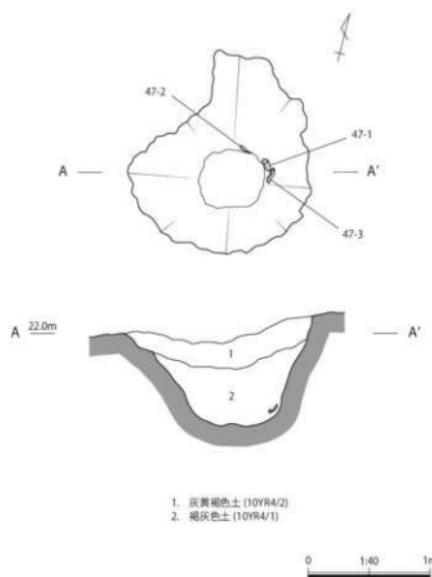
たものと思われる。45-11は縫い針で先端を欠いている。45-12～19は銭貨である。12は永楽通寶、13、14は寛永通寶の古寛永、15～19は新寛永である。

## ST23（第46・47図）

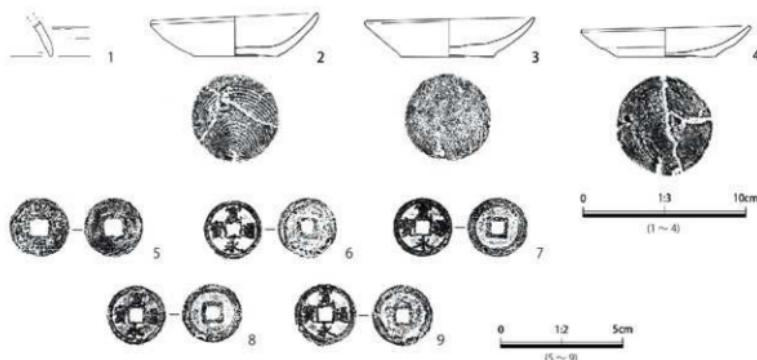
調査区南端に位置する。ST22の南東側に隣接し、墓域の平坦面から斜面に移行するような場所にあることから、墓壙の上端は北側と南側で約0.55m高低差が認められる。平面形は北西側がやや凹む形の不整橢円形を呈し、長径1.65m、短径1.45m、深さ0.88mを測る。底面は一辺0.5m程度の不整橢円形を呈する。

墓壙東側、底面近くから土師器皿と銭貨が出土している。他に土層断面1層から須恵器が出土している。

47-1は須恵器の壺蓋である。47-2～4は土師器皿で底部外面に回転糸切痕がみられる。47-5～9は銭貨である。5は皇宋通寶、6～8は寛永通寶の古寛永、9は文銭である。



第46図 ST23 実測図 (S=1:40)



第47図 ST23 出土遺物実測図 (S=1:2, 1:3)

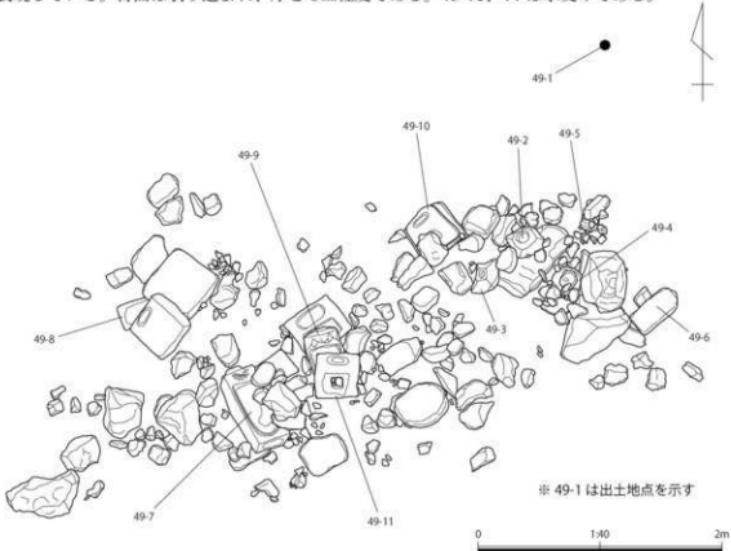
## 第2項 その他の遺構・遺物

## 墓塔・墓標（第48・49図）

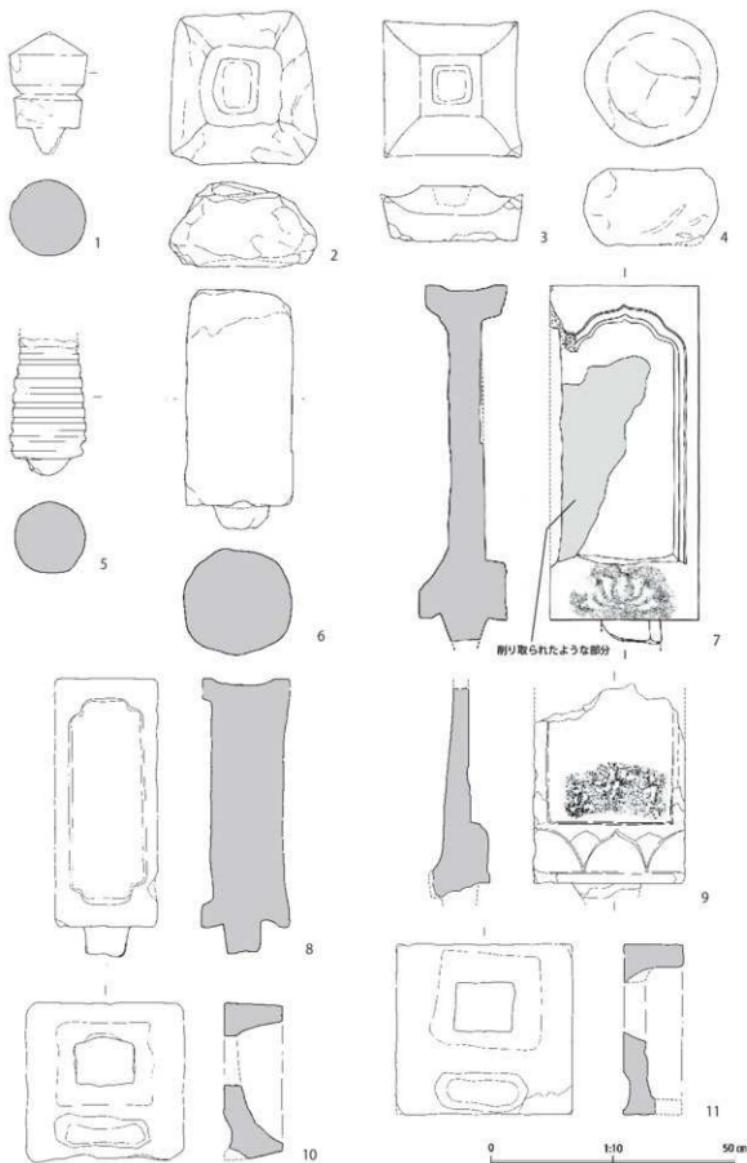
前述したように、調査区南西側から西側の斜面にかけて墓塔や墓標、自然石が散在し、一部は斜面下方まで転がり落ちていた。これら石造物は混在した状態で検出され、組合せが判明したものはない。五輪塔・宝篋印塔は組み合わせるにも数が足りないような状況で、別の場所に廃棄、または転用された可能性も考えられる。原位置を留めていないことから、個々の墓壇と墓標の関係については不明である。墓標のなかには削り取られたような痕跡があり、戒名等がわからないもの（49-7）、わずかに「位」や「女」の文字や残存しているもの（49-9）が確認された。

自然石以外の実測は現地で行なった。その内訳は五輪塔の空風輪2個、火輪4個、水輪3個、地輪3個、宝篋印塔の相輪1個、平頂方柱型墓標2個、方柱型墓標1個、円頂円柱型墓標1個、水受3個、台石2個、合計23個である。石材はすべて凝灰質砂岩、いわゆる来待石である。その一部を下図に掲載した。

49-1～4は五輪塔の部材である。1は空風輪である。先端をわずかに欠き、あまり風化していない。2、3は火輪、4は水輪である。49-5は宝篋印塔の相輪である。九輪の上部を欠いている。49-6は円頂円柱型墓標で、戒名などは削られていた。49-7は平頂方柱型墓標である。正面に枠開いをし、その下に蓮座を彫っている。背面には削り込みがみられ、断面はI字状である。49-8も平頂方柱型墓標で、正面は枠開いをしている。49-9は墓標の上半を欠いている。正面に枠開いをし、その下に蓮座を表現している。背面は削り込まれ、厚さ5cm程度である。49-10、11は水受けである。



第48図 墓塔・墓標・自然石検出状況図 (S=1:40)



第49図 墓塔・墓標実測図 (S=1:10)

## 通路（第50・51図）

調査区中央、北西から南東方向に並ぶ石列を検出しており、通路とした。規模は長さ3.2m、幅約1.2mであり、調査区外へと続いている。石列のうちS1～S4についてはステップ状に配置されており（写真図版9下段参照）、その間隔は0.7m等間である。これらの石材は水平を保っていないが、上面が平坦な石材を選んで並べられており、山道を上り下りするための石段といった印象である。この通路を境として墓壙は南西-西側からしか検出されていない。明らかに墓域を意識した作りであり、墓への行き来のための墓道と考えられるものである。

遺物としては通路の一部に転用された五輪塔の地輪を検出している。

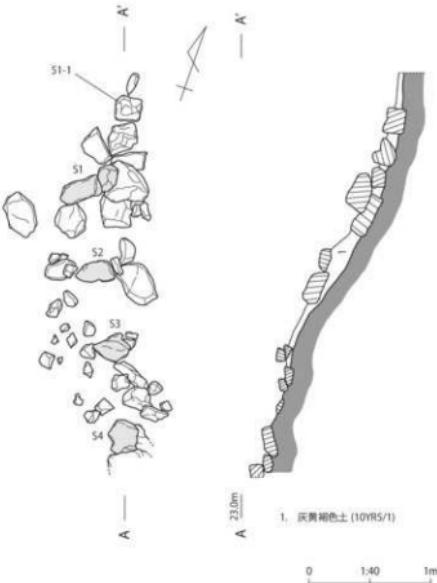
51-1は五輪塔の地輪である。高さ18.5

cm、最大幅22.3cm、最大厚22.0cmを測る。下面是やや凹み、明瞭なノミ痕がみられる。石材は來待石である。

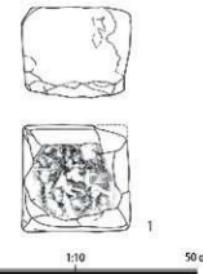
## 遺構外出土遺物（第52図）

第52図は覆土（第7図2層）の出土遺物である。

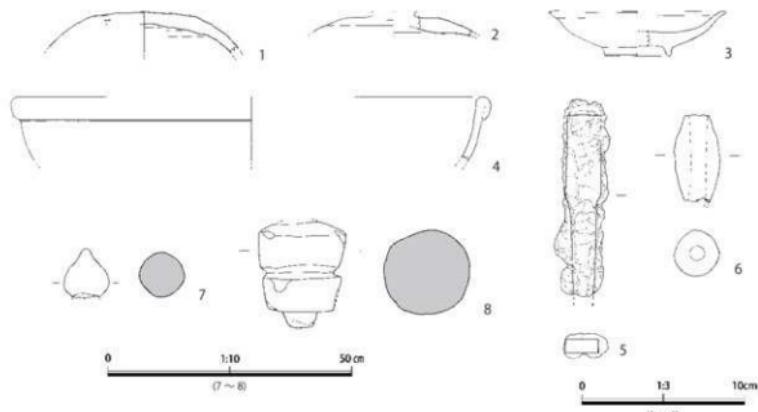
52-1、2は須恵器である。1は坏蓋で、外面にヘラ削りを施す。出雲編年IV期以降のものと思われる。2は蓋の破片である。天井部に宝珠つまみの付く、出雲国府第3～第4型式のものと思われる。52-3は肥前磁器の端反りの皿である。高台の疊付と見込みは無釉である。52-4は陶器、口縁端部玉縁の鉢である。産地、時期は不明である。52-5は残存長11.3cm、幅2.3cm、厚さ0.9cmを測り、下部を欠く鉄製品で蓋と思われる。52-6は残存長5.4cm、直径2.3cmの陶器の土錘である。52-7は五輪塔の空輪で、下部に破損がみられることから風輪が付いていたものと思われる。來待石製で残存長10.2cm、径は9.2cmを測る。52-8は五輪塔の空風輪で、空輪の先端を欠いている。残存長19.6cm、空輪径16.0cm、風輪径14.8cmを測り、砂岩製（いわゆる來待石）である。



第50図 通路実測図 (S=1:40)



第51図 通路出土遺物実測図 (S=1:10)



第52図 遺構外出土遺物実測図 (5=1:3, 1:10)

## 第4節 総括

これまで、白煙遺跡の調査成果について記した。今回の調査では近世墓23基、通路を検出し、銭貨や陶器等近世墓に伴う遺物の他、試掘トレンチから繩文土器や須恵器が出土している。繩文土器や須恵器が出土したことにより、調査区周辺に当該期の遺構が存在することが窺われる。墓壙は狭い範囲に集約され、墓壙周辺には墓塔や墓標が散在していた。検出状況からすると、墓域を廃止した際に墓塔や墓標等を墓域の一部に片付けられたような状況がみられた。

以下、近世墓について概要を述べ、まとめとしたい。尚、近世墓の一覧は表2に記載している。

### 立地

墓域は朝日山から派生する北西向きの斜面に所在する。小高い平坦部に位置し、北側から西側にかけて古浦の集落を見渡すことができ、その先に日本海を眺望できる。集落に近く、景色の良い場所に墓域を造り、先祖の供養を行なっていたものと思われる。

墓域の南東側にも一段高くなった平坦面が調査前の地形測量によって確認されている。そこに設置した試掘トレンチ(T-2)からも墓壙を確認し、墓域が南東側にも広がる様相がみられたことから、山の斜面を二段の平坦面に加工して墓域を造成したものと推察される。

### 近世墓の検出状況・構造

墓壙の平面プランをみると大きく3つに分けられる。それは不整なものも含め円形、長方形、方形であり、円形が15基、長方形が7基、方形が1基である。深さのある円形の墓壙には桶形木棺(以下、早桶と記する)が、長方形、方形の墓壙には箱式木棺(以下、箱棺と記する)が納められていたと考えられる。長方形の墓壙は完掘していないSK04を除き、長軸、短軸が1m以上、深さが0.7m以上とある程度の規格があるように見受けられる。それに対して、円形の土坑は径も深さも様々で、

SK17、18 のように小さくて浅いものから、SK22、23 のように大きくて深いものもある。検出状況をみると、墓壙の形状に違いはあるものの混在している状況がみられ、規則性はみられない。

墓壙は全体が重複しているものはないが、ST15 と ST11・12・14、ST16 と ST09・11 のように一部に重複がみられる。検出状況からすると長方形の墓壙が古で、円形の墓壙が新である新旧関係は確認できる。ただし、そのことから墓域全体の長方形が古で、円形が新であるとは副葬品からみても判断し難い。これは江戸における資料であるが、江戸の埋葬施設の変遷は早桶（円形墓壙）<sup>(4)</sup>は 17 世紀初め頃からあるのに対し、箱棺（方形墓壙）<sup>(5)</sup>は 18 世紀後半以降に現れる。この変遷が当遺跡に当てはまるとは断定できないが、新旧関係は江戸とは逆になり、形状における新旧は明確にできないものと思われる。白烟遺跡では早桶と箱棺が併行して利用されていた時期の可能性が考えられる。

円形の墓壙には小さくて浅い墓壙があり、壙内から人骨は出土していない。火葬墓か土葬墓か判断できないが、形状から推測すると新生児または小児を埋葬し、土を盛ったものと考えられる。

#### 副葬品

墓壙内から人骨、土師器皿、陶磁器、金属製品、銭貨、漆椀が出土している。土師器の皿は底部回転糸切りのものである。また、陶磁器類では九陶Ⅲ期～V期の磁器の紅皿や陶器の皿、碗が出土している。紅皿は、ST06 では漆椀の中に置かれた状態で出土し、ST03 では漆椀の近くから出土している。紅皿と漆椀はセットとして納められた可能性が考えられ、ひとつの副葬方法なのかもしれない。白烟遺跡に近い同町佐陀本郷にある本郷池頭遺跡は、中世末から近世の墓地である。ここからは紅皿や漆椀は出土せず、時期、宗派、地域などによって副葬品に違いがあると思われる。

銭貨の出土状況をみると、ST03 では 6 枚の銭貨が重なり、その周りから黒色の有機物や小さな板材、漆椀が出土している。その状況から銭貨を頭陀袋のようなものに入れ、その周りに板材を置き、それを漆椀のなかに入れたような状況が想定される。ST16 では銭貨は板材の上から出土しており、有機物は出土していないが巾着袋に入れられていたものと思われる。

銭貨は墓壙 23 基中 14 基から出土している。そのなかで 6 枚のものは 3 基のみであり、1～5 枚が 6 基、7～10 枚が 2 基、10 枚以上が 3 基となっている。「三途の川の渡し貨」である六道銭、6 枚という認識はあったと思われるが、それを意識しているようには見受けられない。島根県における他の遺跡の六道銭出土状況をみると、清水大日堂裏古墓群<sup>(6)</sup>や半坂古墓群<sup>(7)</sup>では数基の墓壙から銭貨が 6 枚出土しているが、檜山古墓や寺田 I 遺跡、東船遺跡では 6 枚のものはみられず、本遺跡と同じような状況が窺われる。また、銭の種類についてみれば、寛永通寶が出土数の 3 分の 2 を占めている。古寛永より新寛永（文銭を含む）が多く、他に中国銭（模範銭と思われる）が混在しているが数は少ない。

その他に毛抜や握鉄、煙管など数は少ないが出土している。副葬品について、銭貨、刃物、煙管、毛抜を死出の旅に伴う「トラベルセット」として定義している研究がある。<sup>(11)</sup> 今回の調査ではこのすべてが出土した墓壙ではなく、「トラベルセット」にあたる遺物が出土した墓壙は 15 基である。そのうち 3 セットは 1 基、2 セットは 3 基、銭貨のみのものは 11 基となっている（表 1 参照）。本遺跡においては銭貨のみが多く、葬送儀礼に対する意識や習俗、経済状況の違いが関係していると思われる。また、出土遺物、特に六道銭や金属製品などを見る限り、副葬品に対して規則性はみられないが、銭貨

と小さな板材が一緒に出土する点では、銭貨が巾着袋（頭陀袋）に入れられていた可能性が考えられ、また、漆椀もセットで副葬する習慣があったのかもしれない。

### 近世墓の時期

検出した近世墓について、明確な時期が判断されるのは銭貨と陶磁器である。銭貨のうち、中国銭（模鋳銭）を除く寛永通寶は古寛永、新寛永、文銭が出土している。古寛永は1636年～1659年に鋳造されたものでそれ以降の墓壙となりえるが、銭貨は後世まで残るものであり、銭貨から詳細な時期は判断できない。陶磁器は九陶Ⅲ～V期のものが出土し、紅皿だけをみれば九陶IV期の18世紀後半頃のものと思われる。また、山陰地方における現在までの調査成果から、山陰において近世後期になると副葬品の種類や量が増加する傾向にあり、煙管は18世紀代になり副葬品としてよく出土する。<sup>(19)</sup>木棺の型式や遺物の年代から、近世墓の時期は概ね18世紀後半以降と捉えられる。

白烟遺跡が所在する当地は、地元の方によれば、鹿島町古浦に現存する平沙山海禪寺の古い墓地であったと言い伝えられている。海禪寺は『寺院明細帳』において、開創年月は不詳、康保年中（964～968年）には古浦（詳細な場所は不明）にあったとされ、明和7年（1770年）7月に現在の場所（鹿島町古浦8）に移転したと記されている。現在の海禪寺の墓地は寺院周辺に造られているが、それ以前の墓地は古浦地区内の3箇所にあったとされ、そのなかでも調査地の墓地が一番古いと言い伝えられている。海禪寺にそれを伝える資料は現存しておらず、言い伝えによるもので墓地の明確な時期はわかつていない。

今回調査を行った遺物の年代観からすれば、明和7年に海禪寺が移転したことにより、埋葬が行われなくなった墓域の可能性が考えられる。

以上、近世墓について報告した。調査では近世における埋葬形式や副葬品についてその一端を垣間見ることができた。埋葬形式は一地域においても宗派、葬送儀礼に対する意識や習俗、経済状況などによって異なり、一概に言えるものではないが、今回の調査成果は近世墓を検討するうえで有意義な資料となり得た。近世墓の調査事例は少しずつ蓄積されているが、古墳や集落跡の調査例に比べれば少ない。島根県内をみると、出雲部に多く、石見部、隠岐には少ない傾向にあり（表2参照）、出雲部では有名な安来大日堂古墓群の他、半坂古墓群や板屋II遺跡などから多くの調査成果が得られている。これまでの調査成果と今後の調査事例の増加によって、近世墓の様相や地域性が明らかになることを期待したい。

#### 【註】

- (1) 本報告では墓塔のなかに五輪塔と宝篋印塔を、墓標のなかに平頂方柱型墓標、円頂円柱型墓標、水受、石台を含むものとして記述する。
- (2) ここではいわゆる「ス貝寶」を古寛永、「ハ貝寶」を新寛永とした。また、背面に「文」の文字をもつ新寛永については「文銭」という表記を行ない区別している。製造年代については『日本出土銭總覧』を参考に、古寛永1636年～1659年、新寛永1697年～1747年、1767年～1781年、文銭1668年～1683年の年代観とした。
- (3) 江戸遺跡研究会2001『図説 江戸考古学研究事典』「IV江戸の墓と葬制」では遺体の収納容器の桶形木棺の直径、高さを各60cm程度と記しており、箱形木棺も同等の深さまたはそれ以上と考えられる。

- (4) 江戸遺跡研究会 2001『図説 江戸考古学研究事典』「IV江戸の墓と葬式」埋葬施設の変遷の表を参考にしている。
- (5) 烏根県教育庁文化財課 古代文化センター 専門研究員 目次謙一氏に小さな墓壙について以下のようないご教示を得た。  
「白烟遺跡で確認された小さな墓壙は、形状や火葬骨を入れる骨壺なども検出されていないことから、新生児または小児を埋葬し、土を盛ったものと考えられる。」
- (6) 清水大日堂古墓群では 100 基のうち 28 基から銭貨が出土し、6 枚のものは 4 基である。
- (7) 半坂古墓群では 59 基のうち 16 基から銭貨が出土し、6 枚のものは 5 基である。
- (8) 檜山古墓群では 17 基のうち 3 基から銭貨が出土し、6 枚のものはない。
- (9) 寺田 1 遺跡では 9 基のうち 7 基から銭貨が出土し、6 枚のものはない。
- (10) 東船遺跡では 19 基のうち 7 基から銭貨が出土し、6 枚のものはみられないが、24 枚や 27 枚の多数枚が出土している。
- (11) 中森祥氏は『出土銭貨研究会研究紀要 出土銭貨研究 第 2 号』の「トラベルセットの成立・山陰における近世墓の副葬品から」において、副葬品数の多い銭貨、刃物、煙管、毛抜を死出の旅に伴う「トラベルセット」として定義している。
- (12) 中森祥氏は『出土銭貨研究会研究紀要 出土銭貨研究 第 2 号』の「トラベルセットの成立・山陰における近世墓の副葬品から」の中で山陰地方で 20 基以上の墓が検出された遺跡において、墓からの出土遺物率をみると、17 世紀代には低く、18 世紀以降になると高くなる傾向が窺われる。また、煙管は 18 世紀代になり副葬品としてよくみられる。と記している。

表1 墓壙内出土品(銭貨・煙管・毛抜・刃物・鉄)の組み合わせ

1点	2点	3点
銭貨のみ	銭貨+煙管	銭貨+毛抜
11	1	1

表2 島根県内の近世墓

	遺跡名	所在地	基數	主な出土遺物
出土	清水大日堂古墓群	安来市宇賀町	100	人骨、銭貨、土師器皿、陶磁器、金属製品、繩
	木原池遺跡	松江市鹿島町	5	銭貨、土師器皿、鉄製品、須恵器、陶磁器
	神山古墓群	松江市上乃木	17	銭貨、金属製品、土師器皿、数珠玉
	島田池遺跡	松江市東出雲町	3	銭貨、土師器皿
	袋原 D 遺跡	松江市平成町	2	銭貨、土師器皿
	半坂古墓群	松江市玉置町	59	銭貨、土師器皿、金属製品、陶磁器、繩、碁石、土鉢
	宍ノ奥遺跡	松江市八雲町	21	銭貨、陶磁器、土師器皿、鉄製品
	布志名大谷遺跡	松江市玉置町	1か	繩、砾石
	三大寺遺跡	松江市朝倉町	13	人骨、銭貨、鉄釘
	野川遺跡	松江市大河内町	1	銭貨、土師器皿
	角山遺跡	出雲市上遠の町	2 以上か	人骨、銭貨、繩、数珠玉、土師器皿、折敷
	余小路遺跡	出雲市松崎町下町	16 か	人骨、土師器皿、銭貨、金属製品、折敷、繩、大切口
	矢野遺跡	出雲市久野町	1	人骨、土師器皿、陶器
	保坂石谷遺跡	出雲市瀬戸町	-	人骨、土師器皿、陶磁器
	上河童遺跡	出雲市塩冶町	4 以上か	人骨、銭貨、白磁金魚の焼き物、鉄製品、土師器皿、ガラス玉、陶磁器
	柏枝本郷遺跡	出雲市白枝町	3	人骨、土師器皿、繩
	高浜日遺跡	出雲市里方町	2	銭貨、土師器皿、繩、数珠玉、位牌
	寺田 1 遺跡	雲南市本次町	9	人骨、金属製品、陶磁器、銭貨、繩
石見	波坂遺跡	雲南市三刀屋町	1 か	陶磁器、繩
	上津古墓	雲南市加茂町	-	五輪塔
	坂尾 1 遺跡	雲南市坂尾町	45	銭貨、陶磁器、鉄製品、繩
	神上城跡土坑墓群	江津市二宮町	18	銭貨、金属製品、数珠玉
	鴨路古墓	江津市敬川町	5	土師器皿、金属製品
因幡	垂富古墓群	浜田市池町	9	銭貨、金属製品、土製人形
	新屋ヶ岡遺跡	浜田市三隅町	10	銭貨、数珠玉、陶器碗
	丸原 1 遺跡	庭足郡吉賀町	9	人骨、銭貨
隠岐	隠岐遺跡	隠岐郡西郷町	19	銭貨、鉄製品、漆器、砂、水滴

表3 白烟遺跡遺構一覧表

遺構名	旧遺構名	平面形	規 模 (m)			主 軸	人 骨	土 壁 型	陶 瓦 器	漆 料	錢 貨			金屬製品			その他の 埋蔵物	備 考			
			長軸 (IT) 直径	短軸 (IT) 直径	深さ						古	新 文	その他の 不明	銅	銀	鉄	錫	金			
ST01	SK01	圓丸長方形	1.58	1.02	0.77	N-56°-W	有	3	-	-	3	4	1	-	1	-	-	-	磁器…九頭IV期		
ST02	SK19	円形	0.59	-	0.28	-	-	無	1	2	1	-	-	-	-	-	-	-			
ST03	SK21	不整円形	0.75	0.68	0.41	-	-	無	1	-	1	3	-	3	-	-	-	1	開元通寶 开元元寶 *その他…板材		
ST04	SK04	長方形	(0.96)	(0.86)	(0.5)	N-26°-W	無	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-			
ST05	SK20	円形	0.95	-	0.68	-	-	無	1	2	-	4	-	2	-	-	-	-			
ST06	SK18	円形	0.73	-	0.33	-	-	無	1	1	1	-	1	1	-	-	-	-			
ST07	SK07	円形	(1.06)	-	(0.64)	-	-	無	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-			
ST08	SK08	円形	(1.17)	-	(1.0)	-	-	無	-	-	1	-	-	-	-	-	-	1	*その他…板材		
ST09	SK09	不整円形	0.94	0.72	0.34	-	-	無	1	1	-	-	1	-	-	-	-	-			
ST10	SK05	長方形	1.5	1.1	0.9	N-15°-W	無	4	-	1	-	-	-	-	-	-	-	1	-	1	
ST11	SK22	圓丸方形	1.08	1.05	0.72	-	-	無	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-			
ST12	SK03	円形	1.24	-	0.9	-	-	有	1	1	1	3	3	-	-	-	-	-			
ST13	SK02	不整長方形	1.4	1.1	0.42	N-13°-W	有	1	-	1	-	1	-	3	9	-	-	1	皇宋通寶 元豐通寶 聖宋元宝 *その他…鐵		
ST14	SK10	不整円形	0.83	0.77	0.28	-	-	無	1	-	-	6	11	2	-	-	-	-			
ST15	SK15	長方形	1.53	1.24	0.7	N-28°-W	無	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1			
ST16	SK06	長方形	(1.4)	(1.1)	(0.8)	N-20°-W	無	7	-	1	2	-	-	-	-	-	-	2	*その他…板材		
ST17	SK17	円形	0.53	-	0.18	-	-	無	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-			
ST18	SK16	円形	0.5	-	0.17	-	-	無	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-			
ST19	SK11	円形	(1.18)	-	(0.92)	-	-	無	4	-	-	-	-	-	-	-	-	-			
ST20	SK14	不整円形	1.18	1.08	0.7	-	-	無	1	1	-	1	-	1	-	-	-	-			
ST21	SK12	不整長方形	1.58	1.02	0.77	N-10°-E	有	2	1	-	4	8	4	-	-	1	2	-	1	2	*その他…散珠玉
ST22	SK13	不整椭円形	1.58	1.05	1.0	-	-	有	1	1	-	2	5	-	1	-	1	4	1	1	磁器…九頭IV期 永樂通寶
ST23	SK23	不整椭円形	1.65	1.45	0.88	-	-	無	3	-	-	3	1	1	-	-	-	1	皇宋通寶 *その他…鏡座頭 (付蓋)		

\* 1. 規模において () が付いているものは完掘していない土坑で、現況における数値である。

2. 出土遺物の数には図化できなかつたものも含まれる。

3. 錢貨の古は古寛永、新は新寛永、文は文政、その他は寛永通宝以外の錢貨である。

4. 煙管のうちSK21、22については、雁首と吸口の2点出土しているが、セット品と捉え1個体として計上している。

表4 白烟遺跡遺物観察表(土器・陶磁器)

遺物番号	遺構名	出土土層・位置	種類	器種	法寸(㎝)	調整寸(㎝)	調整・文様・装飾の特徴		色調	備考		
							口径	底径	高さ			
5-1	T-2	-	縄文土器	深鉢	-	-	4.2	外 内	二枚目条板 二枚目条板	外 内	に点・褐色 灰褐色	前期、西川Ⅱ式
5-2	T-2	-	縄文土器	-	-	-	3.1	外 内	無文	外 内	に点・褐色 に点・褐色	中期後葉、里木Ⅱ式
5-3	T-2	-	縄文土器	-	-	-	3.3	外 内	ナデ	外 内	褐色 に点・褐色	後期
5-4	T-2	-	弥生土器	直・裏	12.6	-	1.3	外 内	四線文、ナデ	外 内	浅黄褐色 浅黄褐色	V-I 種式
5-5	T-2	-	土師器	直	10.2	6.5	2.4	外 内	底部回転系切り、回転ナデ	外 内	褐色 褐色	在地系
5-6	T-2	-	土師器	直	11.4	6.6	2.9	外 内	底部回転系切り、回転ナデ	外 内	褐色 褐色	在地系
5-7	T-1	-	磁器	直	-	9.2	2.1	外 内	染付、滑付無	外 内	褐色	肥前、九胸Ⅳ期
9-1	ST01	底面直上	土師器	直	9.9	4.4	2.4	外 内	底部回転系切り、回転ナデ	外 内	に点・黃褐色 に点・黃褐色	在地系
9-2	ST01	底面直上	土師器	直	10.9	6.2	2.5	外 内	底部回転系切り、回転ナデ	外 内	明褐色 明褐色	在地系
9-3	ST01	底面直上	土師器	直	-	6.6	2.1	外 内	底部回転系切り、回転ナデ	外 内	褐色 褐色	在地系
11-1	ST02	埋土・1層	磁器	紅皿	4.2	1.7	1.7	外 内	型押し成形、篇文、高台無	外 内	灰白色 灰白色	肥前 九胸Ⅳ期、18世紀後平山時代
11-2	ST02	埋土・1層	磁器	紅皿	5.8	2.3	2.4	外 内	染付・草文、滑付無	外 内	灰白色 灰白色	肥前 九胸Ⅳ期、18世紀後平山時代
11-3	ST03	埋土・1層	土師器	直	10.8	6.2	2.3	外 内	底部回転系切り、回転ナデ	外 内	褐色 褐色	在地系
14-1	ST05	埋土・1層	土師器	直	8.9	4.7	1.8	外 内	底部回転系切り、回転ナデ	外 内	褐色 褐色	在地系
14-2	ST05	埋土・1層	陶器	直	-	-	1.4	外 内	透明釉	外 内	淡褐色 綠色	14世紀 肥前、九胸Ⅳ期
14-3	ST05	埋土・1層	磁器	直	-	-	2.0	外 内	染付	外 内	灰白色 灰白色	肥前、九胸Ⅳ期、19世紀代
16-1	ST06	埋土・2層	土師器	直	-	3.6	0.8	外 内	底部回転系切り	外 内	褐色 褐色	在地系
16-2	ST06	底面直上	磁器	紅皿	5.4	2.6	2.0	外 内	コニニガウ印押	外 内	青灰色 青灰色	肥前、九胸Ⅳ期
22-1	ST10	埋土・8層	土師器	直	9.0	5.9	1.9	外 内	底部回転系切り、回転ナデ	外 内	黃褐色 黃褐色	在地系
22-2	ST10	埋土・8層	土師器	直	10.8	7.1	2.3	外 内	底部回転系切り、回転ナデ	外 内	褐色 褐色	在地系
22-3	ST10	埋土・8層	土師器	直	10.9	6.7	2.4	外 内	底部回転系切り、回転ナデ	外 内	浅黄褐色 浅黄褐色	在地系
22-4	ST10	埋土・9層	土師器	直	11.5	-	1.7	外 内	回転ナデ	外 内	に点・黃褐色 に点・黃褐色	在地系
24-1	ST11	埋土・4層	土師器	直	10.5	7.0	2.4	外 内	底部回転系切り、回転ナデ	外 内	淡褐色 淡茶色	在地系
26-1	ST12	埋土・5層	土師器	直	9.4	5.2	2.0	外 内	底部回転系切り、回転ナデ	外 内	褐色 褐色	在地系
32-1	ST15	埋土・4層	土師器	直	12.0	7.0	2.1	外 内	底部回転系切り、回転ナデ	外 内	淡褐色 淡褐色	在地系
34-1	ST16	埋土・3層	土師器	直	9.0	4.8	2.7	外 内	底部回転系切り、回転ナデ	外 内	褐色 褐色	在地系
34-2	ST16	埋土・3層	土師器	直	9.2	4.6	2.3	外 内	底部回転系切り、回転ナデ	外 内	褐色 褐色	在地系
34-3	ST16	埋土・3層	土師器	直	9.2	4.7	2.3	外 内	底部回転系切り、回転ナデ	外 内	褐色 褐色	在地系
34-4	ST16	底面直上	土師器	直	9.8	5.5	2.4	外 内	底部回転系切り、回転ナデ	外 内	褐色 褐色	在地系
34-5	ST16	底面直上	土師器	直	10.6	6.0	2.3	外 内	底部回転系切り、回転ナデ	外 内	褐色 褐色	在地系
34-6	ST16	底面直上	土師器	直	10.5	8.0	2.6	外 内	底部回転系切り、回転ナデ	外 内	褐色 褐色	在地系
34-7	ST16	底面直上	土師器	直	10.6	8.4	2.6	外 内	底部回転系切り、回転ナデ	外 内	褐色 褐色	在地系
39-1	ST19	埋土・4層	土師器	直	9.2	5.2	1.9	外 内	底部回転系切り、回転ナデ	外 内	褐色 褐色	在地系
39-2	ST19	埋土・4層	土師器	直	9.9	4.8	2.4	外 内	底部回転系切り、回転ナデ	外 内	に点・黃褐色 に点・黃褐色	在地系
39-3	ST19	埋土・4層	土師器	直	9.5	5.0	2.1	外 内	底部回転系切り、回転ナデ	外 内	淡褐色 淡褐色	在地系
39-4	ST19	埋土・4層	土師器	直	11.0	-	2.2	外 内	回転ナデ 回転ナデ	外 内	褐色 褐色	在地系

遺物 番号	遺構名	出土土層 ・位置	種類	器種	法 量 (cm)			調整・文様・装飾の特徴	色 調	備 考
					口径	底径	器高			
41-1	ST20	埋土・4層	土師器	瓶	9.6	5.0	2.3	外 底部回転系切り、回転ナデ 内 回転ナデ	外 黄色 内 黄色	在地系
41-2	ST20	埋土・4層	陶器	瓶	11.0	-	4.6	外 内	外 灰色 内 灰色	肥前、九陶IV期、18世紀以前
43-1	ST21	底面直上	土師器	瓶	9.4	5.7	2.0	外 底部回転系切り、回転ナデ 内 回転ナデ	外 黄色 内 黄色	在地系
43-2	ST21	底面直上	土師器	瓶	-	6.6	1.4	外 底部回転系切り、回転ナデ 内 回転ナデ	外 粉色 内 粉色	在地系
43-3	ST21	埋土・1層	陶器	瓶	11.0	-	1.5	外 内 わずかに文様がみられる	外 灰色 内 灰色	肥前
45-1	ST22	埋土・1層	土師器	瓶	-	5.0	1.5	外 内 底部回転系切り、回転ナデ 内 回転ナデ	外 黄褐色 内 黄褐色	在地系
45-2	ST22	埋土・1層	磁器	紅皿	5.0	-	1.1	外 内 型押し成形、輪文	外 内	肥前、九陶IV期、18世紀後半
47-1	ST23	埋土・1層	須恵器	坪皿	-	-	2.2	外 内 回転ナデ 内 回転ナデ	外 灰色 内 灰色	
47-2	ST23	埋土・2層	土師器	瓶	10.3	5.2	2.7	外 底部回転系切り、回転ナデ 内 回転ナデ	外 粉色 内 粉色	在地系
47-3	ST23	埋土・2層	土師器	瓶	10.4	5.8	2.4	外 底部回転系切り、回転ナデ 内 回転ナデ	外 粉色 内 粉色	在地系
47-4	ST23	埋土・2層	土師器	瓶	10.4	6.0	1.9	外 底部回転系切り、回転ナデ 内 回転ナデ	外 粉色 内 粉色	在地系
52-1	遺構外	第7回2層	須恵器	坪皿	-	-	1.8	外 内 回転ヘラ削り、回転ナデ 内 回転ナデ	外 灰色 内 灰色	平安編年記期以降
52-2	遺構外	第7回2層	須恵器	蓋	-	-	1.2	外 内 回転ヘラ削り 内 回転ナデ	外 灰色 内 灰色	宝珠つまみの蓋? 別宮御府第3～第4型式
52-3	遺構外	第7回2層	磁器	瓶	11.0	4.0	2.8	外 内	外 灰白色 内 灰白色	輪足 高台付、見込みは無能
52-4	遺構外	第7回2層	陶器	鉢	29.0	-	4.0	外 内	外 粉色 内 粉色	口縁端部玉締状 在地か

## (石製品)

遺物 番号	遺構名	出土土層	種類	法 量 (cm)			重量 (g)	備 考
				直徑	厚さ	孔直径		
43-9	ST21	埋土・1層	数珠玉	0.6	0.5	0.1	1g 以下	遺落色、石材不明
43-10	ST21	埋土・1層	数珠玉	0.6	0.5	0.1	1g 以下	白色。石材不明

## (土製品)

遺物 番号	遺構名	出土土層	種類	法 量 (cm)			重量 (g)	備 考
				長さ	幅大軸	孔径		
28-1	ST13	埋土・2層	土器	2.8	0.8	0.3	1.0	一部欠損
52-6	遺構外	第7回2層	土器	5.4	2.3	0.9	36.0	陶器製、一部欠損

## (木製品)

遺物 番号	遺構名	出土土層	種類	法 量 (cm)			備 考
				長さ	幅大軸	最大厚	
34-10	ST16	底面直上	板材	3.5	3.0	0.8	片面に錢貨の痕跡有
34-11	ST16	底面直上	板材	3.5	2.7	0.8	

## (金属製品)

遺物番号	遺構名	出土土層	種類	材質	法 間 (cm)	重量 (g)	備 考
9-4	ST01	底面直上	毛抜き	鉄	長さ 9.4/最大幅 1.0/最大厚 0.3	25.8	
22-5	ST10	埋土・8層	煙管・椎首	真鍮	長さ 6.1/火皿Φ 1.5/小口Φ 1.1	3.0	範片
22-6	ST10	埋土・8層	不明	鉄	長さ 7.4/最大幅 0.8/最大厚 0.2	5.0	先端は尖り、やや渋曲する
32-2	ST15	埋土・4層	釘 (角釘)	鉄	長さ 3.9/頭部幅 0.7/胴部幅 0.5/胴部厚 0.4	3.0	先端欠損、L字状に曲がる
43-4	ST21	埋土・1層	釘 (角釘)	鉄	長さ 0.8/頭部幅 0.8/頭部幅 0.4/頭部厚 0.2	1g以下	先端側欠損
43-5	ST21	埋土・1層	釘 (角釘)	鉄	長さ 2.1/頭部幅 0.9/胴部幅 0.2/胴部厚 0.2	1g以下	先端側欠損
43-6	ST21	埋土・1層	不明	鉄	長さ 5.5/頭部幅 3.9/胴部幅 1.3/胴部厚 0.8	33.6	先端側欠損、「く」の字に曲がる
43-7	ST21	底面直上	煙管・椎首	真鍮	長さ 6.8/火皿Φ 1.8/小口Φ 1.0	9.0	鑑字の一部が残り、椎着痕がみられる
43-8	ST21	底面直上	煙管・吸口	真鍮	長さ 6.2/小口Φ 1.0/口付Φ 0.35	6.0	鑑字の一部が残る
45-3	ST22	底面直上	煙管・椎首	真鍮	長さ 7.3/火皿Φ 1.6/小口Φ 0.9	12.0	鑑字の一部が残り、椎着痕がみられる
45-4	ST22	底面直上	煙管・吸口	真鍮	長さ 4.8/小口Φ 1.0	5.0	口付部欠損、鑑字の一部が残る
45-5	ST22	底面直上	鋸跡	鉄	長さ 10.8/刃部幅 1.3/鋸部最大厚 0.5	24.0	一部欠損
45-6	ST22	底面直上	鋸金	鉄	長さ 7.7/最大幅 1.7/最大厚 0.2	15.0	鋸刃片端に木質付着、短辺片面に孔あり
45-7	ST22	埋土・2層	釘 (角釘)	鉄	長さ 5.1/頭部幅 1.4/胴部幅 1.1/胴部厚 0.8	24.0	先端欠損
45-8	ST22	埋土・2層	釘 (角釘)	鉄	長さ 2.0/頭部幅 1.2/胴部幅 0.5/胴部厚 0.3	1.0	先端欠損
45-9	ST22	埋土・2層	釘 (角釘)	鉄	長さ 1.9/頭部幅 1.0/胴部幅 0.3/胴部厚 0.2	1.0	先端欠損
45-10	ST22	埋土・2層	釘 (角釘)	鉄	長さ 1.5/頭部幅 1.0/胴部幅 0.2/胴部厚 0.2	1g以下	先端欠損
45-11	ST22	埋土・2層	針	鉄	長さ 2.9/最大幅 0.3/最大厚 0.2	1g以下	先端欠損、頭部に孔あり
52-5	遺構外	第7回2層	盤か	鉄	長さ 11.3/最大幅 2.3/最大厚 0.9	102.0	一部欠損

## (錢貨)

遺物番号	遺構名	種類	法 間 (mm)			質量 (g)	残存率 (%)	質感 / 直径	備 考
			直徑	孔径	厚さ				
5-8	T-I	寛永通寶	23.0	6.5	1.0	2.0	100	0.09	T-2-3 新寛永
5-9	T-I	寛永通寶	23.0	6.5	1.0	1.0	90	0.04	T-2-2 新寛永
5-10	T-I	寛永通寶	23.0	6.0	1.0	2.0	100	0.09	T-2-1 新寛永
9-5	ST01	寛永通寶	24.5	5.5	1.0	3.0	100	0.12	№88-5-1 古寛永
9-6	ST01	寛永通寶	25.0	5.0	1.5	3.0	100	0.12	№88-3 古寛永
9-7	ST01	寛永通寶	25.0	5.5	1.5	3.0	100	0.12	№81-1 古寛永
9-8	ST01	寛永通寶	25.0	5.5	1.0	3.0	100	0.12	№88-2 新寛永 文銘
9-9	ST01	寛永通寶	24.5	6.0	1.5	4.0	100	0.16	№88-5-2 新寛永
9-10	ST01	寛永通寶	28.0	6.0	1.0	3.0	100	0.11	№88-4 新寛永
9-11	ST01	寛永通寶	23.0	6.5	1.0	3.0	100	0.13	№88-1 新寛永
9-12	ST01	寛永通寶	25.5	5.5	1.5	4.0(2枚)	100	-	№81-2 新寛永
		不明	23.5	5.5	1.0				
							95	-	2枚付着

遺物番号	遺構名	種類	法 僧 (mm)			質量 (g)	残存率 (%)	質量 / 直径	備考
			直径	孔径	厚さ				
11-4	ST03	開元通寶	24.5	7.0	1.0	2.0	100	0.08	№36-2
11-5	ST03	開元通寶	22.5	7.0	0.5	3.0	100	0.13	№36-4
11-6	ST03	祥符元寶	22.5	6.0	1.0	2.0	100	0.09	№36-1 1009年
11-7	ST03	寛永通寶	25.0	5.0	1.0	3.0	100	0.12	№36-5 古寛永
11-8	ST03	寛永通寶	24.0	5.5	1.0	3.0	100	0.12	№36-6 古寛永
11-9	ST03	寛永通寶	24.5	5.0	1.0	3.0	100	0.12	№36-3 古寛永
14-4	ST05	寛永通寶	24.5	7.0	1.0	1.0	99	0.04	№43-1 新寛永
14-5	ST05	寛永通寶	22.5	7.0	0.5	1.0	100	0.04	№43-2 新寛永
14-6	ST05	寛永通寶	24.0	6.0	1.0	3.0	100	0.13	№なし-1 新寛永 木の板に接着
14-7	ST05	寛永通寶	23.5	6.0	1.0	1.0	70	0.04	№なし-2 新寛永 木の板に接着
16-3	ST06	寛永通寶	25.5	6.0	1.0	2.0	100	0.08	№18 新寛永 文政
16-4	ST06	寛永通寶	25.5	6.0	1.0	2.0	99	0.08	№12 新寛永
20-1	ST09	寛永通寶	25.0	6.0	1.0	3.0	100	0.12	№26 新寛永 文政
26-2	ST12	寛永通寶	24.0	5.5	1.0	3.0	100	0.13	№65-5 古寛永
26-3	ST12	寛永通寶	25.0	5.0	1.5	3.0	100	0.12	№65-3 古寛永
26-4	ST12	寛永通寶	25.0	5.5	1.0	2.0	90	0.08	№65-6 古寛永
26-5	ST12	寛永通寶	23.5	6.0	1.0	2.0	99	0.09	№65-4 新寛永
26-6	ST12	寛永通寶	24.0	6.0	1.0	2.0	100	0.08	№65-2 新寛永
26-7	ST12	寛永通寶	24.5	6.0	1.5	3.0	100	0.12	№65-1 新寛永
28-2	ST13	皇宋通寶	25.0	6.5	2.0		100	-	
		不明	25.0	不明	1.5		100	-	
		不明	25.0	不明	不明	14.0(5枚)	100	-	№37 北宋錢
		不明	25.0	不明	不明		100	-	5枚付着
		不明	25.0	6.0	不明		100	-	
28-3	ST13	元豐通寶	25.5	6.5	不明		100	-	
		不明	25.5	不明	不明	11.0(4枚)	100	-	№42-2
		不明	25.5	不明	不明		100	-	4枚付着
		不明	25.5	6.0	不明		100	-	
28-4	ST13	聖宋元宝	25.0	6.5	1.5	3.0	80	0.12	№42-1 1225年
28-5	ST13	寛永通寶	28.0	6.0	1.0	1.0	100	0.04	№58 新寛永
30-1	ST14	寛永通寶	24.0	5.5	1.0	3.0	100	0.13	№19-3 古寛永
30-2	ST14	寛永通寶	25.0	5.5	1.0	4.0	100	0.16	№19-2 古寛永
30-3	ST14	寛永通寶	24.5	6.0	1.5	4.0	100	0.16	№19-9 古寛永
30-4	ST14	寛永通寶	25.0	6.0	1.5	4.0	100	0.16	№19-1-1 古寛永
30-5	ST14	寛永通寶	24.5	6.0	1.0	3.0	100	0.12	№19-1-2 古寛永
30-6	ST14	寛永通寶	25.0	5.0	1.0	3.0	100	0.12	№19-1-3 古寛永

遺物番号	遺構名	種類	法 墨 (mm)			質地 (g)	残存率 (%)	質地 / 直径	備 考
			直徑	孔径	厚さ				
30-7	ST14	窓透質	25.5	5.5	1.0	3.0	100	0.12	№ 19-10 新窓透 文鏡
30-8	ST14	窓透質	25.5	6.0	1.0	3.0	100	0.12	№ 19-14 新窓透 文鏡
30-9	ST14	窓透質	24.0	6.0	1.0	3.0	100	0.13	№ 19-4 新窓透 文鏡 孔あり
30-10	ST14	窓透質	23.5	6.5	1.0	3.0	100	0.13	№ 19-13-1 新窓透
30-11	ST14	窓透質	23.5	6.0	1.0	3.0	100	0.13	№ 19-13-2 新窓透
30-12	ST14	窓透質	23.5	6.5	1.0	2.0	100	0.09	№ 19-13-3 新窓透
30-13	ST14	窓透質	23.5	6.0	1.0	3.0	100	0.13	№ 19-13-4 新窓透
30-14	ST14	窓透質	25.0	6.0	1.0	3.0	100	0.12	№ 19-5 新窓透
30-15	ST14	窓透質	24.5	6.0	1.5	4.0	100	0.16	№ 19-6 新窓透
30-16	ST14	窓透質	25.0	6.5	1.0	3.0	100	0.12	№ 19-7 新窓透
30-17	ST14	窓透質	24.0	6.0	1.0	3.0	100	0.13	№ 19-8 新窓透
30-18	ST14	窓透質	24.5	6.0	1.0	2.0	100	0.08	№ 19-11 新窓透
30-19	ST14	窓透質	24.0	6.0	1.0	3.0	100	0.13	№ 19-12 新窓透
34-8	ST16	窓透質	25.0	5.5	1.5	3.0	100	0.12	№ 27 古窓透
34-9	ST16	窓透質	24.0	5.0	1.0	1.0	80	0.04	№ 28 古窓透
36-1	ST17	窓透質	24.0	6.0	1.5	2.0	95	0.08	№ 14-2 新窓透
36-2	ST17	窓透質	23.0	6.0	1.0	1.0	100	0.04	№ 14-1 新窓透
41-3	ST20	窓透質	24.0	5.0	1.5	3.0	100	0.13	№ 34-1 古窓透
41-4	ST20	窓透質	25.5	5.5	1.5	3.0	100	0.12	№ 34-2 新窓透 文鏡
43-11	ST21	窓透質	24.5	6.0	1.0	3.0	100	0.12	№ 53-6 古窓透
43-12	ST21	窓透質	24.5	5.0	1.0	3.0	100	0.12	№ 53-5 古窓透
43-13	ST21	窓透質	24.5	5.5	1.0	3.0	100	0.12	№ 53-9 古窓透
43-14	ST21	窓透質	24.0	6.0	1.0	3.0	100	0.13	№ 53-1-1 古窓透
43-15	ST21	窓透質	25.0	6.0	1.5	4.0	100	0.16	№ 53-1-3 新窓透 文鏡
43-16	ST21	窓透質	25.5	6.0	1.0	3.0	100	0.12	№ 53-8 新窓透 文鏡
43-17	ST21	窓透質	25.0	6.0	1.5	4.0	100	0.16	№ 53-4 新窓透 文鏡
43-18	ST21	窓透質	25.0	5.0	1.0	3.0	100	0.12	№ 47-1 新窓透 文鏡
43-19	ST21	窓透質	23.5	5.5	1.0	3.0	100	0.13	№ 53-10 新窓透
43-20	ST21	窓透質	24.0	6.0	1.0	2.0	100	0.08	№ 53-7 新窓透
43-21	ST21	窓透質	24.0	6.0	1.0	3.0	100	0.13	№ 53-1-2 新窓透
43-22	ST21	窓透質	24.0	6.0	1.0	3.0	100	0.13	№ 47-3-1 新窓透
43-23	ST21	窓透質	23.0	6.0	1.0	3.0	100	0.13	№ 53-3 新窓透
43-24	ST21	窓透質	25.0	6.5	1.0	3.0	100	0.12	№ 53-2 新窓透
43-25	ST21	窓透質	23.5	6.0	1.0	3.0	100	0.13	№ 47-3-2 新窓透
43-26	ST21	窓透質	25.0	5.5	1.0	3.0	100	0.12	№ 47-2 新窓透
45-12	ST22	永樂透質	24.5	6.0	1.0	2.0	90	0.08	№なし 模彷器 1573～1615(天正～慶長頃)

遺物 番号	遺構名	種類	法 盤 (mm)			質量 (g)	残存率 (%)	質量 / 直径	備考
			直径	孔径	厚さ				
45-13	ST22	寛永造貫	24.0	5.0	1.0	3.0	100	0.12	№ 78-3 古寛永
45-14	ST22	寛永造貫	25.0	5.5	1.0	3.0	100	0.12	№ 78-5 古寛永
45-15	ST22	寛永造貫	24.5	5.0	1.0	3.0	100	0.12	№ 78-1-1 新寛永
45-16	ST22	寛永造貫	23.0	6.0	0.5	2.0	99	0.09	№ 73- 新寛永
45-17	ST22	寛永造貫	24.0	6.0	1.0	2.0	100	0.08	№ 78-4 新寛永
45-18	ST22	寛永造貫	22.5	6.0	1.0	3.0	100	0.13	№ 78-2 新寛永
45-19	ST22	寛永造貫	24.5	6.0	1.0	3.0	100	0.12	№ 78-1-2 新寛永
47-5	ST23	享保造貫	24.5	7.0	1.0	3.0	100	0.12	№ 85-5
47-6	ST23	寛永造貫	25.0	5.0	1.5	4.0	100	0.16	№ 85-1 古寛永
47-7	ST23	寛永造貫	24.5	5.0	1.0	3.0	100	0.12	№ 85-3 古寛永
47-8	ST23	寛永造貫	24.5	5.0	1.5	4.0	100	0.16	№ 85-2 古寛永
47-9	ST23	寛永造貫	25.0	5.0	1.5	4.0	100	0.16	№ 85-4 新寛永 文政

## (五輪塔)

遺物 番号	遺構名・ 出土位置	種類	石材	法 盤 (cm)						備考
				最大高	空軸径	風輪径	最大幅	奥行	納径・納孔径	
49-1	調査区南西側	空軸輪	凝灰質砂岩	24.4	16.0	14.0	-	-	6.8	- 一部欠損
49-2	調査区南西側	火輪	凝灰質砂岩	15.8	-	-	27.6	28.5	8.4	26 一部欠損
49-3	調査区南西側	火輪	凝灰質砂岩	10.2	-	-	25.6	25.5	6.8	3.6 一部欠損
49-4	調査区南西側	水輪	凝灰質砂岩	14.4	-	-	24.4	-	-	中心部や凹む
51-1	道路状遺構	地輪	凝灰質砂岩	18.5	-	-	22.3	22.0	-	上面ノミ痕有り
52-7	第7回2層	空軸	凝灰質砂岩	10.2	9.2	-	-	-	-	下端欠損
52-8	第7回2層	空軸輪	凝灰質砂岩	19.6	16.0	14.8	-	-	6.4	- 上端欠損

## (宝篋印塔・墓標)

遺物 番号	遺構名・ 出土位置	種類	石材	法 盤 (cm)				備考
				最大高	最大幅	最大厚・奥行	納径・納孔径	
49-5	調査区南西側	宝篋印塔(相輪)	凝灰質砂岩	25.2	14.0	-	-	上部欠損
49-6	調査区南西側	円頂円柱型墓標か	凝灰質砂岩	44.5	20.0	-	10.6	或名等は削り取られている
49-7	調査区南西側	平頂方柱型墓標	凝灰質砂岩	73.5	30.5	17.8	10.0	正面枠開いた下に蓮座を施す。背面は彫り込み、断面は「匁」字状である。銘文等は削り取られている。
49-8	調査区南西側	平頂方柱型墓標	凝灰質砂岩	57.0	24.0	18.0	9.6	背面はやや凹む 銘文等は削り取られている
49-9	調査区南西側	方柱型墓標	凝灰質砂岩	44.0	31.0	11.5	14.0	上平欠損、正面枠開いた下に蓮座を施す 銘文等は削り取られている
49-10	調査区南西側	水受	凝灰質砂岩	12.0	32.0	32.8	12.0 × 10.0	内面にノミ痕
49-11	調査区南西側	水受	凝灰質砂岩	12.0	36.0	35.0	11.8 × 10.3	内面にノミ痕

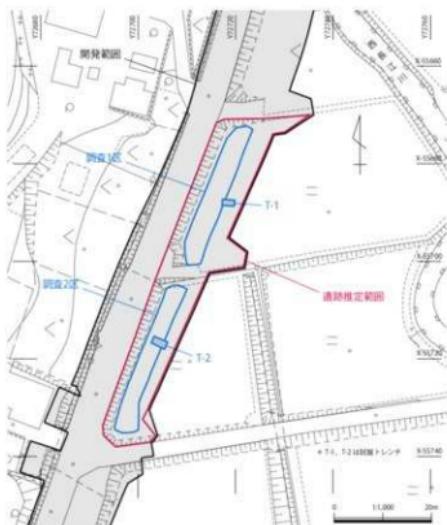
## 第4章 回り遺跡

### 第1節 調査の方法

#### 1. 調査範囲（第53図）

回り遺跡は西長江町の谷沿いを南北に走る市道の西側に所在する。試掘調査によって遺跡の範囲が確定し、市道沿いに延びる細長い調査区である。現況は2枚の水田とその間の農作業道路からなる。

調査範囲は松江市教育委員会と協議を行い決定した。遺跡推定範囲の東端から2~4mは道路法面となることから、また、西側は道路側法面の安全を考慮し、法面下端より0.5m程度離して調査を実施することとなった。北側の水田を1区、南側の水田を2区とした。農作業道路については1区南側と2区北側の遺構が疎であり、出土遺物が少ないことから協議の上、割愛することになった。調査面積は1区が127.6m、2区が118.4m、合計246.0mである。



第53図 回り遺跡調査範囲図 (S=1:1,000)

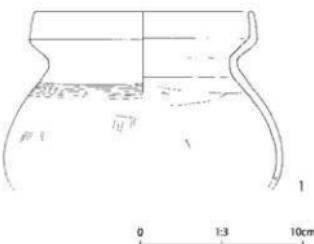
#### 2. 試掘調査（第53・54図）

開発範囲内に2箇所の試掘トレンチを入れ、遺跡の範囲と性格を確認している。

北側に位置するT-1からは、ピット1基を検出し、柱痕内から炭化した柱材を検出している。遺物は基盤層上面から、土師器の表が出土している。

南側のT-2からはピット1基と縄文土器が出土している。

第54図は試掘トレンチ出土遺物である。2区T-2から出土した縄文土器については破片であり図化できなかった。54-1は土師器の表である。口縁部はやや内傾し、胴部外面にハケ目、内面にヘラ削りを施す。古墳時代初頭のものである。



第54図 試掘トレンチ出土遺物実測図 (S=1:3)

### 3. 調査の方法

調査は1区から実施した。耕作土や床土を重機で除去し、その後、調査区内周囲に排水路を掘削し、同時に土層観察を行った。基盤層より上層の堆積土については人力による掘削を行い、精査、遺構検出を実施した。

次に2区の耕作土、床土を重機で除去し、調査区内周囲に排水路を掘削後、土層観察を行った。堆積土は少なく、掘削、精査、遺構検出を行った。

測量はトータルステーションを用い、その図化測量図と遺構を照合しながら平面図をおこし、レベルを記入した。方位については、世界測地系に準拠した座標北を基準としている。また、遺物の取り上げについてもトータルステーションとレベルを併用している。土層断面はレベルを用いて手作業で測量を行い、土色の注記は新版標準上色帖を使用した。また、写真はフィルムカメラによる35mmのモノクロ、35mmのリバーサル、デジタル一眼レフカメラを主に使用し、120mm スライドフィルムカメラを援用して撮影した。

## 第2節 調査の概要と基本層序

### 1. 調査の概要（第55図）

本調査区の現況は水田である。この水田は昭和40年代頃に圃場整備が行われ、地権者の話によると現況の水田面は圃場整備前より0.5m程度低くなっていると言うことであった。今回の調査で検出した遺構の大半は浅く、圃場整備の際に削平された可能性が高い。調査区、特に1区北西側では暗渠排水による擾乱がみられる。

1区の調査では掘立柱建物跡2棟、土坑6基、溝10本の他、多数のピットを検出している。遺構は地山（無遺物層）や地山面上の覆土から検出され、浅いものが多い。床土や覆土から弥生土器、土師器、須恵器が出土している。

2区では竪穴建物跡1棟、土坑、ピットを検出している。遺構は1区と比べて疎であり、特に北東側では少ない。土坑や竪穴建物跡からは縄文土器の破片が多く出土し、縄文時代の遺構と捉えられる。

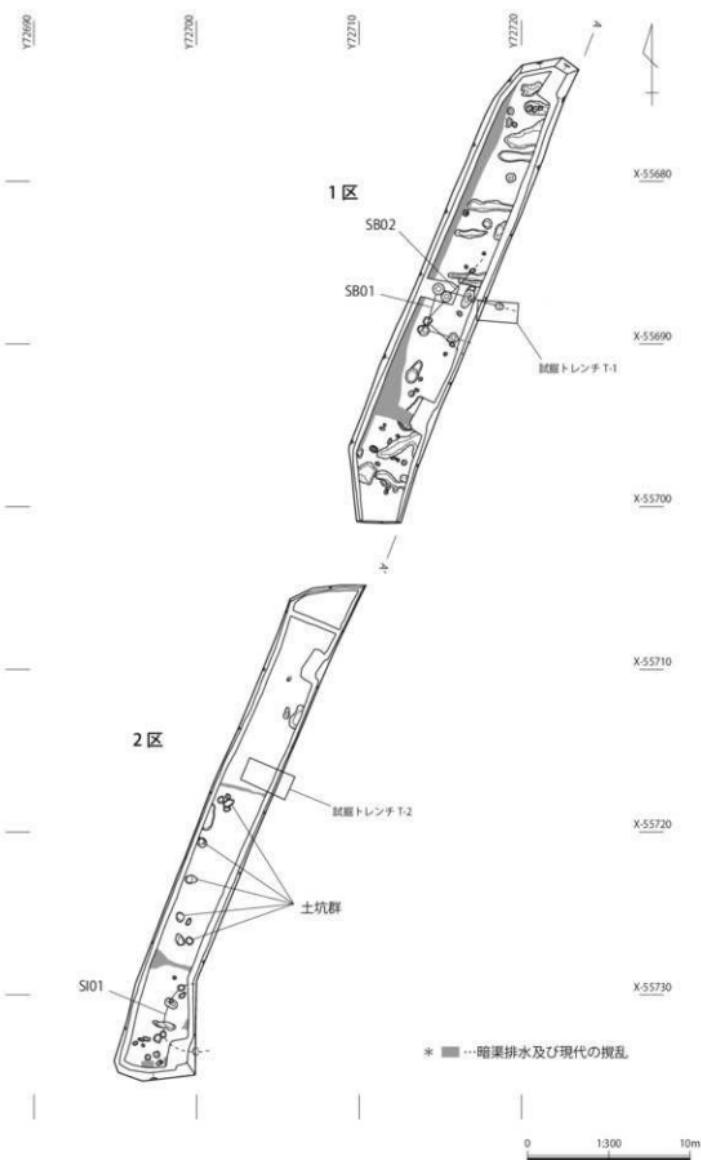
1区、2区の遺構の一部には出土遺物がないこと、破片であることから遺構の時期を判断できないものもある。

第3節、第4節で1区、2区の主な遺構、遺物について、第5節で遺構外出土遺物について記述する。出土遺物は破片であり、また磨滅したものが多いことから、時期が判断できたものは少ない。各遺構の遺構名、旧遺構名、規模、出土遺物については第7節の後に表を掲載している。

### 2. 基本層序（第56図）

調査区の地表面標高は1、2区共に28.7mである。耕作土や床土は厚さ20cm程度であり、それを取り除くと遺構面が検出された。

1区北西側では耕作土や床土直下が地山（無遺物層）であり、土坑や溝を検出している。遺構は浅いものが多く、底面に近いところのみが残存しているような状況であり、圃場整備の際に削平されて

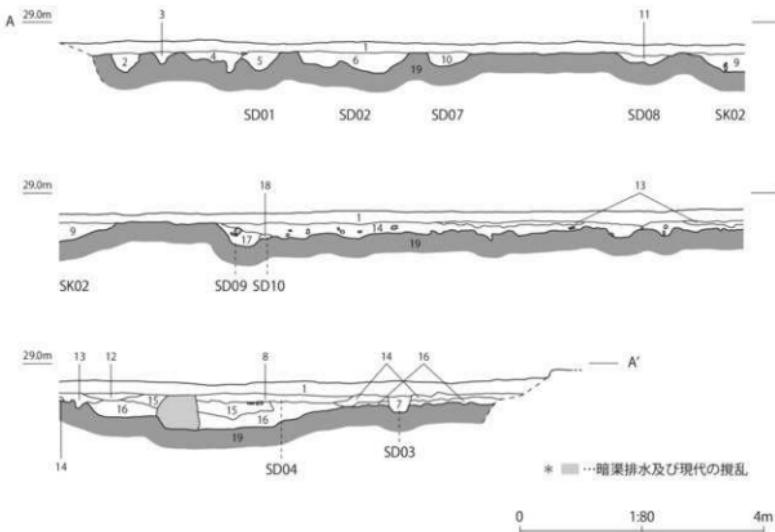


第55図 回り遺跡1区・2区遺構全体図 (S=1:300)

いると思われることから、遺構の掘り込み面は検出面より上方の可能性が高い。地山は調査区中央から南西側にかけて凸凹し、その上方に12~16層が堆積していた。14層からは弥生土器や土師器が、16層からは弥生時代終末から古墳時代初め頃の土器が出土している。溝SD03、04は14~16層を基盤とし、溝SD09、10は調査区中央付近で地山を基盤とする遺構である。調査区中央から南西側では部分的に2面の遺構面が存在する状況である。

2区では耕作土直下が基盤層のところが大半で、一部に土層の堆積がみられる程度であった。南端では遺構面上に機械の筋状の痕跡が確認され、圃場整備の影響を受けていることが確認される。本報告では2区の土層断面は割愛する。

地山標高は1区が28.4~28.5m、2区は28.3mと2区が低い。調査地は北西側から派生する丘陵の裾部にあたり、北側から南側に向かって傾斜する裾部の一部と思われる。地山は1区北側では青灰色砂礫層、1区南側から2区北側では緑灰色土、2区南側では灰白色粘質土である。場所によって違いがあり、様々な土層が堆積している状況がみられる。青灰色砂礫層は10cm以下の礫を多く含む土層で、調査区東側を流れる西長江川の氾濫によって堆積した土層の可能性が考えられる。



- |                                 |                                |                                  |
|---------------------------------|--------------------------------|----------------------------------|
| 1. 耕作土・床土                       | 7. 紅灰色土(10YR5/1) *小礫をやや含む      | 13. 灰色粘質土(N5/) *灰を多く含む           |
| 2. 灰色粘質土(N4/) *灰を多く含む           | 8. 亂白色土(N7/)と褐色土(SY5/1)の混合土    | 14. 褐灰色砂礫層(10YR6/1)              |
| 3. 褐灰色粘質土(10YR6/1)              | 9. 褐色紺糞層(7.5Y6/1) *灰を多く含む      | 15. オリーブ灰色粘質土(SGY6/1)            |
| 4. 緑灰色土(10GY6/1)と灰色粘質土(N5/)の混合土 | 10. 灰色粘質土(N6/)                 | 16. 緑灰色土(10GY5/1) *灰を多く含む        |
| 5. 褐灰色粘質土(10YR6/1) → SD01埋土     | 11. 灰色土(N4/) *灰を含む             | 17. 褐灰色土(10YR5/1) *灰を含む → SD09埋土 |
| 6. オリーブ灰色土(2.5GY6/1) → SD02埋土   | 12. 亂白色粘質土(N7/)と褐色土(SYRA1)の混合土 | 18. 灰色土(10YR6/1) *灰を含む → SD10埋土  |
|                                 |                                | 19. 地山(青灰色砂礫層、綠灰色土)              |

第56図 1区南北土層断面図 (S=1:80)

### 第3節 1区の調査（第57図）

1区は南北31m、東西4.5mの調査区である。調査区西端から南側の一部には現水田に伴う暗渠排水を確認している。1区では掘立柱建物跡2棟、土坑、溝、柱穴を検出している。掘立柱建物跡2棟(SB01、02)は重複し、新旧関係がみられる。掘立柱建物跡以外でも柱穴を検出しているが、復元はできなかった。溝は調査区全体で確認され、すべて東西方向にみられる。遺構は大半が浅く、削平されていると思われる。

遺構内から縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器が出土している。破片であり、図化できたもの、時期がわかるものは少ない。個々に掲載できる遺構は少なく、土坑、溝については図化できた遺物を伴うものを掲載する。SD01～04は縄文時代から古墳時代の遺物が出土し、古墳時代以降の所産と考えられる。

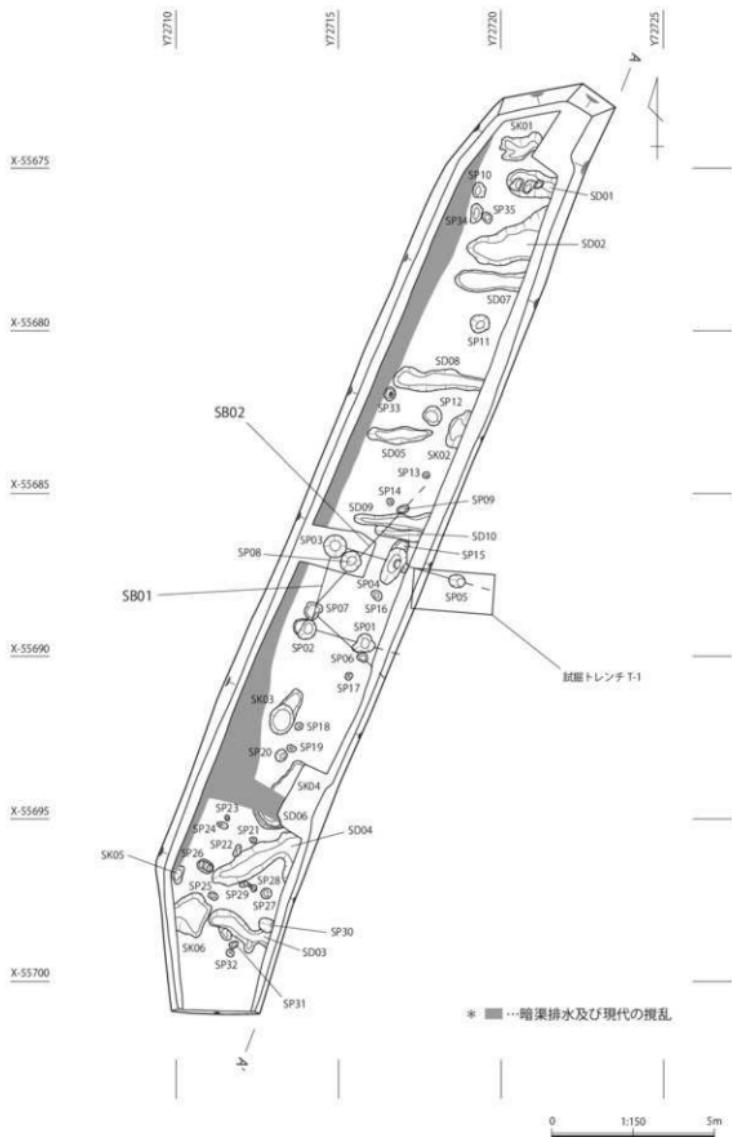
#### 第1項 遺構と遺物

##### SB01（第58・59図）

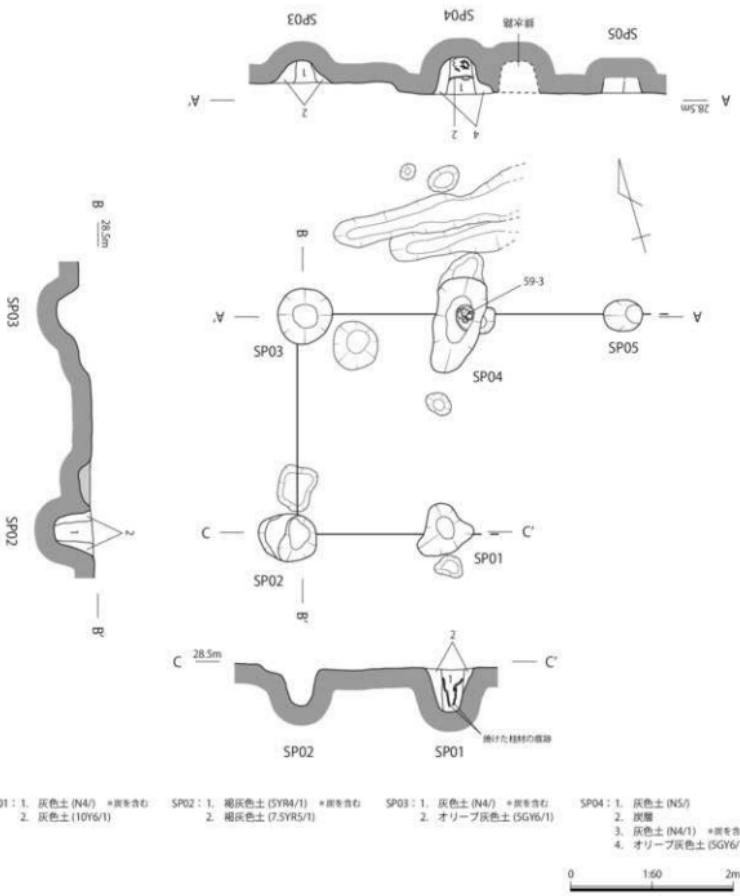
SB01は1区中央で検出した掘立柱建物跡である。本調査区内で4基の柱穴(SP01～04)を検出し、試掘トレンチの柱穴(SP05)も柱穴方向や柱穴間から同一建物に伴うと判断した。桁行1間、梁間2間以上の建物と考えられ、主軸方位はN-17°-Eである。柱間寸法はSP01-02間が2.67m、SP02-03間が1.82m、SP03-04間が2.0m、SP04-05間が2.0mを測る。

柱穴5基のうち4基から柱痕を確認している。SP01は上端径59cm、深さ55cm、柱痕径21cmを測り、柱痕内には炭化した柱の痕跡がみられた。柱痕内から塊形土器が出土している。SP02は上端径71cm、深さ48cm、柱痕径25cmを測る。SP03は上端径66cm、深さ26cmである。柱痕は確認できなかった。SP04は平面橢円形の柱穴で長径1.2m、短径58cm、深さ42cmを測る。柱痕上層には炭を多く含む灰色土があり、その下に2層炭屑がみられた。炭屑や3層上面からは10cm程度の礫が3～4個検出され、その下の3層灰色土から土器が出土している。土器は破片で重なるように出土し、上方の土器には火を受けたような痕跡がみられた。柱痕底部から複合口縁の甕片が出土し、この甕片は火を受けていなかった。これらのことから甕片や土器は柱を立てる以前に納められ、その後、柱の沈下防止のため石が意図的に置かれたものと思われ、祭祀的な可能性も考えられる。SP01、04には火を受けた痕跡、また、SP05の柱痕内からも炭化した柱材が確認されていることから、SB01は焼失建物の可能性が高いと考えられる。但し、柱を根腐れ防止の為に意図的に焼いた可能性も考えられることを示唆しておく。

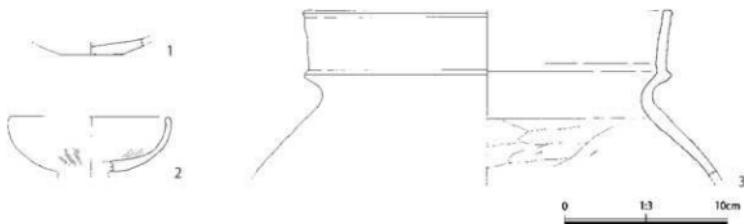
59-1はSP04の3層上方から出土した甕、甕類の底部である。59-2はSP01から出土した塊形土器である。口径9.8cm、外面にハケ目、内面にヘラミガキがわずかにみられる。59-3はSP04から出土した複合口縁の甕である。口縁端部は平坦で、外方に折り曲げ、口縁部の稜は水平方向である。2、3は草田7期のものであり、SB01も同時期の建物跡と考えられる。



第57図 1区遺構全体図 (S=1:150)



第58図 SB01実測図 (S=1:60)

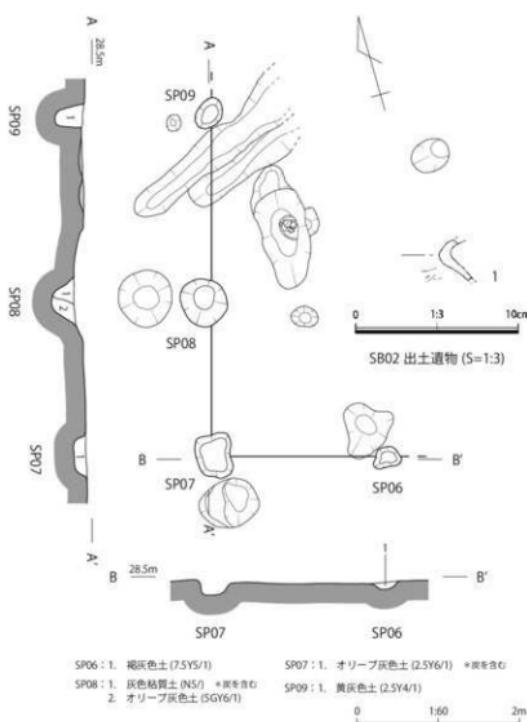


第59図 SB01出土遺物実測図 (S=1:3)

## SB02 (第60図)

平面構造 1間×2間以上、SB01と重複する建物跡である。柱穴4基を検出し、上端径30~58cm、深さ6cm~35cmを測る。浅いものがみられることから削平されているものと思われる。SP08からは幅20cm程度の柱痕を確認している。柱間寸法は SP06~07間が2.0m、SP07~08間が1.95m、SP08~09間が2.2mを測る。遺物は SP06、08、09から縄文土器、弥生土器、土師器が出土し、古墳時代以降の建物跡と思われるが、明確な時期や SB01との新旧関係は不明である。遺物は図化できた状を掲載している。

60-1は甕の頸部で内面にヘラ削りがみられる。明確な時期は判然としないが、形状と器壁が薄いことから弥生時代終末頃と思われる。

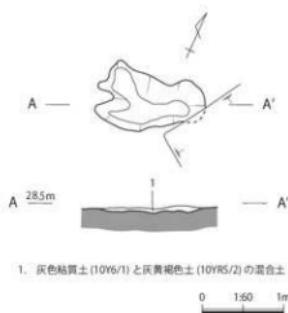


第60図 SB02 実測図 (S=1:60)

## SK01 (第61・62図)

調査区北端で検出した土坑で、西側の一部を欠く。平面は不整楕円形を呈し、長径1.36m、最大幅0.73m、深さ6cmを測る。埋土から鼓形器台、須恵器の环身が出土している。

62-1、2は鼓形器台で、草田6~7期と思われる。1は器受部と脚台部が縮約した脚台部で、内面にヘラ削りがみられる。62-3は环身である。受部径13.2cmを測り、外面に回転ヘラ削り、内面に回転ナデを施す。出雲4期と思われる。



第61図 SK01 実測図 (S=1:60)



第62図 SK01出土遺物実測図 (S=1:3)

## SK02 (第63・64図)

調査区中央より北側、東壁際で検出した土坑で、調査区外へと続いている。現況で長径 1.23m、短径 0.46m、深さ 0.17m を測る。埋土中から弥生土器の甕が出土している。

64-1は口径 17.8cmを測る複合口縁の甕である。草田4～5期と思われる。

## SK03 (第65・66図)

調査区中央より南側で検出した平面椭円形の土坑である。長径 1.53 m、最大幅 0.74 m、深さ 0.16 m を測り、北東側がやや浅く二段になっている。埋土から弥生土器の鼓形器台が出土している。

66-1は鼓形器台の脚台部で、底径 14.8cmを測る。外面に擬凹線文が、内面にヘラミガキがみられ、後期V-2様式である。

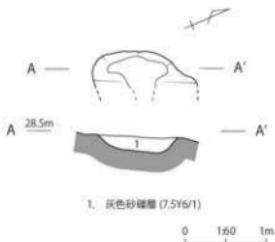
## SD01 (第67・68図)

調査区北側に位置する溝である。現況で長さ 1.44m、最大幅 0.84m、深さ 0.2m を測り、調査区西側に続いている。底面に何箇所か凹みがみられる。埋土から縄文土器、弥生土器、土師器が出土し、図化できた弥生土器を掲載する。

68-1は弥生土器、壺・甕類の口縁端部である。口縁部が外反するもので、中期III-2 様式と思われる。

## SD02 (第67・68図)

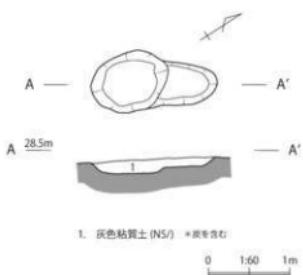
調査区北側、SD01の南側に位置する。現況で長さ 2.04m、最大幅 1.1m、深さ 0.12 m を測り、調査区外へ



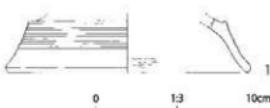
第63図 SK02実測図 (S=1:60)



第64図 SK02出土遺物実測図 (S=1:3)



第65図 SK03実測図 (S=1:60)



第66図 SK03出土遺物実測図 (S=1:3)

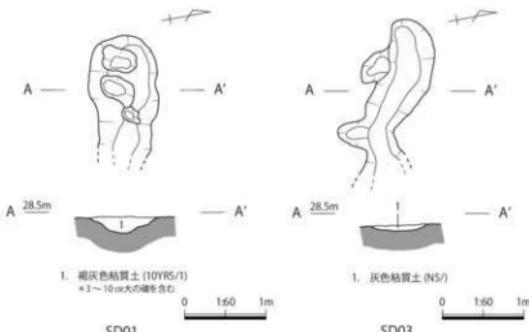
続いている。埋土から縄文土器、土師器、須恵器が出土している。

68-2は須恵器の壺の胴部下半である。外面に丁寧な回転ヘラ削り、内面に回転ナデを施す。

### SD03 (第 67・68 図)

調査区南側で検出した溝である。長さ 1.95m、最大幅 0.87m、深さ 7cm を測り、調査区外へ続いている。遺構内から縄文土器、弥生土器、土師器が出土し、図化できた縄文土器を掲載した。

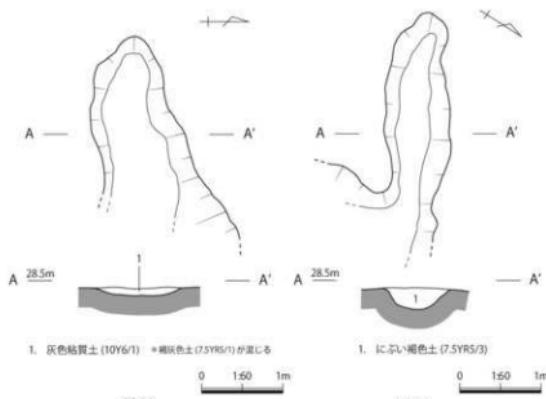
68-3 は縄文土器の破片である。外面にわずかに巻貝条痕がみられ、口縁端部に沈線を施す後期のものである。



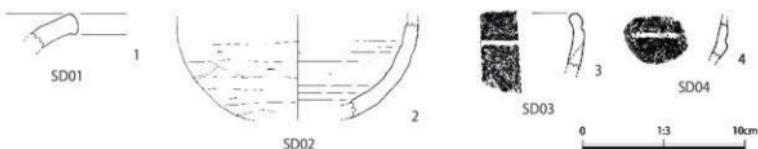
### SD04 (第 67・68 図)

SD03 の北側に位置する。長さ 2.97m、最大幅 0.8m、深さ 0.28 m を測る溝で、東側は広がり調査区外へ続いている。遺構内から縄文土器、土師器が出土し、縄文土器を掲載した。

68-4 は縄文土器の破片で、頸胴部がやや屈曲し、外面に沈線を施す。後期のものである。



第 67 図 SD01・02・03・04 実測図 (S=1:60)



第 68 図 SD01・02・03・04 出土遺物実測図 (S=1:3)

## 第4節 2区の調査（第69図）

2区は南北32.5m、東西3.6～5mの調査区である。2区においても一部東西方向に暗渠排水が確認される。2区では竪穴建物跡1棟、土坑、ピットを検出している。遺構は1区に比べると少なく、調査区北側では土坑と柱穴がわずかにみられるのみで、中央から南側にかけて確認された。

竪穴建物跡の柱穴からは縄文土器が多く出土し、縄文時代の所産である。また、土坑SK09～13からも縄文土器が出土し、これらの土坑を土坑群として取り上げ報告する。

遺構外出土遺物は検出面直上と調査区南側でわずかに残った堆積土から出土している。土器は磨滅した破片ばかりであるが、縄文土器、弥生土器、土師器が出土し、その割合は縄文土器が8割、弥生土器、土師器が1割ずつで、縄文土器の割合が圧倒的に大きい。他に石製品の石斧が出土している。

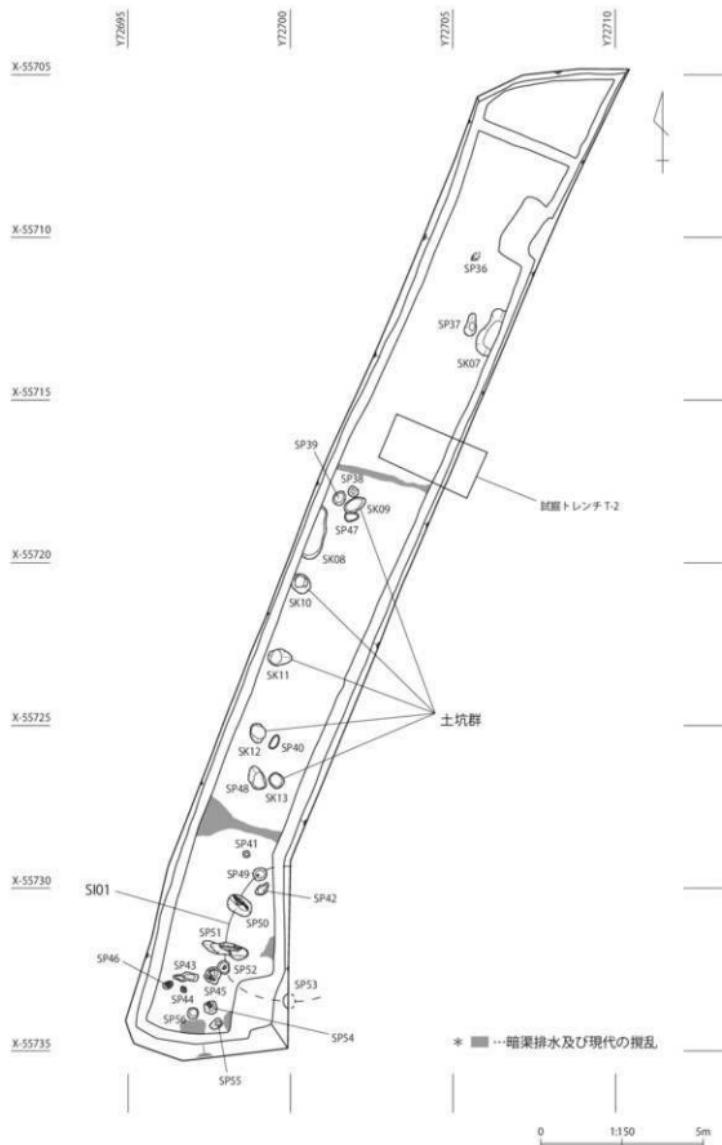
### 第1項 遺構と遺物

#### SI01（第70・71図）

調査区南東側に位置する建物跡である。建物の西側を検出し、東側は調査区外へ続いている。検出面標高28.4mを測り、削平されていることから周溝や壁体は確認できなかった。柱穴を検出面で4基（SP49～52）、南東側壁面で1基（SP53）確認している。建物の平面形は判然としないが、柱穴から円形と想定され、復元すると直径約5mとなる。

SP49は長径44cm、短径36cm、深さ27cmを測り、柱痕には長さ15.2cm、幅8cmの柱材が残っていた。SP50は長径75cm、短径48cm、深さ82cm、SP49～SP50の柱穴間0.95mを測る楕円形の柱穴である。埋土は3層確認され、2層上面から長さ59.2cm、最大幅6.5cm、最大厚4.0cmの木片が、南東側から北西側に下がる状態で検出された。この木片は柱穴掘削後、底面に2、3層を入れた後置かれたもので、柱の沈下防止、礎盤のような用途として置かれたと思われる。SP51は長径1.43m、短径43cm、深さ56cm、SP50～SP51柱穴間1.45mを測る不整楕円形の柱穴である。埋土は4層確認され、2層上面から長さ66.5cm、最大幅12.9cm、最大厚10.3mの木片を検出し、中央部分に穴が開いていた。この木片は柱穴掘削後、底面に2～4層を入れた後に置かれ、SP50と同様に柱の沈下防止、礎盤として置かれたと思われる。中央の穴は柱の当たり痕なのかもしれない。SP50、51はSP49、52と形状や規模に違いがあり、上方が削平されている割には深い。柱材が検出されていないため推測の域を出ないのだが、柱穴の規模や状況からするとSP49やSP52より大きい柱が建てられていた可能性は高く、SP50～51間は住居入口のようなところと思われる。SP52は長径42cm、短径36cm、深さ25cmを測る。SP51～SP52柱穴間は0.65mである。柱痕には長さ22.8cm、幅10.5cm、厚さ7.1cmの柱材が残っていた。SP49、52の柱材は年輪からミカン割材が使用されていた。SP53は土層断面から径55cm、深さ35cmを測る柱穴である。

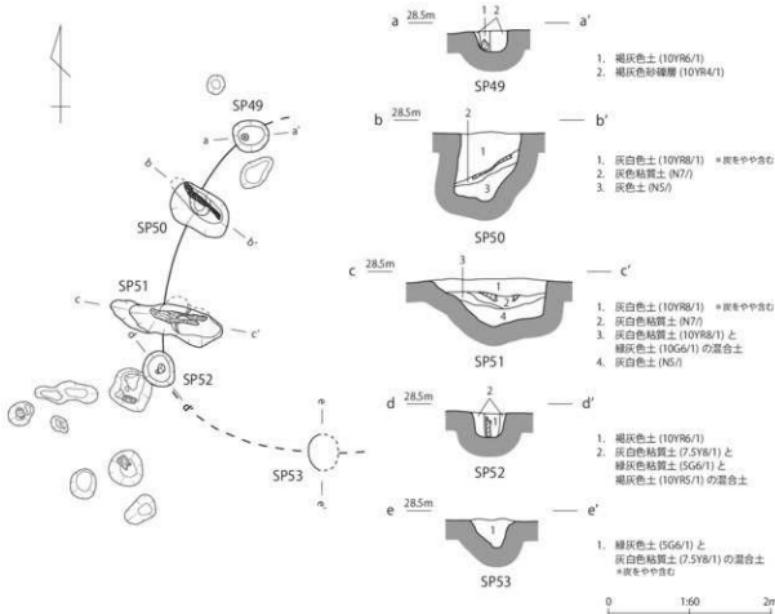
ここで検出したSP49・52の柱材の樹種同定、SP50・51の樹種同定と年代測定を行なった。樹種はSP49・SP52がスギ、SP50・51はコナラ属（アカガシ亜属）と同定された。また、年代測定では、補正δ<sup>13</sup>C年代が約3500年前、曆年較正年代では3700～3900年前の木片であるという結果が得られている（第6節 自然科学分析参照）。



第69図 2区遺構全体図 (S=1:150)

柱穴内からは縄文土器が出土している。破片は磨滅しており、図化できたものを掲載する。71-1は粗製の深鉢である。口縁部外側が肥厚し、端部に間隔の狭い刻目を施している。後期前葉、五明田式である。71-2は胸部が屈曲する浅鉢である。屈曲部には巻貝殻頂部で引いた短沈線が施され、外面を二枚貝条痕、内面をナデ調整している。後期前葉、布勢式である。71-3は深鉢の口縁部である。口縁部は肥厚し、巻貝殻頂部で引いた短沈線と刺突文がみられる。布勢式である。71-4は底径7.1cmの底部である。71-5はSP49から出土した柱材である。長さ15.2cm、幅8.0cmを測る。71-6はSP50から出土した木片で、長さ59.2cm、最大幅6.5cmを測り、中央部分が細くなっている。71-7はSP51から出土した木片である。長さ66.5cm、最大幅12.9cmを測る。71-8はSP52から出土した柱材である。長さ22.8cm、最大幅10.5cmを測る。

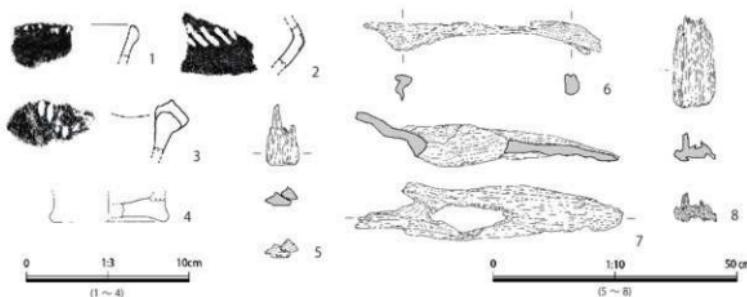
出土遺物からSI01は縄文時代後期前葉頃に營まれた建物と捉える。



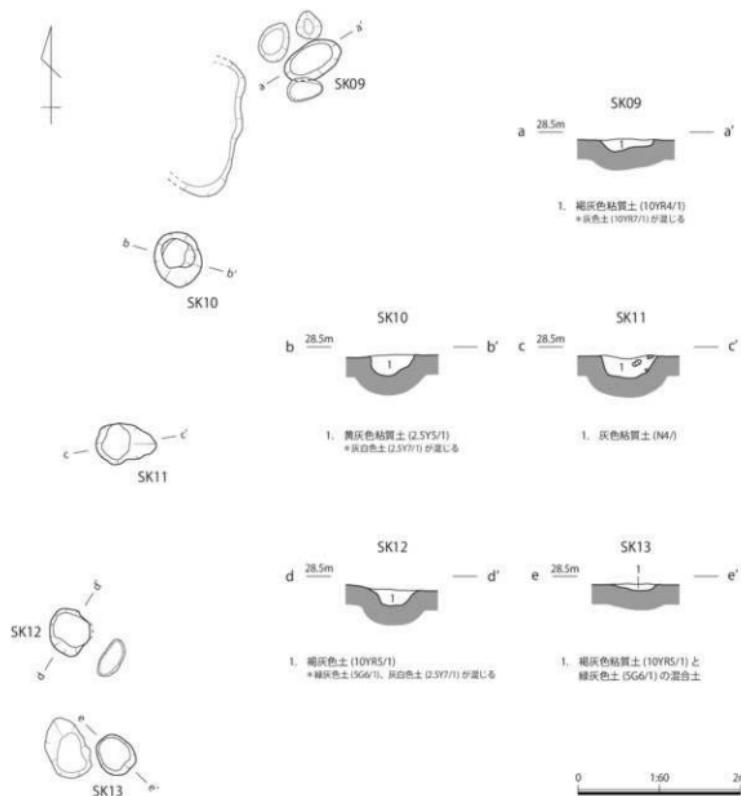
第70図 SI01実測図 (S=1:60)

#### 土坑群（第72・73図）

調査区中央よりやや南側で検出した土坑5基(SK09～13)である。土坑群は平面不整橢円形を呈し、長径48～73cm、短径42～56cm、深さ6～33cmを測り、浅い。土坑内から縄文土器が出土し、特にSK10から多く出土している。土器は破片で磨滅しているものが多く、図化できたものは少ないが、縄文時代中期末から後期前葉の土器が出土している。

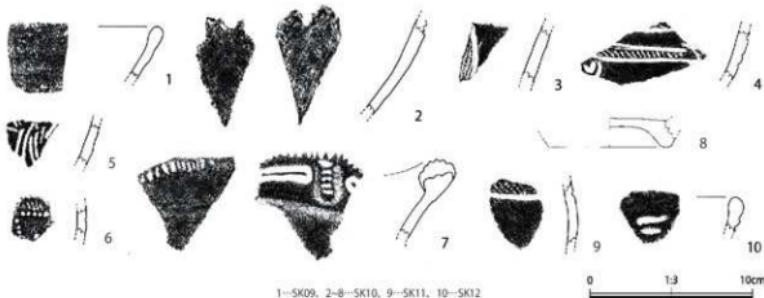


第71図 SI01出土遺物実測図 (S=1:3,1:10)



第72図 土坑群実測図 (S=1:60)

73-1はSK09から出土した後期の浅鉢の口縁部である。73-2～8はSK10から出土した土器である。2は中期末の深鉢である。破片中央に焼成後開けられた補修孔があり、その左側に巻貝殻頂部による円形の刺突文がみられる。調整は内面が二枚貝条痕、外側は風化し不明である。3は後期前葉、五明田式～福田K II式の浅鉢で、磨消繩文と1条の沈線がみられる。4はポール型の浅鉢と思われる。磨消部が広く、繩文の残る部分が狭いもので、丸く沈線が施されているのがわかる。5は浅鉢と思われる破片で、外面に繩文と沈線がみられる。後期前葉、福田K II式である。6は外面に繩文と巻貝殻頂部による刺突文が施された破片である。後期前葉と思われる。7は縁帶文の深鉢である。口縁部が肥厚し、一部は突起状になっている。肥厚部分には横方向の沈線が、口縁端部には刻目が、隆起部分には刺突文が施されている。外面には原体不明の条痕がみられる。後期前葉、布勢式である。8は底径7.4cmの底部で凹み底である。73-9はSK11から出土した磨消繩文の深鉢である。後期前葉、五明田式～福田K II式である。73-10はSK12から出土した深鉢の口縁部で、2本の平行沈線がみられる。後期前葉と思われる。



第73図 土坑群出土遺物実測図 (S=13)

## 第5節 遺構外出土遺物 (第74図)

第74図には1区、2区から出土した遺構外出土遺物を掲載した。堆積土、検出面直上から繩文土器、弥生土器、土師器、石製品が出土している。

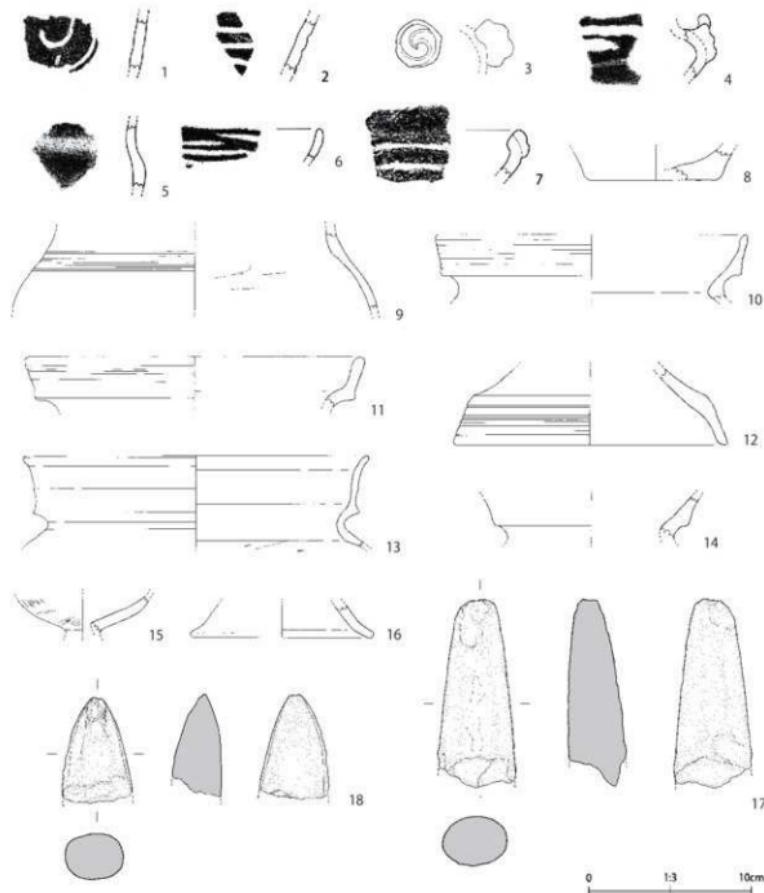
74-1～8は繩文土器である。1は外面に沈線の「J」字文が描かれ、その周りにわずかに繩文がみられる。後期前葉、五明田式である。2はバケツ型浅鉢の胴部と思われる。外面に繩文と沈線が施され、赤彩されている。後期前葉、福田K II式である。3、4は後期前葉の双耳壺の把手である。4は外面に粘土を張り付け肥厚させ、太い沈線を施す。5は胴部がやや屈曲する後期の深鉢である。6は浅鉢の口縁部で、全体に風化しているが4本の沈線がみられる。後期中葉、彦崎式である。7は口縁部が短く「く」の字状に屈曲する。外面を肥厚させ、肥厚部外側とその下部に沈線を施す。彦崎K I式と思われる。8は底径8.0cmの底部である。

74-9～14は弥生土器である。9は壺の胴部上半外面に櫛書直線文を描く。内面にはわずかにヘラミガキの痕跡が残る。II-1様式である。10、11は複合口縁の壺で、口縁外面に櫛書直線文が描かれ

ている。V-2様式である。12は鼓形器台の脚台部で、外面に擬凹線文が施されている。V-2様式である。13は草田5期の複合口縁の甕である。口縁を薄く引き出し、稜は水平方向に突出する。14は弥生時代終末から古墳時代初め頃の鼓形器台の器受部である。

74-15、16は土師器である。15は坏部が半球形の椀形を呈する高坏である。内面は風化し、外面にはケ目がみられる。16は高坏の脚端部である。

74-17、18は石斧である。17は刃部を欠き、残存長11.6cmを測る。18は残存長6.6cmの石斧で刃部を欠いている。



第74図 1区・2区遺構外出土遺物実測図 (S=1:3)

## 第6節 自然科学分析

### 第1項 回り遺跡発掘調査に係るAMS年代測定及び樹種同定

渡邊正巳（文化財調査コンサルタント株式会社）

#### 1. はじめに

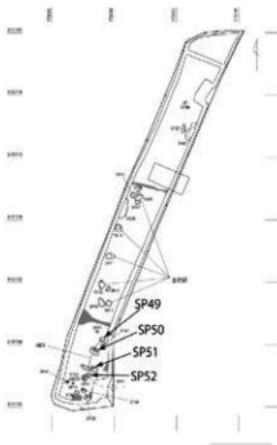
回り遺跡は、松江市北西部の西長町に位置する遺跡である。

本報は文化財調査コンサルタント株式会社が、公益財団法人松江市スポーツ振興財団の委託を受け、下記の目的で実施・報告した、調査報告書の概報である。

調査目的：遺構（SP50、SP51）の年代を明らかにし、年代測定を実施した木片の樹種を明らかにする。また、出土した柱（SP49、SP52）の樹種を明らかにする。

#### 2. 試料について

公益財団法人松江市スポーツ振興財団により採取された試料から、分析試料の御提供を受けた。表5に分析試料の詳細を示す。



第75図 調査区平面図及び試料採取地点

#### 3. 分析方法

##### (1) AMS年代測定

塩酸による酸洗浄の後に水酸化ナトリウムによるアルカリ処理、更に再度酸洗浄を行った。

この後、二酸化炭素を生成、精製し、グラフア

イトに調整した。 $^{14}\text{C}$ 濃度の測定にはタンデム型イオン加速器を用い、半減期：5568年で年代計算を行った。暦年代較正には OxCal ver. 4.2.4 (Bronk Ramsey, 2009) を用い、INTCAL13 (Reymer et al., 2013) を利用した。

##### (2) 樹種同定

顕微鏡観察用永久プレラートは、渡辺（2010b）に従い作成した。作成した永久プレラートには整理番号を付け、文化財調査コンサルタント株式会社にて保管・管理をしている。顕微鏡観察は、光学顕微鏡下で4倍～600倍の倍率で行った。同定した分類群ごとに最も特徴的な試料について、顕微鏡写真撮影を行うとともに、島地ほか（1985）の用語に基本的に従い、記載を行った。

表5 分析試料一覧表

試料名	調査地	種別	重量(g)	樹種	分析項目
					年代測定 樹種同定
SP49	2983101	柱樋	—	スギ	○ ○
SP50	2983101	木片	0.9396	アカガシ葉風	○ ○
SP51	2983101	木片	0.2208	アカガシ葉風	○ ○
SP52	2983101	柱樋	—	スギ	○

#### 4. 分析結果

##### (1) AMS年代測定

測定結果を表6、第76図に示す。表6には、 $\delta^{13}\text{C}$ 値と3種類の年代を示している。第76図で

は一覧形式で、資料ごとに確率分布と  $\sigma \sim 2\sigma$  の校正範囲を示した。

## (2) 樹種同定

表5に同定結果を示し、試料について顕微鏡写真を示した。

### スギ Cryptomeria japonica D.Don

試料名：SP49(W15112701)、SP52(W15112702)

記載：構成細胞は仮道管、樹脂細胞、放射柔細胞からなる。早材から晩材への移行はゆるやかで、晩材の幅は広い。樹脂細胞は移行部から晩材部に分布している。また、分野壁孔は不明瞭なものが多いがスギ型が確認され、2～3個存在することなどから、スギと同定した。

### コナラ属(アカガシ亜属) Quercus (sub. Cyclobalanopsis) sp.

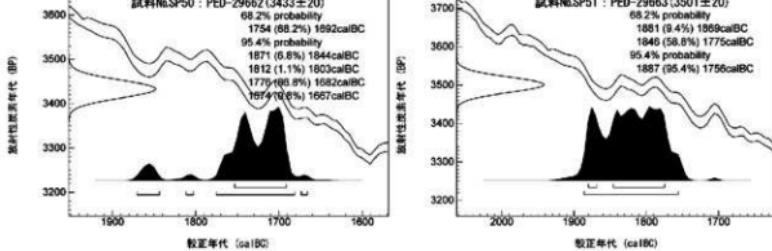
試料名：SP50(W15082002)、SP51(W15082003)

記載：中庸で円形ないし梢円形の道管が単独で放射方向に配列する放射孔材である。道管せん孔は単せん孔である。また、道管にはチロースが非常によく発達し、周囲仮道管が存在する。軸方向柔細胞は、接線方向に1ないし2細胞幅の独立帶状柔組織を形成している。放射組織は同性で、低い單列放射組織と極めて幅の広い広放射組織がある。更に道管放射組織壁孔は典型的な柵状を示す。以上の組織上の特徴から、コナラ属(アカガシ亜属)と同定した。

### 【参考文献】

表6 AMS 年代測定結果

試料名	測定	出土地点	重量(g)	前処理	$\delta^{14}\text{C}$ (‰)	曆年校正年代 (yrBP ± 1σ)	補正年代 <sup>a)</sup> (yrBP ± 1σ)	曆年校正年代		測定期間 (AD)
								1σ 曆年年代範囲	2σ 曆年年代範囲	
SP50	木片	2区S10SP50	0.8386	超音波洗浄 熱・アルカリ・酸洗浄(塩酸 1.2N) 水酸化ナトリウム 1.0(NaOH 1.2N)	-31.09 ± 0.23	3433 ± 20	3435 ± 20	BC1754 - 1692 (68.2%) BC1812 - 1803 (1.1%) BC1674 - 1667 (0.8%)	BC1871 - 1862 (6.8%) BC1776 - 1802 (36.8%) BC1674 - 1667 (0.8%)	29662
SP51	木片	2区S10SP51	0.2308	超音波洗浄 熱・アルカリ・酸洗浄(塩酸 1.2N) 水酸化ナトリウム 1.0(NaOH 1.2N)	-27.52 ± 0.20	3501 ± 20	3500 ± 20	BC1881 - 1869 (9.4%) BC1846 - 1775 (58.8%)	BC1887 - 1796 (95.4%)	29663

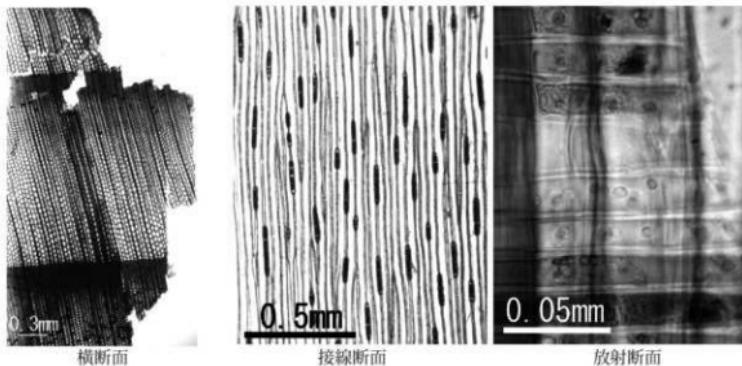


第76図 曆年校正図

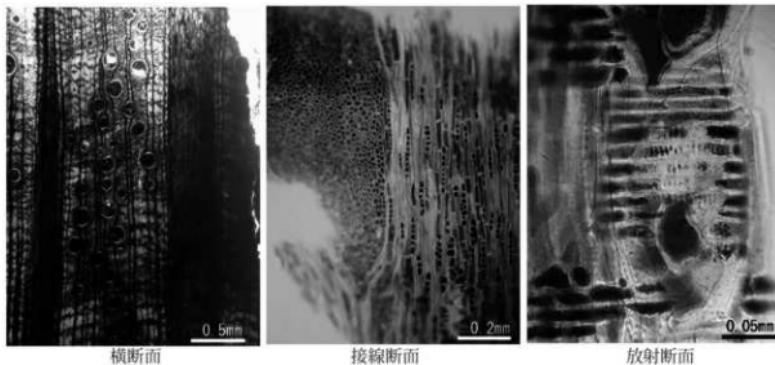
- Bronk Ramsey, C. (2009). Bayesian analysis of radiocarbon dates. Radiocarbon, 51(1), 337-360.
- Reimer, P.J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, I., Hatte, C., Heaton, T.J., Hoffmann, D.L., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., Manning, S.W., Niu, M., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Staff, R.A., Turney, C.S.M., and van der Plicht, J. (2013) IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0-50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 55(4), 1869-1887.
- 鳥地 謙・佐伯 浩・原田 浩・塙倉高義・石田茂雄・重松頼生・須藤彰司 (1985) 木材の構造. 276p., 文永堂, 東京.
- 渡辺正巳 (2010) 木質遺物 (埋没樹木) 樹種同定・必携 考古資料の自然科学調査法, 194—198. ニュー・サイエンス社

## 樹種同定図版

スギ *Cryptomeria japonica* D.Don : 試料名 SP52(W15112702)



コナラ属 (アカガシ亜属) *Quercus* (sub. *Cyclobalanopsis*) sp. : 試料名 SP50(W15082002)



## 第7節 総括

廻り遺跡の発掘調査では、弥生時代終末から古墳時代初頭の掘立柱建物跡2棟、縄文時代後期の竪穴建物跡1棟と土坑群、他に溝や土坑、柱穴を検出している。時期ごとの遺構を第77図に掲載している。遺物が出土していない遺構は古墳時代に含め、黒色で示している。検出状況から古墳時代の遺構は1区に多く、縄文時代は2区に多い。また、弥生時代の遺構は両区共に少ない状況である。以下、時代ごとの遺構と遺物について概要を述べ、まとめとしたい。

### 縄文時代（第77図①・表7）

2区調査区中央から南端にかけて土坑群と竪穴建物跡を検出している。竪穴建物跡では柱穴5基を確認し、南東側調査区外へ続いている。柱穴の位置から、円形の建物と想定し復元すると直径約5mとなる。柱穴2基から柱材（SP49、52）を、他の2基（SP50、51）の底面から板材を確認し、これらの木材にはスギやコナラ属（アカガシ亜属）を使用している。底面から出土した板材は、沈下防止のために置かれたものと考えられ、建物のなかでも太い柱材を使用する場所、建物の入口のようなところと推測される。

遺物は縄文時代後期前葉、五明田式や布勢式の土器が出土し、縄文時代後期前葉頃に営まれた建物

表7 島根県の竪穴建物一覧表

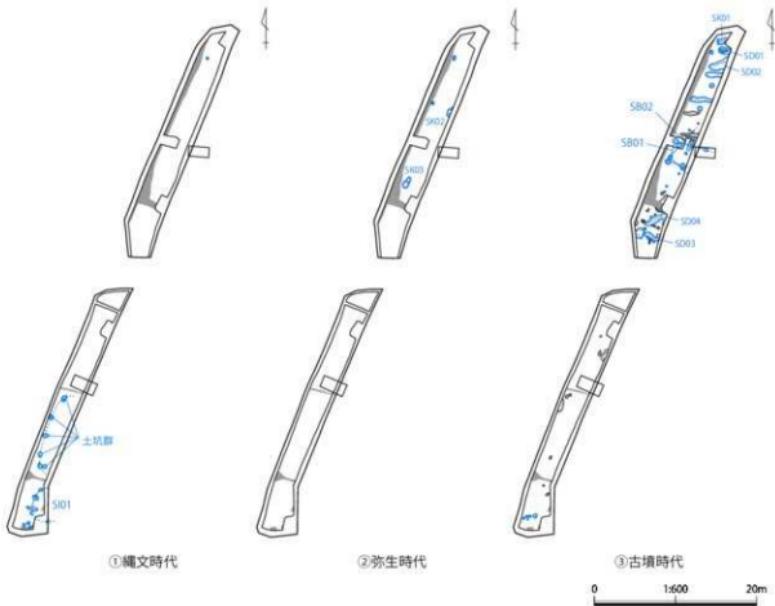
遺跡名	種類	形態	大きさ [m]	面積 [m <sup>2</sup> ]	深さ [cm]	炉	時期	所在地
勝負遺跡	竪穴建物	圓丸方形	3.6 × (3.9)	14.0	45	地床炉	後期中葉、林原式	松江市衛山町
吉志吾古道遺跡	竪穴建物状遺構	丸形	4.6 × (3.5)	16.1	30	無	縄文時代	松江市吉智吉町
面白谷遺跡	竪穴建物	柄錐形	3.3 × 3.0	9.9	60	地床炉	後期前葉、幕地式	松江市玉置町
寺宇根遺跡	竪穴建物	台形	3.8 × 3.0	11.4	32	石床炉	後期前葉、五明田式	仁多郡奥出雲町
御園田遺跡	竪穴建物	圓丸方形	(1.7 × 3.0)	10.0	50	無	後期中葉、林原式	出雲市御園町
貝谷遺跡	竪穴建物	圓丸方形	3.6 × 3.9	14.0	36	地床炉	後期中葉、林原式	飯石郡飯南町
五明田遺跡	竪穴建物	円形	4.1 × 3.8	10.2	27	地床炉	後期中葉、崎ヶ森1式	
	竪穴建物	柄錐形	3.2 × 3.0	7.0	26	地床炉	後期中葉、崎ヶ森2式	
	竪穴建物	柄錐形	-	-	26	地床炉	後期中葉、崎ヶ森2式	
	竪穴建物	円形	2.8 × (3.0)	6.1	26	地床炉	後期中葉、崎ヶ森2式	
林原遺跡	竪穴建物	小整相円形	4.7 × 4.0	14.8	15	地床炉	後期中葉、崎ヶ森2式	仁多郡奥出雲町
家の後日遺跡	竪穴建物	柄錐形	5.0 × 4.9	24.0	36	石床炉	後期中葉、崎ヶ森2式	雲南省木次町
坂谷遺跡	竪穴建物	不整形	(7.0 × 6.0)	-	15	地床炉	後期中葉、崎ヶ森2式	飯石郡飯南町
貝谷遺跡	竪穴建物	不整形相円形	2.8 × 3.2	9.0	24	地床炉	後期中葉、崎ヶ森2式	飯石郡飯南町
北原本郷遺跡	平壠式住居	円形	5.3 × 5.4	22.9	-	無	後期後葉、沖矢二・飛呂山式	雲南省木次町
万場日遺跡	竪穴建物	柄錐形	2.54 × 2.44	6.1	72	無	後期後葉、元吉吉山2式・宮瀬式	飯石郡飯南町
原山遺跡2区	竪穴建物	円形	5.9 × 5.9	29.8	40	地床炉	晚期前葉、滋賀里Ⅲ式	
	竪穴建物	円形	6.0 × 4.2	19.1	7	無	晚期前葉	仁多郡奥出雲町
原山上遺跡	竪穴建物	円形	4.6 × 4.4	16.0	-	地床炉	晚期中葉	
中ノ坪遺跡	竪穴建物	円形	3.0 × 3.0	7.8	12	地床炉	早期前葉、神宮寺式	邑智郡邑南町
石ヶ坪遺跡	竪穴建物	円形	4.8 × 4.5	22.1	28	地床炉か	前期中葉、轟5式	益田市匹見町
前山中遺跡	竪穴建物	不整形	8.6 × 7.6	53.1	19	地床炉	中期中葉～後期中葉、並木日式～崎崎式	益田市匹見町
	竪穴建物	不整形相円形	(6.2 × 7.3)	-	10	無	中期中葉～後期中葉、並木日式～崎崎式	益田市匹見町
ヨレ遺跡	竪穴建物	柄錐形	4.2 × 3.2	14.3	16	地床炉か	後期前葉、中津式	益田市匹見町
	竪穴建物	円形か	2.2 × 2.2	5.4	-	無	晚期前葉、当山V類	益田市匹見町
郷路橋遺跡	竪穴建物	円形か	2.6 × 2.5	5.1	-	無	晚期前葉、当山IV類	益田市匹見町
	竪穴建物	不明	(3.0 × 3.0)	2.4	30	無	晚期前葉、滋賀里Ⅲ式	邑智郡邑南町
竪穴建物	不明	(2.2 × 2.2)	-	10～15	-	晚期前葉、滋賀里Ⅲ式		

\* 稲田陽介・柳浦俊一「鳥取県・島根県の住居跡集成」『古代文化センター研究論集 第13集 山陰地方の縄文社会』鳥根県古代文化センター、より竪穴住居を抜粋し、一部改変して記載した。

と捉えられる。SP50、51の板材は補正 $\delta^{13}$ 年代が約3500年前、曆年較正年代では3700～3900年前の木片であるという結果が得られている。縄文時代の年代観については、定説が確立されていないが、整合的である。

竪穴建物跡の北側から土坑群を検出している。縄文時代中期末から後期前葉の遺物が出土し、後期前葉の土器は五明田式から布勢式のものである。この土坑群について、本報告では土坑群として捉えているが、前述したように、土坑が調査区北側から南側にかけて楕円形状に並んでいること、縄文土器のみが出土していること、縄文時代において竪穴部が細長く、楕円形状の建物が存在することから、楕円形状の建物の可能性も考えられる。仮に建物と想定した場合、長辺が南北方向9m程度の大型竪穴建物となる。今回のこの土坑群をこうした建物と断定できるだけの根拠は乏しいが、その可能性を指摘しておく。

県内でこれまでに確認され、縄文時代の竪穴建物跡とされているものを表7に掲載した。楕円形の建物では、益田市匹見町に所在する石ヶ坪遺跡で、長軸8.6m、短軸7.6mの竪穴建物跡が確認され、中期中葉から後期中葉と捉えられている。また、奥出雲町に所在する林原遺跡においても、やや規模は小さいが後期中葉の竪穴建物跡が検出され、4.7m×4.0mの不整楕円形を呈している。また、県外では和歌山県の中飯降遺跡や富山県の不動堂遺跡でも楕円形住居の類例がみられる。



第77図 繰り遺跡遺構変遷図 (S=1:600)

他に、遺構外から後期中葉（彦崎式）の土器が出土している。これは調査区周辺に後期中葉の遺構の存在が窺われ、後期中葉頃まで生活が存続していた可能性が考えられる。また、遺物のなかに赤色顔料が施された磨消繩文土器がみられる。県内で塗彩された繩文土器が出土している遺跡としては、五明田遺跡や林原遺跡がある。五明田遺跡では磨消繩文の土器や石器にベンガラの赤色顔料がみられ、林原遺跡では土器から水銀朱が検出されている。

### 弥生時代（第77図②）

弥生時代の遺構は、1区で土坑2基、柱穴2基のみである。SK02、03からは弥生時代後期の鼓型器台や複合口縁の甕が出土している。他に、遺構外から弥生時代中葉から終末期の土器が出土し、遺構数は少ないが周辺に当該期の遺構の存在を窺わせる。

### 古墳時代（第77図③）

掘立柱建物跡2棟（SB01、02）、溝、土坑、柱穴を検出している。SB01、02は重複し、柱穴内から土師器、弥生土器、繩文土器が出土している。SB01は1間×2間以上の建物である。検出した柱穴5基の内3基から炭化物が出土し、また1基から炭化した柱材が確認されていることから焼失建物の可能性が高い。また、SP04では炭化物の下から複合口縁の甕が出土している。この土器は出土状況から柱を立てる前に入れられたもので、地鎮などの祭祀に伴い入れられた可能性も示唆される。出土遺物から古墳時代前期初頭と捉える。SB02はSB01と重複する建物である。出土遺物には土師器や弥生土器の甕片が含まれ、遺物から明確な時期は判断できない。したがって、SB01との新旧関係は不明である。

溝は東西方向に数本みられる。繩文土器、弥生土器、土師器、須恵器が混在して出土し、遺構は古墳時代以降の所産である。性格や用途は不明である。

以上、廻り遺跡の成果について述べてきた。削平を受けた状況下において、繩文時代や古墳時代の建物跡を検出できたことは大きな成果と言える。特に、繩文時代の建物については2棟の可能性が考えられ、集落を想定させる。島根県内における繩文時代の集落の調査事例は山間部に多く、松江市や出雲市など平野部に少ない傾向にある。宍道湖北側では繩文時代の遺跡は少なく、また、建物は古曾志善坊遺跡で検出された竪穴住居状遺構のみである。この遺構の詳細な時期は不明で、今回のように明確な時期の建物跡が確認されたことは注目される点である。

遺物では繩文時代や古墳時代の他に、弥生土器が出土している。これは調査区周辺に当該期の遺構の存在を示唆するものであり、繩文時代から古墳時代まで断続的に生活が続いていると考えられる。また、調査区東側を西長江川が流れ、西側には低丘陵が続くことから、遺構、集落の本体は地形から推察すれば調査区西側、低丘陵斜面にあったものと思われる。

今回の調査成果は集落の様相を知るうえで貴重な資料となり得た。今後資料の蓄積が進み、調査区周辺及び宍道湖北岸における集落の実態が解明されることを期待したい。

註

- (1) 历年較正年代法とは、従来の放射性炭素測定年代は空気中の放射性炭素の濃度が一定であったという仮説に建っていたが、播れが生じることが明らかになり、測定値を補正した年代のこと。

【参考文献】

国土交通省中国地方整備局 烏根県教育委員会 2007 『林原遺跡』

鳥根県飯石郡教育委員会 2010 『五明田遺跡(Ⅲ)』

匹見町教育委員会 1990 石ヶ坪遺跡

表8 勢り遺跡遺構一覧表(1区)

調査区	遺構名	旧遺構名	規 模 (m)			出 土 遺 物				時 期
			直径 長さ	幅	深さ	縄文 土器	弥生 土器	土師器	須恵器	
1区	SK01	SK05	1.36	0.73	0.06	○	○			古墳4期
1区	SK02	SK03	1.23	0.46	0.17	○				古墳5期
1区	SK03	SK09	1.53	0.74	0.16	○				弥生時代後期・V-2様式
1区	SK04	SK10	1.18	0.53	0.04					
1区	SK05	SK14	0.68	0.28	0.21					
1区	SK06	SK12	1.25	1.00	0.04		○			古墳時代以降
1区	SD01	SD01	1.44	0.84	0.20	○	○	○		古墳時代以降
1区	SD02	SD02	2.04	1.10	0.12	○		○	○	古墳時代以降
1区	SD03	SD09	1.95	0.87	0.07	○	○	○		古墳時代以降
1区	SD04	SD08	2.97	0.80	0.28	○		○		古墳時代以降
1区	SD05	SD05	1.93	0.46	0.14					
1区	SD06	SD07	1.00	0.33	0.05					
1区	SD07	SD03	2.10	0.67	0.04		○			古墳時代以降
1区	SD08	SD04	2.62	0.65	0.06	○		○		古墳時代以降
1区	SD09	SD06-1	2.24	0.51	0.06					
1区	SD10	SD06-2	1.49	0.35	0.09					
1区	SP01	SK01	0.59	0.56	0.55		○			古墳時代初頭 (草田7期)
1区	SP02	SK08	0.71	0.60	0.48	○	○	○		
1区	SP03	SP29	0.66	0.65	0.26					
1区	SP04	SK02	1.20	0.58	0.42		○			
1区	SP05	試掘 ピット	0.48	0.36	●		○			
1区	SP06	SP02	0.28	0.23	0.08		○			古墳時代以降
1区	SP07	SK07	0.53	0.42	0.14					
1区	SP08	SP30	0.58	0.52	0.16		○	○		
1区	SP09	SP12	0.38	0.28	0.34	○	○	○		
1区	SP10	SP04	0.48	0.33	0.12				○	
1区	SP11	SP08	0.57	0.54	0.17		○			古墳時代以降
1区	SP12	SP09	0.52	0.52	0.28		○			古墳時代以降
1区	SP13	SP10	0.18	0.17	0.18					
1区	SP14	SP11	0.18	0.16	0.12					
1区	SP15	-	0.43	0.30	0.80					
1区	SP16	SP03	0.32	0.24	0.30		○			古墳時代以降
1区	SP17	SP01	0.23	0.22	0.39		○			古墳時代以降
1区	SP18	SP15	0.24	0.21	0.08				○	
1区	SP19	SP16	0.27	0.19	0.06		○			古墳時代以降
1区	SP20	SP31	0.33	0.32	0.28					
1区	SP21	SP17	0.18	0.14	0.05					
1区	SP22	SP18	0.38	0.16	0.09		○			古墳時代以降
1区	SP23	SP32	0.18	0.12	0.08					
1区	SP24	SP34	0.34	0.17	0.10					
1区	SP25	SP25	0.30	0.18	0.05					
1区	SP26	SP22	0.49	0.37	0.34					

調査区	遺構名	旧遺構名	規 模 (m)			出 土 遺 物				時 期
			直径 長さ	幅	深さ	縄文 土器	有生 土器	土師器	須恵器	
1区	SP27	SP19	0.28	0.28	0.12					
1区	SP28	SP20	0.30	0.21	0.06					
1区	SP29	SP21	0.22	0.14	0.08					
1区	SP30	SK18	0.40	0.37	0.20					
1区	SP31	SP23	0.34	0.27	0.04					
1区	SP32	SP24	0.24	0.23	0.03					
1区	SP33	SK04	0.43	0.36	0.06		○			弥生時代以降
1区	SP34	SP05	0.58	0.34	0.04		○			弥生時代以降
1区	SP35	SP06	0.28	0.27	0.08	○				縄文時代以降

## (2区)

調査区	遺構名	旧遺構名	規 模 (m)			出 土 遺 物				時 期
			直径 長さ	幅	深さ	縄文 土器	有生 土器	土師器	須恵器	
2区	SK07	SK01	1.50	(0.59)	0.23					
2区	SK08	SK02	1.64	(0.49)	0.12					
2区	SK09	SP05	0.72	0.40	0.09	○				
2区	SK10	SP06	0.60	0.56	0.25	○				縄文時代後期前半
2区	SK11	SP07	0.73	0.47	0.33	○				縄文時代後期前半
2区	SK12	SK04	0.61	0.48	0.17	○				縄文時代後期前半
2区	SK13	SP11	0.48	0.42	0.06	○				
2区	SP36	SP01	(0.25)	0.18	0.05					
2区	SP37	SP25	0.70	0.34	0.19					
2区	SP38	SP02	0.35	0.29	0.14					
2区	SP39	SP03	0.45	0.36	0.11					
2区	SP40	SK03	0.47	0.27	0.03					
2区	SP41	SP26	0.20	0.20	0.04					
2区	SP42	SP21	0.50	0.28	0.07					
2区	SP43	SP17	0.76	0.26	0.08				○	
2区	SP44	SP16	0.23	0.17	0.04				○	
2区	SP45	SP18	0.47	0.45	0.05	○			○	
2区	SP46	SP15	0.32	0.23	0.17				○	
2区	SP47	SP04	0.42	0.28	0.07	○				縄文時代後期前半
2区	SP48	SP10	0.73	0.46	0.05	○				不明
2区	SP49	SP20	0.44	0.36	0.27	○				不明
2区	SP50	SP23	0.75	0.48	0.82	○				縄文時代後期前半
2区	SP51	SP24	1.43	0.43	0.56	○				縄文時代後期前半
2区	SP52	SP19	0.40	0.36	0.25	○				縄文時代後期
2区	SP53	-	-	-	-					
2区	SP54	SP13	0.42	0.40	0.19	○				不明
2区	SP55	SP14	0.40	0.27	0.07	○				不明
2区	SP56	SP12	0.35	0.31	0.22	○				不明

表9 勢り遺跡遺物観察表(土器)

遺物 番号	区	遺物名	出土土層	種類	器種	法 倍 (cm)			調整・文様の特徴	色調	備考	
						口径	底径	高さ				
54-1	1区	T-1		土師器	甕	複合口縁	13.4	-	10.7 外 内 内 内 内	褐色 褐色 褐色 褐色 褐色	古墳時代初頭	
59-1	1区	SB01 SP04	埋土・3層	弥生土器	底部	-	4.0	1.0	外 内 内 内 内	浅黄褐色 黑色 黑色	弥生時代	
59-2	1区	SB01 SP01	埋土・1層	土師器	陶土器	9.8	-	3.4	外 内 内 内 内	灰色 灰色 灰色 灰色 灰色	古墳時代初頭、草田7期	
59-3	1区	SB01 SP04	埋土・3層	土師器	甕	複合口縁	22.8	-	10.4 外 内 内 内 内	深黄色 浅黄色 浅黄色 浅黄色 浅黄色	古墳時代初頭、草田7期	
60-1	1区	SB02 SP08	埋土・2層	弥生土器	甕	-	-	2.6	外 内 内 内 内	深黄色 深黄色 深黄色 深黄色 深黄色	弥生時代終末期	
62-1	1区	SK01	埋土		鼓型器	-	-	3.7	外 内 内 内 内	褐色 褐色 褐色 褐色 褐色	草田6~7期	
62-2	1区	SK01	埋土		鼓型器	-	-	4.5	外 内 内 内 内	褐色 褐色 褐色 褐色 褐色	草田6~7期	
62-3	1区	SK01	埋土	須恵器	环身	-	-	3.9	外 内 外 内 内 内	回転ナデ。回転ヘラ削り 回転ナデ 灰色 白色 白色 白色	後晩4期	
64-1	1区	SK02	埋土	弥生土器	甕	複合口縁	17.8	-	5.2	外 内 内 内 内 内	褐色 褐色 褐色 褐色 褐色 褐色	草田4~5期
66-1	1区	SK03	埋土	弥生土器	鼓型器	-	14.8	4.4	外 内 外 内 内 内	褐色 褐色 褐色 褐色 褐色 褐色	V-2様式	
68-1	1区	SD01	埋土	弥生土器	壺・甕	-	-	2.2	外 内 外 内 内 内	褐色 褐色 褐色 褐色 褐色 褐色	V-2様式	
68-2	1区	SD02	埋土	須恵器	壺脚部下半	-	-	6.0	外 内 外 内 内 内	回転ヘラ削り 回転ナデ 灰色 白色 白色 白色	後期	
68-3	1区	SD03	埋土	縄文土器	口縁部	-	-	2.6	外 内 外 内 内 内	沈線。登貝条幅 風化 白色 白色 白色 白色	後期	
68-4	1区	SD04	埋土	縄文土器	腹部	-	-	2.5	外 内 外 内 内 内	沈線。原形不明の条幅 風化 白色 白色 白色 白色	後期	
71-1	2区	SB01 SP50	埋土・1層	縄文土器	深鉢	-	-	2.2	外 内 外 内 内 内	朝日 風化 白色 浅黄色	後期前葉、五明田式	
71-2	2区	SB01 SP50	埋土・1層	縄文土器	浅鉢	-	-	2.9	外 内 外 内 内 内	二枚貝条痕 屈曲面に斜び螺旋 ナデ 褐色 褐色	後期前葉、布勢式	
71-3	2区	SB01 SP50	埋土・1層	縄文土器	深鉢	-	-	3.4	外 内 外 内 内 内	貝殻面による短沈線と 円形刺突文 風化 褐色 褐色	後期前葉、布勢式	
71-4	2区	SB01 SP52	埋土・2層	縄文土器	底部	-	7.1	1.5	外 内 外 内 内 内	褐色 褐色 白色 白色 白色 白色	後期前葉、五明田式・福田K II式	
73-1	2区	土坑群 SK09	埋土	縄文土器	浅鉢	-	-	3.3	外 内 外 内 内 内	褐色 褐色 褐色 褐色 褐色 褐色	後期	
73-2	2区	土坑群 SK10	埋土	縄文土器	深鉢	-	-	6.1	外 内 外 内 内 内	卷貝殻頂部による円形刺突 文 二枚貝条痕 白色 白色	補修孔あり、中期末	
73-3	2区	土坑群 SK10	埋土	縄文土器	浅鉢	-	-	1.5	外 内 外 内 内 内	唐消費文 ナデ 褐色 褐色	後期前葉、五明田式・福田K II式	
73-4	2区	土坑群 SK10	埋土	縄文土器	浅鉢(ボル型)	-	-	3.4	外 内 外 内 内 内	唐消費文。沈線 ナデ 褐色 褐色	後期前葉、福田K II式	
73-5	2区	土坑群 SK10	埋土	縄文土器	浅鉢	-	-	2.4	外 内 外 内 内 内	縄文。沈線 ナデ 褐色 褐色	後期前葉、福田K II式	
73-6	2区	土坑群 SK10	埋土	縄文土器	-	-	-	-	外 内 外 内 内 内	縄文 卷貝殻頂部による円形刺突 文 風化 白色 白色	後期前葉	
73-7	2区	土坑群 SK10	埋土	縄文土器	深鉢	-	-	5.0	外 内 外 内 内 内	口縁端部に斜目 口縁端部に沈線 突起部に刺突文 調整は原形不規の条痕 ナデ 白色 白色	縄文土器 後期前葉、布勢式	
73-8	2区	土坑群 SK10	埋土	縄文土器	-	-	7.4	1.8	外 内 外 内 内 内	褐色 褐色 白色 白色 白色 白色	白色 白色 白色 白色 白色 白色	
73-9	2区	土坑群 SK11	埋土	縄文土器	深鉢	-	-	2.9	外 内 外 内 内 内	唐消費文 ナデ 褐色 褐色 褐色 褐色	後期前葉 五明田式・福田K II式	
73-10	2区	土坑群 SK12	埋土	縄文土器	深鉢	-	-	2.0	外 内 外 内 内 内	沈線 褐色 褐色 白色 白色 白色	後期前葉 白色 白色 白色 白色 白色 白色	
74-1	2区	遺構外	基盤削上面	縄文土器	浅鉢	-	-	4.5	外 内 外 内 内 内	縄文。(J)字文 ナデ 褐色 褐色 褐色 褐色	後期前葉、五明田式	
74-2	2区	遺構外	基盤削上面	縄文土器	(ハサツ型)	-	-	3.5	外 内 外 内 内 内	縄文。沈線 ナデ 褐色 褐色 褐色 褐色	外面に赤彩 後期前葉、福田K II式	
74-3	2区	遺構外	基盤削上面	縄文土器	双耳壺 把手	-	-	3.0	外 内 外 内 内 内	褐色 褐色 白色 白色 白色 白色	後期前葉	
74-4	2区	遺構外	基盤削上面	縄文土器	双耳壺 把手部分	-	-	4.0	外 内 外 内 内 内	沈線 ナデ 褐色 褐色 褐色 褐色	後期前葉	
74-5	2区	遺構外	基盤削上面	縄文土器	深鉢	-	-	3.8	外 内 外 内 内 内	褐色 褐色 白色 白色 白色 白色	後期	
74-6	2区	遺構外	基盤削上面	縄文土器	浅鉢	-	-	2.0	外 内 外 内 内 内	沈線 ナデ 褐色 褐色 褐色 褐色	後期中葉、彦崎式	
74-7	1区	遺構外	東壁剥離断面 13層	縄文土器	-	-	-	3.0	外 内 外 内 内 内	肥厚部と肥厚薄下側に沈線 ナデ 褐色 褐色 褐色 褐色	後期中葉。彦崎K十式	

遺物番号	区	遺構名	出土土層	種類	器種	法量(cm)			調査・文様の特徴	色調	備考	
						口径	底径	高さ				
74-8	2区	遺構外	基盤層上面	縄文土器	底部	-	8.0	2.0	内 ナデ 内 風化	外 棕色 内 にぶい黄褐色		
74-9	1区	遺構外	基盤層上面	弥生土器	壺・瓶	-	-	5.0	外 繩目直線文 内 ハラミガキ	外 淡黄褐色 内 淡黄褐色	中葉、II-I様式	
74-10	2区	遺構外	基盤層上面	弥生土器	壺	複合口縁	19.2	-	4.0	外 縄目織文 内 風化	外 黄白色 内 黄白色	後期、V-1様式
74-11	2区	遺構外	基盤層上面	弥生土器	壺	複合口縁	20.6	-	3.2	外 縄目織文 内 風化	外 嫌褐色 内 嫌褐色	後期、V-2様式
74-12	2区	遺構外	基盤層上面	弥生土器	鼓型器台	-	16.6	4.8	外 縄目織文 内 風化	外 淡黃色 内 淡黃色	後期、V-2様式	
74-13	1区	遺構外	東壁土層断面 14層	弥生土器	壺	複合口縁	21.2	-	5.7	外 痛ナゲ 内 痛ナゲ、ヘラ削り	外 黄白色 内 黄白色	草田5期
74-14	1区	遺構外	東壁土層断面 16層		鼓型器台	-	-	2.8	外 風化 内 風化	外 淡赤褐色 内 淡赤褐色	弥生時代終末～古墳時代 初め頃	
74-15	1区	遺構外	東壁土層断面 17層	土師器	高円 环甌	-	-	2.3	外 ハケ目 内 風化	外 にぶい黄褐色 内 にぶい黄褐色	古墳時代前半	
74-16	1区	遺構外	基盤層上面	土師器	高円 脚端部	-	11.1	2.0	外 風化 内 風化	外 にぶい黄褐色 内 棕色	古墳時代	

## (石製品)

遺物番号	遺構名	出土土層	種類	法量(cm)			重量(g)	備考
				直径	最大幅	最大厚		
74-17	遺構外	基盤層直上	石斧	11.6	4.7	3.6	270	刃部欠損
74-18	遺構外	基盤層直上	石斧	6.6	4.3	3.0	106	刃部欠損

## (柱・板材)

遺物番号	区	遺構名	出土土層	種類	法量(cm)			樹種	備考
					長さ	最大幅	最大厚		
71-5	2区	SI01 SP49	埋土・1層	柱	152	8.0	3.2		ミカン剥材
71-6	2区	SI01 SP50	埋土・2層	木片	59.2	6.5	4.0		両端の幅が広く、中央部が狭い
71-7	2区	SI01 SP51	埋土・2層	木片	66.5	12.9	10.3		中央部分に穴が開いている
71-8	2区	SI01 SP52	埋土・1層	柱	22.8	10.5	7.1		ミカン剥材



# 写 真 図 版





臼畠遺跡調査前全景(南西から)



調査区中央から南西側完掘状況(北東から)



調査区南西側完掘状況(北東から)



調査区中央完掘状況(南東から)



調査区北東側完掘状況(北東から)



調査区東西土層断面(北東から)

白煙遺跡  
図版 4



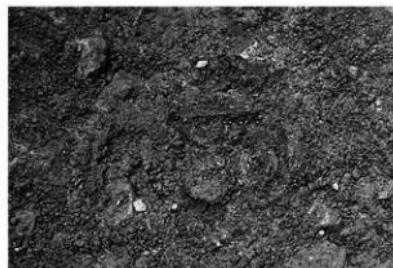
ST01 遺物出土状況



ST01 完掘状況(南東から)



ST02 遺物出土状況



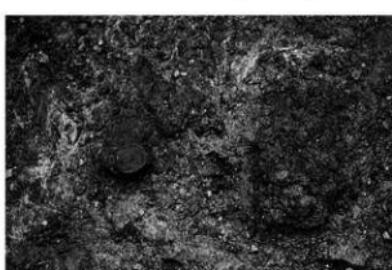
ST03 遺物出土状況



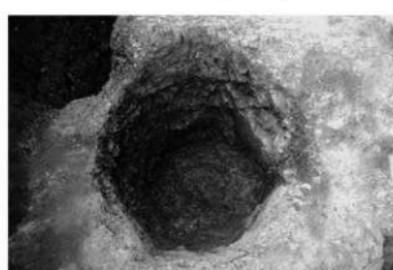
ST02・ST03 完掘状況(北西から)



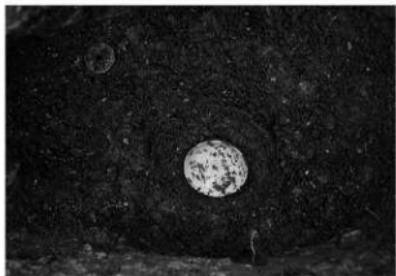
ST04 完掘状況(東から)



ST05 遺物出土状況



ST05 完掘状況(北西から)



ST06 遺物出土状況



ST06 完掘状況 ( 南東から )



ST07・ST08 完掘状況 ( 北西から )



ST09 完掘状況 ( 南東から )



ST10 遺物出土状況



ST10 完掘状況 ( 北から )

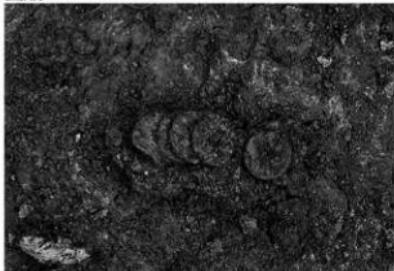


ST11 遺物出土状況



ST11 完掘状況 ( 北から )

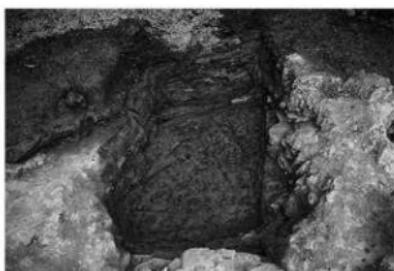
白煙遺跡  
図版 6



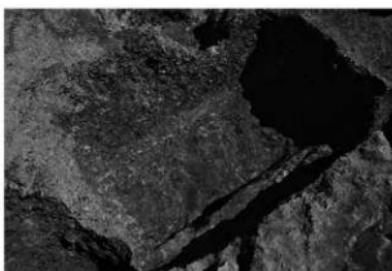
ST12 遺物出土状況



ST12 完掘状況(南西から)



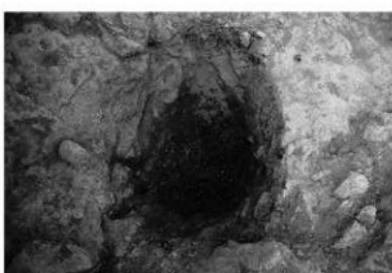
ST13 完掘状況(南東から)



ST15 完掘状況(北西から)



ST14 遺物出土状況



ST14 完掘状況(北西から)



ST16 遺物出土状況



ST16 完掘状況(南東から)



ST17 遺物出土状況



ST17・ST18 完掘状況(北東から)



ST19 遺物出土状況



ST19 完掘状況(北西から)



ST20 遺物出土状況



ST20 完掘状況(南東から)



ST21 遺物出土状況



ST21 完掘状況(北東から)



ST22 遺物出土状況



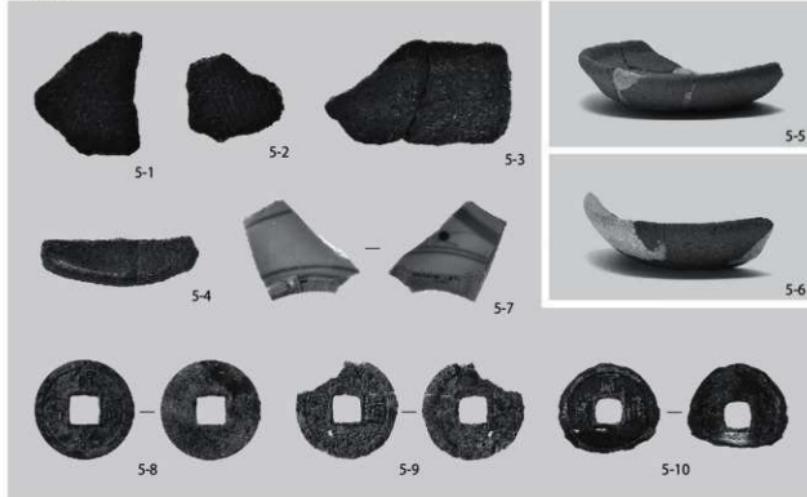
ST22・ST23 完掘状況(北東から)



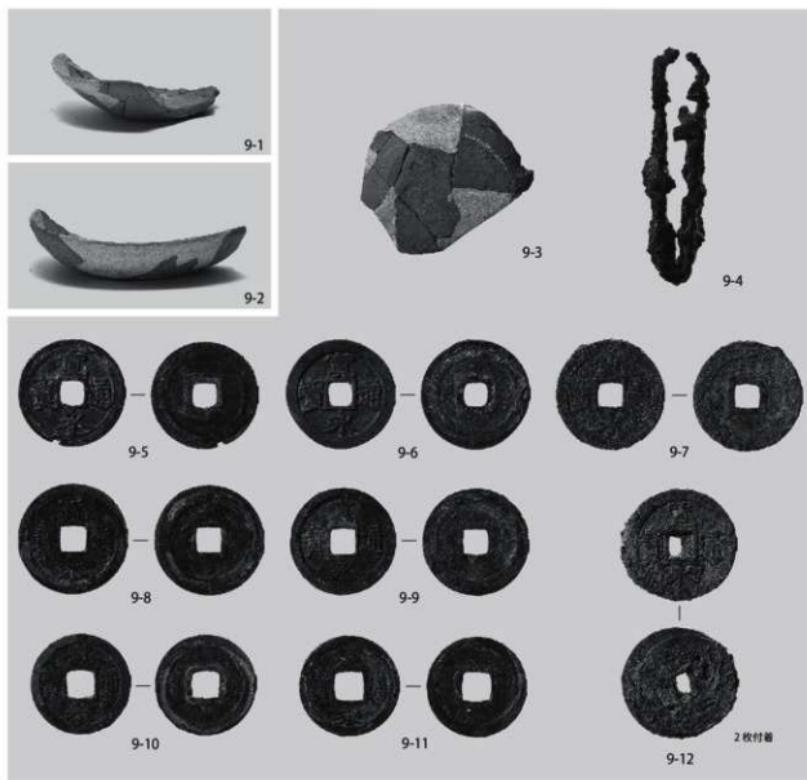
墓塔・墓標・自然石検出状況(北東から)



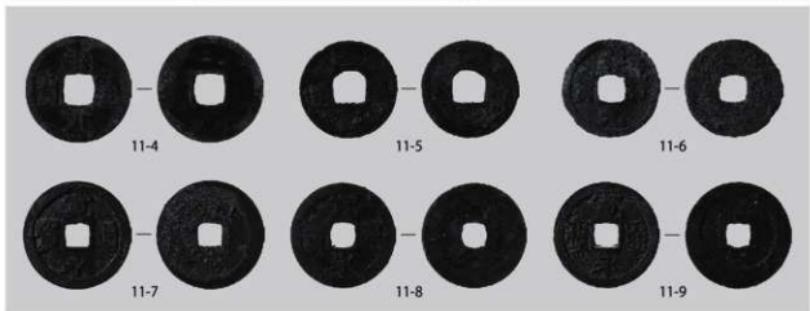
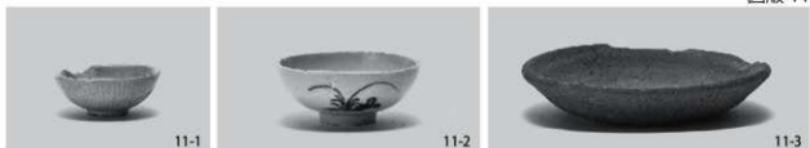
通路検出状況(北東から)



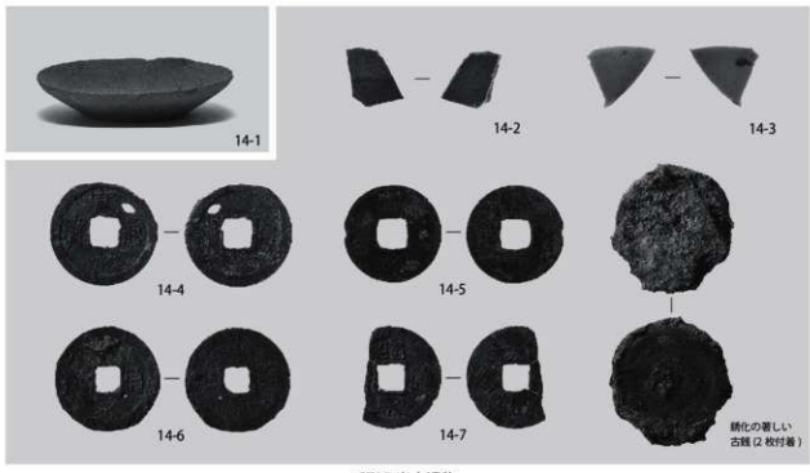
試掘トレンチ出土遺物



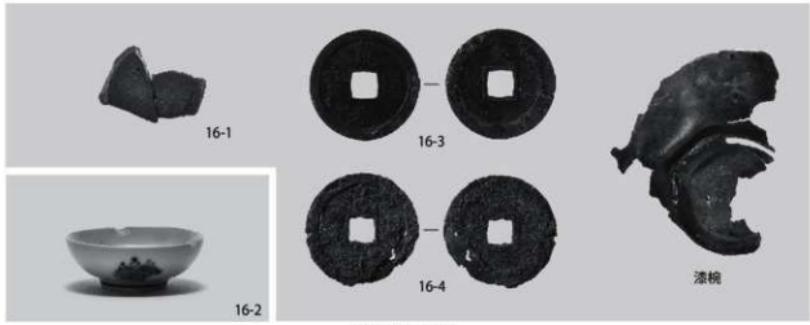
ST01 出土遺物



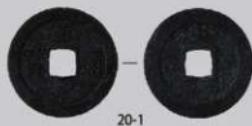
ST02・ST03 出土遺物



ST05 出土遺物



ST06 出土遺物



ST09 出土遺物



22-2



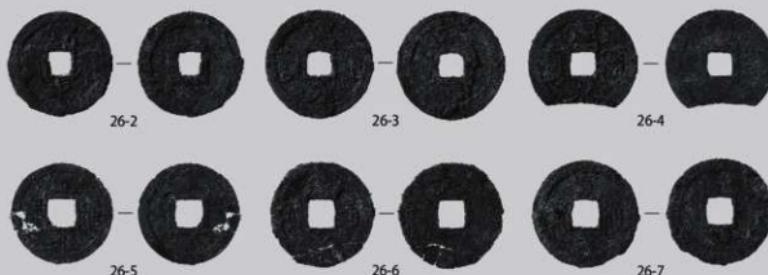
22-3



ST11 出土遺物

24-1

ST10 出土遺物



ST12 出土遺物



4枚付帯

3枚付帯

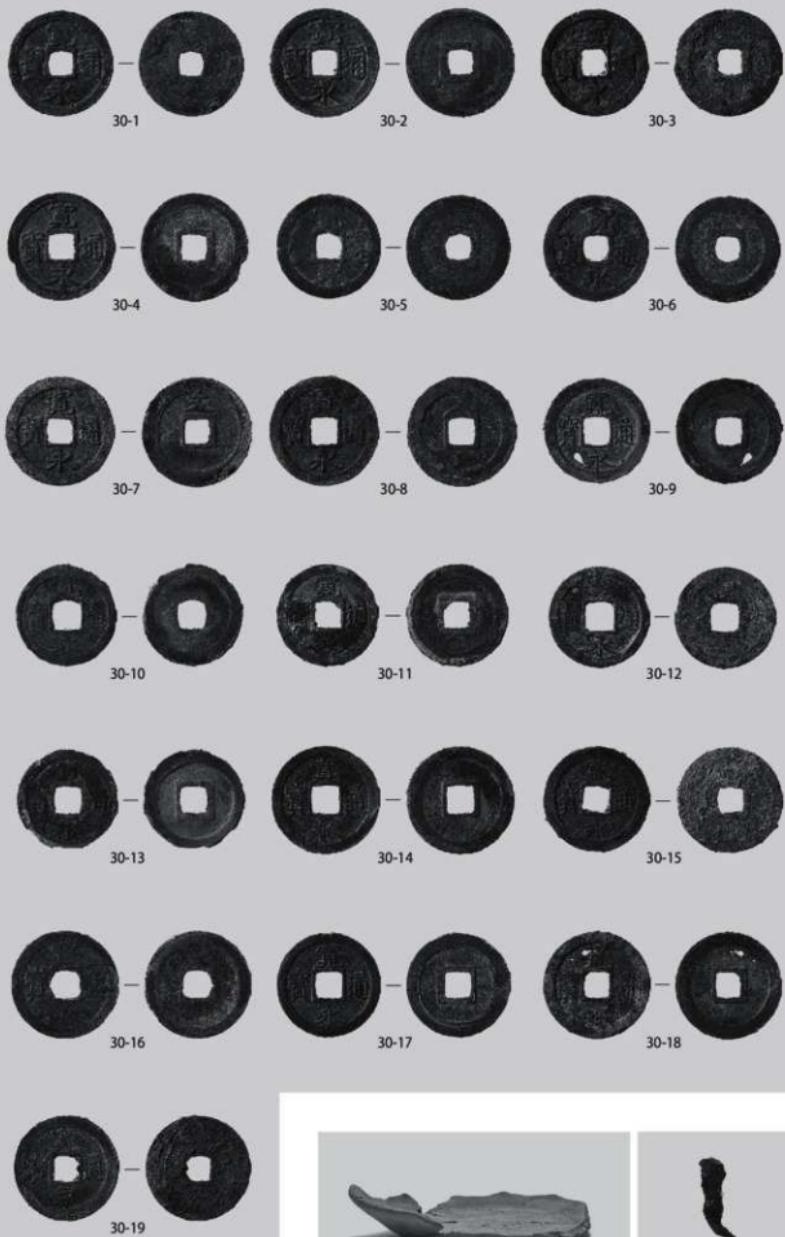


銹化の著しい古錢



銹化の著しい古錢

ST13 出土遺物



ST14 出土遺物

ST15 出土遺物



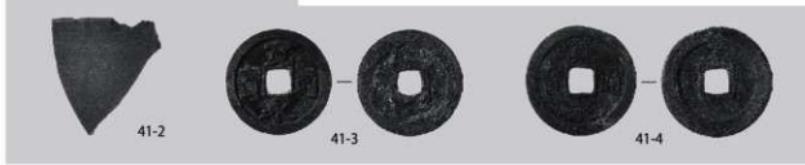
ST16 出土遺物



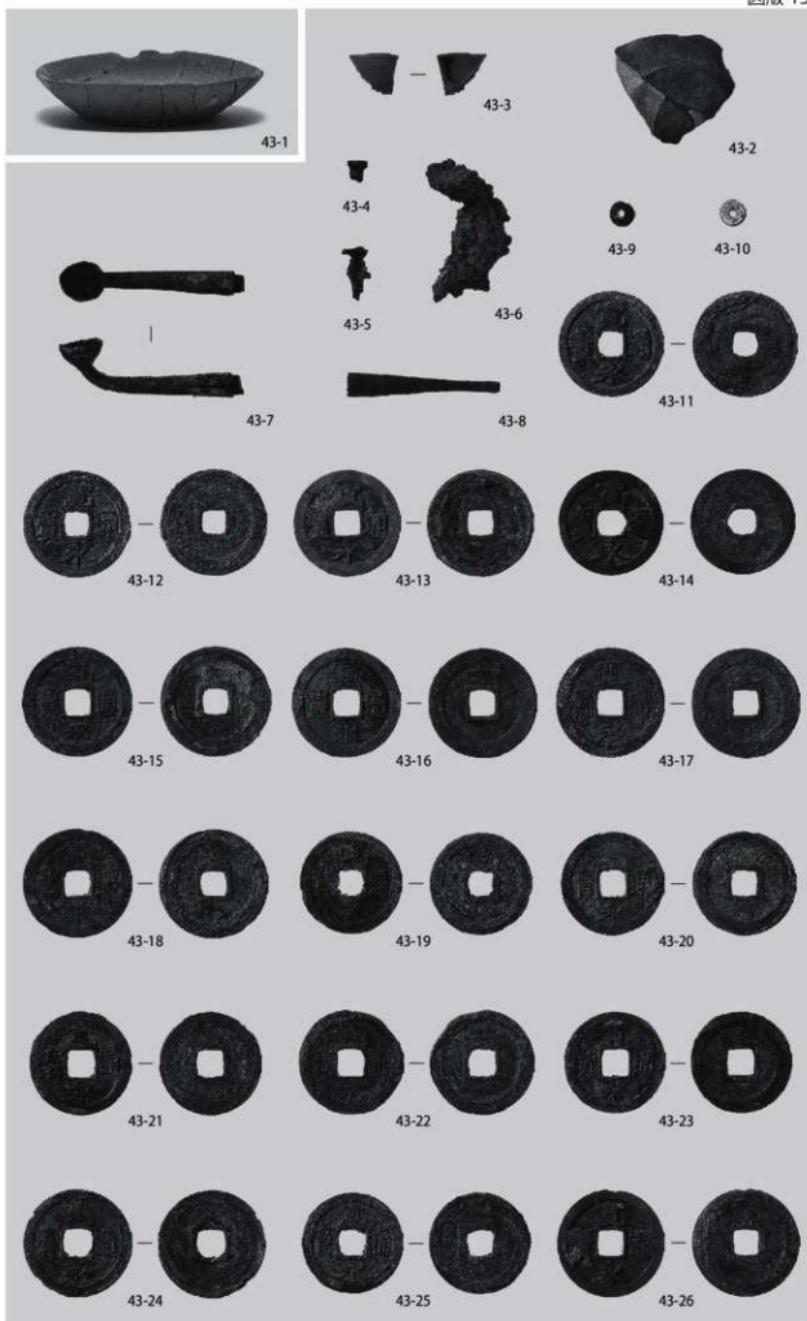
ST17 出土遺物



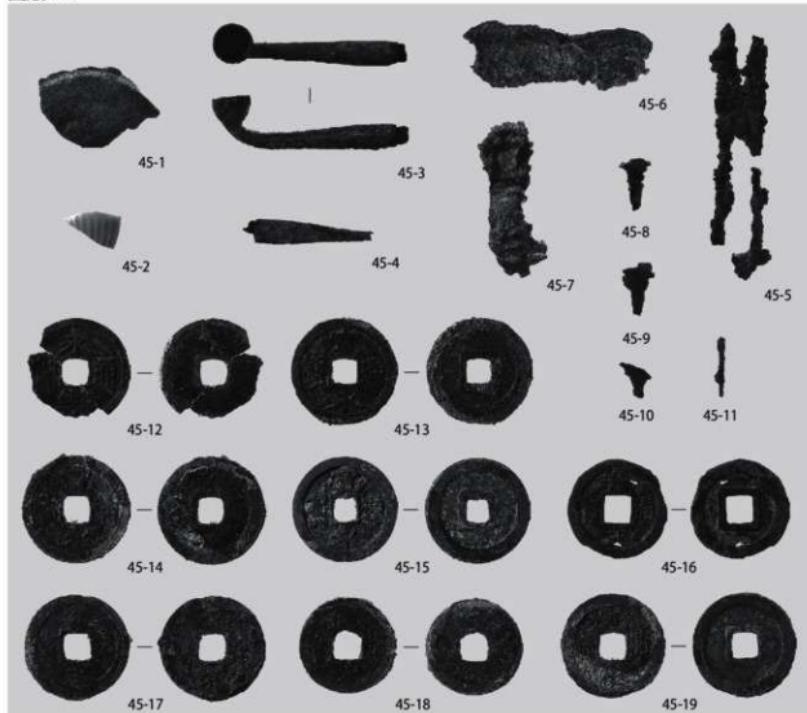
ST19 出土遺物



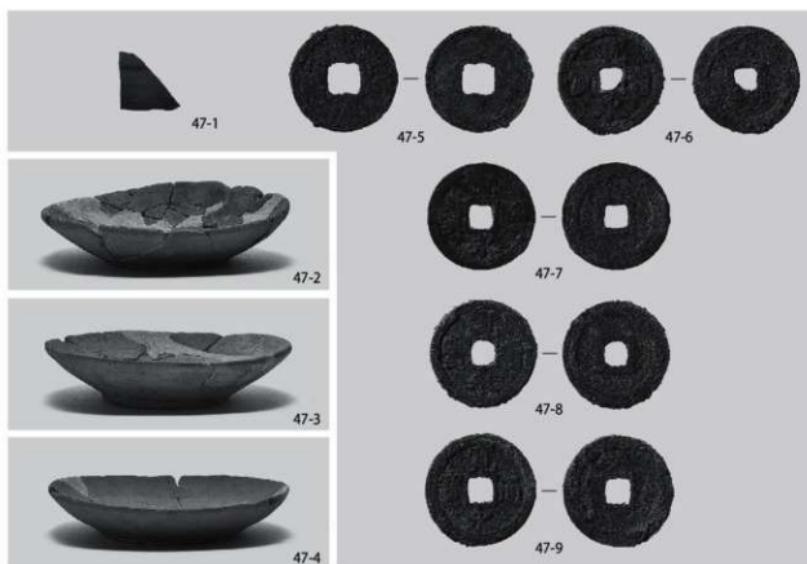
ST20 出土遺物



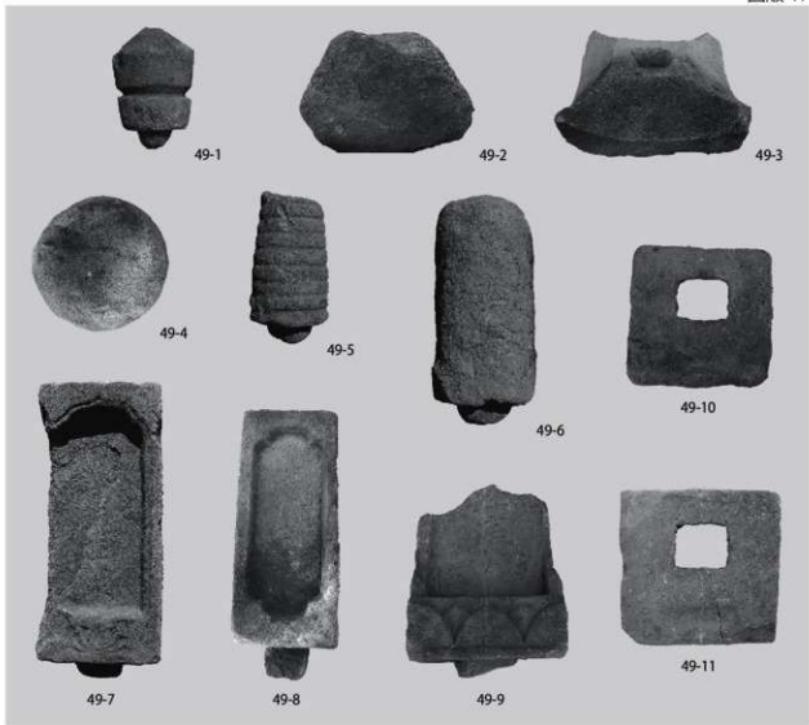
ST21 出土遺物



ST22 出土遺物



ST23 出土遺物



墓塔・墓標



通路出土遺物

遺構外出土遺物



廻り遺跡調査前全景（南西から）



1区完掘状況（南西から）



SB01( 南西から )



SP01( 北東から )



SP03( 南西から )



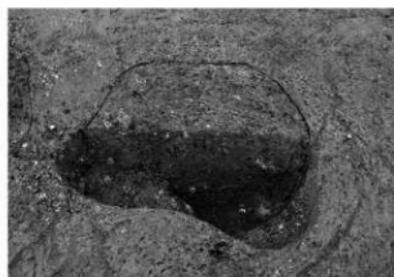
SP04( 東から )



SP04 柱痕遺物出土状況 ( 南西から )



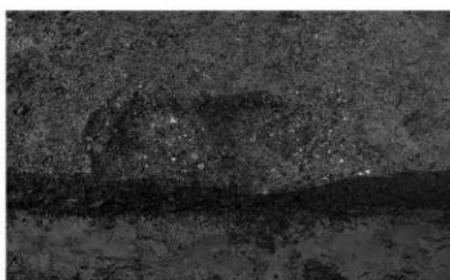
SB02( 北から )



SP07( 南西から )



SP08( 南西から )



SK01( 東から )



1区北東側完掘状況(北東から)



1区南西側完掘状況(南西から)



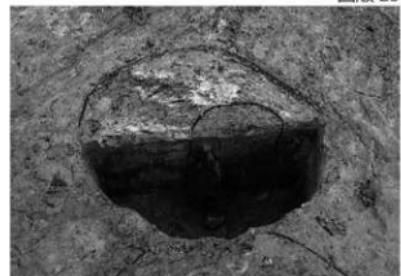
2 区完掘状況（南西から）



SI01 完掘状況（東から）



SP49( 北西から )



SP52( 北東から )



SP50( 南西から )



SP51( 南西から )



2区土坑群(北東から)



SK09(南東から)



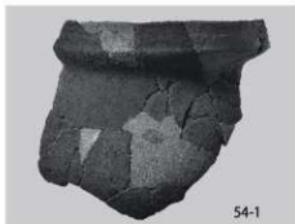
SK10(南西から)



SK11(東から)

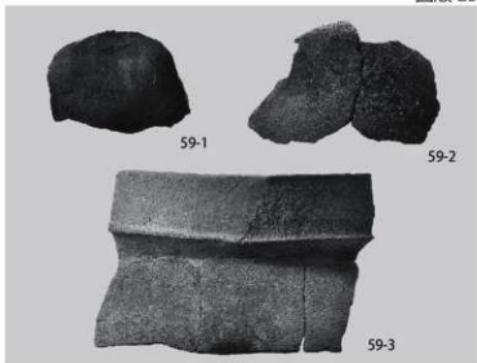


SK12(北西から)



54-1

試掘トレンチ出土遺物



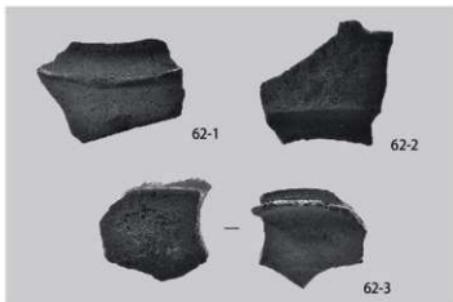
59-1

59-2

SB01 出土遺物

60-1

SB02 出土遺物

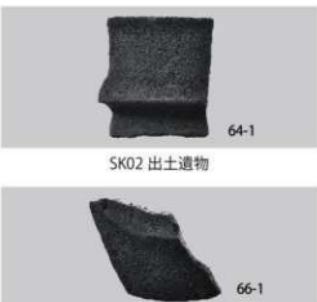


62-1

62-2

62-3

SK01 出土遺物

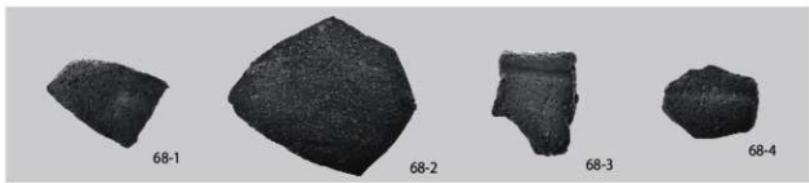


64-1

SK02 出土遺物

66-1

SK03 出土遺物



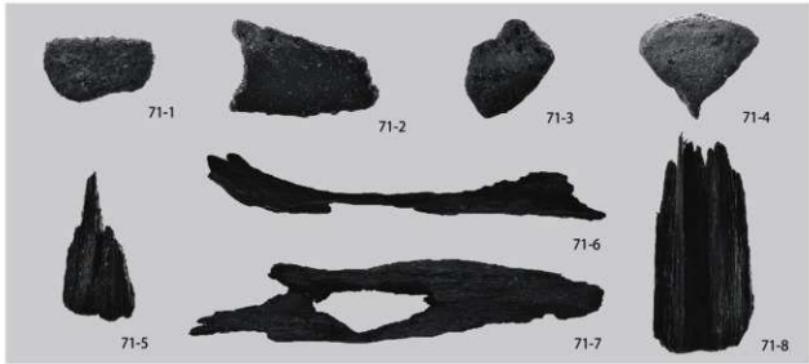
68-1

68-2

68-3

68-4

SD01・02・03・04 出土遺物



71-1

71-2

71-3

71-4

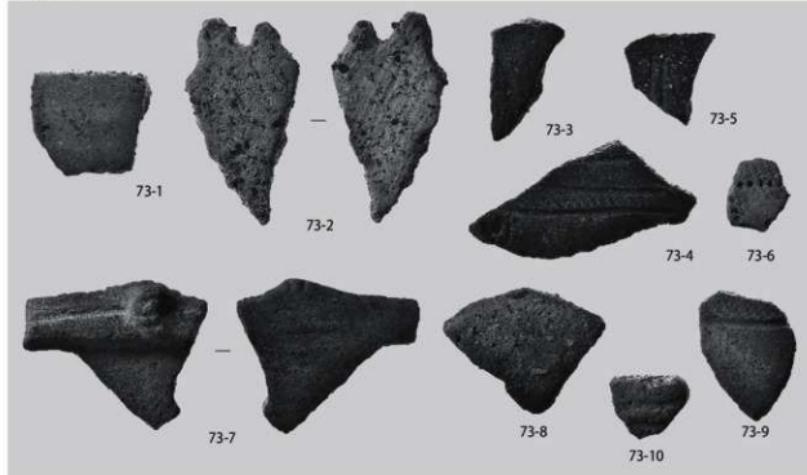
71-5

71-6

71-7

71-8

SI01 出土遺物



2区土坑群出土遺物



1区・2区遺構外出土遺物

# 報告書抄録

ふりがな	うすばたいせき・めぐりいせき						
書名	臼畠遺跡・廻り遺跡						
副書名	市道古浦西長江線道路整備事業に伴う発掘調査報告書						
巻次	1						
シリーズ名	松江市文化財調査報告書						
シリーズ番号	第172集						
編著者名	廣濱貴子 徳永隆 渡邊正巳						
編集機関	松江市教育委員会 (松江市歴史まちづくり部 まちづくり文化財課 埋蔵文化財調査室) 〒690-8540 島根県松江市末次町86番地 TEL:0852-55-5284						
所在地	公益財団法人松江市スポーツ振興財団(埋蔵文化財課) 〒690-0401 島根県松江市島根町加賀賀1263-1 TEL:0852-85-9210						
発行年月日	2016年1月						
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	東経			
臼畠遺跡	しまねけんまつえし 島根県松江市 かしまちちょうこうとう 鹿島町古浦 うすばたけ 臼畠319	32201	K112	35° 31' 04"	20130716 ～ 20130925	72.0m <sup>2</sup>	市道古浦 西長江線 道路整備 事業
廻り遺跡	しまねけんまつえし 島根県松江市 はじめがわこうよう 西長江町468, 477-2	32201	D1133	132° 58' 32"			
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
臼畠遺跡	近世墓	近世	墓壙 通路	土師器 近世陶磁器 金属製品 錢貨 木製品 墓塔・墓標	近世墓23基を検出した。遺物は墓壙内から陶磁器、土師器、金属製品、錢貨などが出土している。 また、周辺には墓塔や墓標が散在していた。		
廻り遺跡	集落跡	縄文時代 ～ 古墳時代	竪穴建物跡 掘立柱建物跡 土坑 溝	縄文土器 弥生土器 土師器 須恵器 石製品 柱・板材	縄文時代後期前葉頃の竪穴建物跡1棟、古墳時代初頭頃の掘立柱建物跡2棟、その他縄文時代から古墳時代にかけての土坑や溝を検出し、縄文時代から古墳時代の遺物が出土している。		

---

松江市文化財調査報告書 第172集  
市道古浦西長江線道路整備事業に伴う発掘調査報告書1

白畠遺跡  
廻り遺跡

平成28(2016)年1月

発行 烏根県松江市教育委員会  
公益財団法人松江市スポーツ振興財団

印刷 ㈲高浜印刷  
鳥根県松江市東長江町902-57

---